Movic Game Collection 8

館山　緑

ONE
～輝く季節へ～



" There is such a thing as forever. . . "
Those words, I wondered who said them.
The words I happened to remember as I looked up at the sky.
They seemed to be the start of something.
Yeah,they were definitely the beginning. The beginning of the end.
There's voices calling me from opposite directions.

Movic Game Collection 8



館山　緑

ONE
～輝く季節へ～

" There is such a thing as forever. . . "

Those words, I wondered who said them.

The words I happened to remember as I looked up at the sky.

They seemed to be the start of something.

Yeah,they were definitely the beginning. The beginning of the end.

There's voices calling me from opposite directions.

ONE ～輝く季節へ～

原作◆タクティクス
文　◆館山　緑



MGC

カバーイラスト　タクティクス
本文トーン処理　SEI

プロローグ

ただ、無心に空を見上げていた。
ゆったりとした雲の流れを、空の青に見入っていた。
していたことは、それだけだった。

すぐ側で、さらさらとした髪がなびく音がする。
誰かが、一緒に空を眺めていてくれる。
でも、言葉は交わさなかった。
そして、何故か悲しかった。

「えいえんは、あるよ」
あの言葉は、誰が言ったものなのだろう。
空を見ながらふと思い出した言葉は、何かの始まりのような気がしていた。
そう、それは始まり。
終わりの始まりだった。

ぼくを呼ぶ声がする。ふたつの方向から。

どちらへと進むべきなんだろう。
側にいる君の声と、遠くからぼくを呼ぶ声。
黙って空を見上げながら考えていたのは、そんなことだった。

第１章　青空の記憶

最初は、ひどくリアルな夢なのだと思っていた。

青い空を眺める夢。傍らには誰かが一緒にいてくれる。それがあまりにもリアルすぎたので、折原浩平は起こされた時に何事かと思ってしまったほどだった。

「えーと、青空が……あ、あれ？　長森」

すぐ側に、布団をひっぺがしたままで幼なじみ、長森瑞佳が立っている。もごもご言っている浩平の顔を呆れたように見ていた。

瑞佳は学校のある日にはいつも必ず浩平の家へ寄って、寝起きの悪い浩平を起こしてくれる。それは浩平が小学校の頃にこの中崎町に引っ越してきて、一緒に遊んだりするようになってからずっと馴染んだ習慣だった。

「浩平、寝ぼけてるんだね。でも、今日はいい天気だよ」

瑞佳がカーテンをシャッ、と開けた。確かに外には清々しい青空が広がっている。しかし、浩平は違和感を拭い去れないまま窓を見ている。

「ほら、ぼうっとしてないで準備しなきゃ。もう時間があんまりないよ」

瑞佳がせき立てるように鞄と着替えを渡すと、浩平は仕方なく階下へ降りていった。

(……『この空』じゃなかったような気がするなあ)

判然としない夢の中のことを考えながら、浩平は走っていた。
後ろからは瑞佳がぱたぱたとついてくる。朝に弱い浩平は、まともに歩いて登校することはほとんどないので、毎朝こうして瑞佳とランニングをする羽目になっている。早飯の直後にランニングは絶対体に悪そうだが、そのおかげで毎朝遅刻せずに済んでいるのも事実だった。
その、走っている間にも浩平は考え込んでいた。寝起きだと頭がまともに働かないが、どうしてもあの夢が気になって仕方がなかったのだ。
(凄く、大切なことだった気がするんだけど……あれは何なんだ？)
誰かが側にいた気配。空を見上げる自分。
あの場所には何かとても大切なことがあった。それをすっかり忘れてしまっているようでひどく居心地が悪い。
何だったのだろう。
突然、瑞佳が叫ぶ。
「浩平、浩平ってば……！　前見てっ」
浩平が前を向いた時、ばさっと揺れる黒いものが見えた。
しかし、それが何であるか確認する余裕はなく、いきなり浩平の体に衝撃が走る。

「きゃあああっ！」
その黒いものが、女の子のお下げ髪であるのに気が付いたのは、アスファルトに突っ伏して見事討ち死にしている女の子の姿が眼に入ってからだった。
「これじゃあ、まるで俺が悪いみたいじゃないか」
「当然でしょっ！　それ以外の何だって言うのよ」
鬼気迫る表情で、女の子が顔を上げた。
愛らしい容貌が怒りに歪んでいる。多分怒ってさえいなければ、おとなしい感じの美少女であるのだろう。
「ねえっ、そこの人も見てたでしょっ⁉」
少女は瑞佳に援軍を求める。
瑞佳もさすがにかばいようがないのか、困ったように眉を寄せる。妙にパワフルに腹を立てているこの少女に較べて、瑞佳の表情は頼りないことこの上ない。
「うん、今のは浩平が悪い、かなあ……」
「でしょっ？　謝りなさいよっ」
「うーん、確かに今のは俺が悪くない訳ではないような気がしなくもない」
「回りくどすぎなの！　ああっ、足を痛めたじゃないのっ。急いでんのに、どうしてくれ



んのよっ」
急いでいる、という言葉で、はたと浩平は我に返った。
「実は俺も急いでるんだよ。そういう訳で長森、後を頼む」
言い終わる前に浩平は駆け出していた。
当然ながら遅刻寸前なのは瑞佳も同じなのだが、そんなことはこの際自分の遅刻には換えられない。後ろから響く少女の怒声と、瑞佳の声に全く耳を貸さず、全力疾走したのは言うまでもなかった。
どのみちさっきの少女の制服は、近隣の学校のものではない。再び逢うこともないだろう。めったにいないパワフルな少女の怒声を思い起こしながら、浩平は校門に滑り込んだのだった。

「もう、ひどいよ浩平」
瑞佳も結局ぎりぎりで間に合ったらしい。息を切らせながら、浩平の座っている窓際の一番奥の席にやってくる。
「おまえも逃げてきたのか？」
「だって、わたしが悪いんじゃないんだもん」

瑞佳が困ったように抗弁する。
「ま、いいさ。それにしてもあの女、見た目とのギャップが激しかったよな」
チャイムが鳴り、瑞佳は自分の席に戻って行った。
しかし一分後、浩平は自分の眼を疑ってしまった。
教壇に、可憐な少女が立って、にっこりと微笑んでいるではないか。
(おおっ、いきなり髭が美少女に変身している。まさかこんな高等技が使えたとは)
4月から数ヶ月のつきあいだが、そんな技が使えるのなら最初から繰り出してほしかったなどと、つまらないことを考えたが、担任の渡辺茂雄（わたなべしげお）こと、ニックネーム『髭』は、その少女の隣に立っていた。どうもむさ苦しいものを眼が拒否しただけらしい。
しかも、よく見るとその美少女は先ほど浩平とぶつかって怒声を放ったあの少女である。
浩平は頭痛がした。

七瀬留美

髭が黒板に少女の名前を書く。
「これからこのクラスの仲間となる転校生くんだ」
髭に促されて少女、七瀬留美（ななせるみ）は口を開いた。
「七瀬留美です。急な親の転勤の都合で、こんな時期外れに転校してきちゃって、すごく

不安だったんですけど、みなさん、とっても楽しそうな方達でほっとしてます」
にこっと微笑んでみせる。
その笑顔の可愛らしさに男子生徒が一気にどよめく。
二十分もしない前には物凄い剣幕で怒鳴り散らしていたのが、幻覚かと思うほどである。
しかし瑞佳の方を見ると、浩平の推測を裏付けるようにうなずいてみせている。
やはり本人なのだ。
罵声を覚悟してうっとうしい気分になった浩平とはうらはらに、他の男子生徒は美少女転校生の出現に、騒々しいほどの盛り上がりを見せていた。
「で、折原」
「……は？」
いきなり髭が浩平を呼んだ。
「廊下に机と椅子を持ってきてあるから、お前の後ろに並べてやってくれ」
窓際のこの席だけ、確かに机がひとつ少ない。並べるのならここしかないだろう。
そこまで言って万事解決といった表情で、髭が退場していった。
担任がいなければこっちのものと、男子生徒の群れがいきなり留美の周囲に集まる。それを横目で見ながら、浩平は仕方なく廊下まで机と椅子を取りに出た。横開きのドアを開

けっ放しにして、机をずりずりと引っ張って中に入れる。
一度自分の後ろにつけようとしたが、ふと思い立って自分の机を最後尾に下げ、まだ軽い机を前に入れる。そこまでした時一時間目のチャイムが鳴った。

「ありがとう。机、持ってきてもらって」
自分の席に来た留美が、浩平に笑いかける。
どうやら朝のことは憶えていないらしい。
浩平が自分の前の机を指してやると、留美は机に鞄の中身を入れ始めた。
「足はもう大丈夫なのか？」
振り返った留美は、一瞬何を言われたのか解らない表情を浮かべた。しかし、浩平の顔を凝視するといきなり剣呑な眼付きになる。
「今朝は凄い剣幕だったよな。近年まれに見る力強さだったたと思うぞ」
怒鳴り散らされる。そう思ったが、留美は根性で怒りを引っ込め、教壇で微笑んだ時と同じ笑みを貼り付けた。
「……折原くんって言ったっけ。よろしくね」
そのまま背中を向けて授業を受ける準備を始めると、教師が入って来て学級委員が号令

をかけた。

休み時間、留美の回りに集まった男子生徒の津波に押されて避難した浩平の側に、瑞佳が寄ってきた。

「七瀬さん、どんな感じだった？」

「さあなあ、何だかめちゃくちゃ猫被ってるし、よく解らん。あれじゃあ今朝とは別人じゃないか」

「きっと、おとなしそうに見えて芯のしっかりしてる子なんじゃないかな。浩平にはそんなタイプの子が向いてるんじゃない？」

「どこをどうつついたら、そういう結論に行き着くんだ」

ほわん、と人の好さそうな笑顔を浮かべて、瑞佳は続けた。

「案外運命の出逢いかもしれないよ。席も近いし、話すことも多いんじゃないかな」

こういう話題は別に初めてではない。

瑞佳は浩平の周囲に目新しい女の子が現れるたびに、その女の子のことを誉めては浩平とくっつけるような発言をする癖がある。

浩平は露骨にげんなりした顔をしてやった。

「またか。これで何十人目だと思ってるんだ」
「だって浩平って、ちゃんと面倒見てくれる人がいないと心配なんだもん」
浩平としては、瑞佳が自分のことも省みずに他人の面倒を見ているのを見て、かえって心配になるくらいである。
浩平の友人でさえ、瑞佳が浩平の恋人であると信じ込んでいる人物がいたほどなのだから、そうでない男子などは推して知るべしである。
瑞佳の方は恋のきっかけをいくつも逃しているに違いない。それでも気心の知れた幼なじみの気楽さで、他に男を探せと忠告もせず、今の状況に甘んじているのだった。
多分、瑞佳の方にもそういうところがあるのだろう。

昼休み。このクラスの男子生徒の３分の２が、窓際の留美の席に集まっていた。
購買でパンを買って戻ってくると、もはや浩平の席は他の男子生徒達に徴収されて、留美の席の隣に付けられている。蹴り飛ばして机を取り返そうとも思ったが、冬に入ったというのに妙に暑苦しい空気に嫌気がさし、そのまま回れ右をする。
「どうしたの、浩平？」
教室を出て行こうとすると、仲のよい稲木佐織と一緒に弁当をつついていた瑞佳に呼び

止められた。相変わらず小学生のように牛乳を飲みながら食事していたらしい。
浩平はちらりと自分の机の方に視線をやった。
「あの通りだ。屋上で食ってくる」
「絶対寒いよ。わたしの机で食べればいいのに」
「ま、屋上は好きだから、ひとりでいいよ」
窓から見える青空には暖かそうな太陽の光が射し込んでいる。何とかなるだろう。
浩平はそのまま教室を出た。

確かに空は青く澄み渡っていた。
しかし、骨に染み入るような寒さを含んだ風が、浩平の髪にばさばさと吹き付ける。もちろん、他に屋上で昼食をとっている物好きなどいなかった。
(うーん、失敗だったか)
かと言って、今から戻って教室で食べるのも何となく嫌だった。
仕方なく貯水タンクの脇に座り、パンの袋を破るとかじりついた。
誰か、金属製の屋上のドアを開けたらしい。ぱたぱたと軽い足音が浩平に近付いてくる。
自分のことは差し置いて物好きな人間の顔を見てやろうと振り返った。

「屋上、やっぱり寒いよ」
瑞佳だった。
浩平はしたり顔でもっともらしく言う。
「我慢できない程じゃないだろう」
「わざわざやせ我慢してまでいることないじゃない」
そんなことを言いつつも、瑞佳は浩平の隣にちょこんと腰かけ、自分のランチボックスを開ける。少しだけ食べた形跡があった。
やはり佐織に断わって、浩平を探しに来たものらしい。
「いただきまーす」
小さく手を合わせて、瑞佳が食べ始める。
「稲木はいいのか？」
「うん、浩平のところに行ってくるって言っておいたよ。それにしても、寒いねえ」
「なら遠慮なく戻れ」
浩平がすげなく言っても、瑞佳は構わずちょこちょこした手つきで箸を操り、ハンバーグのかけらを口に放り込んでいる。
しかし、現実にこの寒さは尋常ではない。

「やっぱりわたしの席で一緒に食べればよかったんだよ」
「だからってお前まで来る必要はないだろう」
「こんなところで寒さに耐えながらお昼食べてるなんて……やっぱり浩平にはしっかりした人が必要だよ」
瑞佳が大きく溜息をつく。
「何でメシと寒さの話題からそこへ行き着くんだ」
たかだか寒空の下でパンをかじっているくらいで、女の子と付き合うことを勧められてはかなわない。第一他の女の子と付き合おうにも、瑞佳が横で世話を焼いていては寄ってくるものも寄ってこないだろう。
しかし、この寒さの中で食事をするのが辛いことは事実だ。
浩平は無理やりパンを咀嚼して、お茶を流し込んだ。
「じゃ、行くぞ」
「待ってよ浩平。早いよ」
よく見ると瑞佳のランチボックスの中は、まだ半分ほどおかずが埋まっていた。卵焼きのクリームイエローが食指をそそる。
「遅いなあ。残りは教室で食えよ」

「食べてる最中でどたばたするのやだもん」
立ち上がろうとした浩平のズボンを瑞佳が半泣きの顔で引っ張る。
仕方がない。浩平はもう一度腰を降ろした。
「ごめんね」
「気にするな」
「ゆっくり食べてもいい？」
「どうぞどうぞ」
浩平は気の抜けた笑いを浮かべながら、瑞佳が食べ終わるのを待ってやった。長いつきあいだ。瑞佳の食べるのが遅いのには慣れっこである。

二人が戻った時、もうチャイムが鳴るところだった。
隣の席の悪友、住井護（すみいまもる）が何やら熱心に書き物をしていた。浩平とは仲が良く、つるんでろくでもないいたずらをしてみたり、遊んだりしている少年だ。まあ、親友と言って差し支えない相手なのかもしれない。
「どうした住井。勉強してる訳じゃ……ないんだろうな、やっぱ」
「当たり前だ。今、俺は一大プロジェクトを立案中だ。勉強なんてものと一緒にしてくれ

るな」
「一大プロジェクト？　そりゃ大きく出たな」
住井は、正確に言えば住井を含めた浩平の友人達は、冗談に命を懸ける馬鹿馬鹿しさをモットーにしているとしか思えない、ろくでもない遊び仲間だ。もちろん、他の人間から見れば、子供じみたただのおふざけでしかないのは言うまでもない。
だからこそ浩平も当然割り引いて考えている。
住井はふっ、と髪をかき上げて見せ、いつものように気障（きざ）なポーズを決める。しかし、いたずら坊主の面影を色濃く残した住井には、致命的に似合っていなかった。
「ああ、このクラスひとつを巻き込んだ巨大プロジェクトは着々と進行中だ。明日の午前中には公開することができるだろう」
明日の午前中で間に合うような話が巨大プロジェクトなのかは非常に怪しいが、そんなのはいつものことである。浩平はうなずいておいた。
「転校生も来たことだし、今回は壮大なプロジェクトになるのは確実だ。楽しみにしていてくれ」
チャイムの音が鳴り、数学の教師が入ってくる。
号令をかけられ、浩平は立ち上がった。

翌日の朝。雨が降る静かな空に、瑞佳の叫び声が響いた。
「わあああああああああっ！」
いつも通りに浩平を起こそうとした瑞佳がシーツを剥ぎ取った瞬間、眼に入ったショッキング極まりない代物にパニックを起こしている。
シーツの下の浩平の体は素っ裸だったのだ。
浩平はわざとらしく壁の方へ体を引いてみせる。
「長森っ、お前……こんなことまでっ」
「シーツ剥いだら裸だったんだよっ」
「何もこんなことしなくても、裸くらいいつでも見せてやるのに」
「こんな冗談やってる暇なんかないんだよ。ほんとに遅刻しちゃうよ」
瑞佳が乱暴に着替えと鞄を渡す。
濡れ衣を着せて居心地の悪い思いをさせ、優位に立とうという計画は見破られていたようだ。そうなるとこの格好は世にも情けない。浩平は仕方なく体を起こした。
「いや、俺は長森に生まれたままの姿を見てもらおうと思ってだな……」
「そんなもの見たくないよっ」

「一緒に風呂に入っていた頃から、どのくらいたくましくなったか知りたいだろう?」
「お風呂なんか一緒に入ったことないよ」
「あれ、ちょっと待て……」
浩平は首をひねった。
ここまでは全部冗談だったのだが、確か瑞佳と風呂に入ったことがあったような気がする。軽く考え込んだ。
まだ小さな頃だ。女の子と一緒に湯船に入っていた記憶があった。
いつも持っているおもちゃと一緒でないと風呂に入れなかった女の子。あのおもちゃは、どんなものだっただろう。どれだけ記憶を探しても思い出せない。
ひどく大切なことだった気がする。
どうも頭の中でひっかかったまましっくりこないのだが、瑞佳に急かされフルヌードのままで部屋から追い出されたのだった。
「浩平、もうあんなのはやめてよね。わたし、ぎょっとしたよ」
「今度はもっといい作戦を考えておくよ」
「もう、そんなのいらないって」

雨の日でも、遅刻寸前なのは変わりがない。
ふたりは水たまりを蹴りながら学校へと急いだ。
（……あれ？）
視界の隅にピンク色の何かが眼に入る。
空き地の中で、ピンクの傘をさして立ち尽くしている少女がいたのだ。浩平達と同じ学校の制服だったので、つい顔を確認してしまった。
見憶えのある顔だった。同じクラスの女子だ。腰までもあるつややかな長い髪が記憶にあったのだ。
確か、里村茜（さとむらあかね）と言ったはずだ。
あまり女子には親しい生徒が多くない浩平は、もう12月に入るというのに、その里村茜と話したことは一度もなかった。
何かを待つように、立ち枯れた草の中でひっそりと立っている。そのせいで瑞佳は気付かなかったようだった。横を向いていて遅れた浩平に、前の方から呼びかける。
「浩平、遅刻するよ」
どことなく邪魔してはいけないような雰囲気も漂っており、結局浩平はその親しくはないクラスメートに話しかけないまま学校へ走ったのだった。

一時間目の授業の途中で、住井から手紙が回ってきた。
『おい、例の件についてだ。見ておけ。後は野郎に回してくれ』
いい加減に切ったルーズリーフの切れ端に眼を落とす。

2年A組女子人気投票開催

我がクラスにおける女子人気投票の実施をご報告いたします。
投票は男子生徒のみ。秘密裏に実施。
公平を期す為、女子には知らせないこと。
投票受付締め切りは明日（4日）の放課後。住井まで。
5日に結果発表。お楽しみに。

多分、転校してきた留美にまとわりつく男集団を見て思い付いたものだろう。
浩平にはよく解らないが、A組の女子生徒には美人が多いという噂だ。多分留美狙いの男子を中心に盛り上がるに違いない。
『おい、こんなものが回って来たぞ』

浩平は機械的に前の席の留美にメモを渡した。
留美がちらりと浩平に視線をやると、メモを受け取った。
（そう言えば女子に渡しちゃ駄目だったんじゃなかったっけ）
そう思ってはみたが、メモは既に留美の手に渡っている。
留美はそのままメモを読んでいるようだ。
あの性格の留美のことだ。ミスコンもどきに何と言うだろう。それを考えると頭が痛くなった。

「俺はどこにも行かないぞ」
「……ちょっと廊下まで来て、って言おうと思ってたんだけど。どうして言う前に返事してるのよ」
「七瀬の行動が読めたからな」
「とにかく、来なさいよ」
にっこり笑いながら留美は浩平の手を引きずって行った。
「本当に実施される。順位がずらっと並ぶと思うぞ」

廊下の隅に連れて行かれた浩平は、開口一番そう言った。
留美が拍子抜けた顔で浩平のことを見やる。
「何で聞こうとしたことを先に答えてんのよ」
「だからさ、読めるんだって。とりあえず全部事実だ」
留美は頭を抱えた。
「こんなこと知らないでいればよかったあっ。クラス男子の理想の女性を決めるってことでしょう？　ああっ、気になるっ」
どうやらクラスひとつで開催される程度の人気投票イコール、乙女の証明とでも考えているのだろう。針小棒大と言えなくもないが、留美が本当にプレッシャーを感じているようだと思ったので、あえて何も言わなかった。
「まあ、どう転んでもすぐに結果が出る。ゆっくり寝て待て」
「あのさ、折原……現時点での順位とか、って、解るのかな」
留美がためらうような表情を浮かべ、浩平を見た。
「まあ、住井に訊くだけだからな。ただ、まだそんなに票は集まってないと思うぞ」
「それでもいいから訊いてきてくれない？」
浩平は軽くうなずいて一度教室に戻ると、一分もしないうちに戻ってきた。

軽く頭を振りながら呟く。
「……驚いた」
「どうしたのっ？」
緊張で強張った顔の留美を見やる。
浩平が荘厳に告げる。
「七瀬、おまえがトップ独走だ」
「わあ、嘘。ほんとに？」
「2票でトップだけどな」
留美はいきなり浩平の頭をど突いた。
「どこが独走よ、あほっ！」
「ただし、全部で5票だ。割合からいけば優勝の勢いじゃないか」
「そう、よね……」
どこかほっとした表情に変わる。
浩平が続けた。
「だとすると今日からの三日間、お前、男子のイメージを崩さないように過ごさないとな。間違っても男の前で屁なんかこくなよ」

「こくかっ！」
「まあ、何事もなければ七瀬なら大丈夫だろ」
「うん、頑張る」
生真面目にうなずく留美の後ろに、次の授業を受け持つ英語の教師が見える。
二人は教室に戻った。

「……ずわあ……っ」
授業の直後、浩平は突っ伏した。
英語の苦手な留美の為にこっそりとアンチョコしてやったせいで、自分が当てられた時に答えることができないで叱られたのだった。
留美の方は男子の失望を誘うことなく、うまくやり過ごすことができて、愛らしく微笑んでいる。浩平は男子生徒に囲まれている留美の方を見やりながら、住井の方へ歩いてきた。
「七瀬はやっぱり強いか？」
「見てみろ」
住井が集計してあるルーズリーフを浩平に広げる。

何とはなく視線を落とすと、浩平は口をぱっくり開けた。

七瀬留美　　４

長森瑞佳　　３

そろそろ半分くらいの票数が集まってきただろうか。しかし他の女子に集まっている票は見事にばらばらだった。瑞佳の友達である稲木佐織や、里村茜の名前も見える。しかしある程度まとまった票数を確保しているのは、留美と瑞佳だけだった。

「長森がそんなに強いのか？　信じられん。あいつに投票する奴なんか俺くらいだと思ってたぞ。しかも同情票」

「そうかなあ？」

意外そうに住井が訊き返す。

「うーん、そうなのか？」

浩平が首を傾げていると、住井は軽く笑った。

「長森ファンクラブは根強いぞ。俺は長森さんがトップだと思うぜ」

「ならんならん。どうせ七瀬が巻き返すに決まってるだろ」

「なら、賭けるか昼飯」

「解った。乗ろう」

全く予想していなかったが、瑞佳は他の男子生徒達からも好ましい女の子として見られているらしい。

思わず瑞佳の席まで歩いて行って、いぶかしそうな瑞佳の顔をまじまじ見てしまう。

「どうしたの、浩平」

「いや、顔を見物に来ただけだ。じゃ」

再び自分の席に戻り、瑞佳の顔をイメージする。

確かに顔は悪くない。伸ばした髪もさらさらと美しい。どのパーツも平均以上で、並び方など絶妙と言える。整った顔の女性にありがちな、険のある印象はなく、やさしい雰囲気だ。おまけに浩平のことをかいがいしく面倒見る様子など、どれだけの男が注目してもおかしくないような気がした。

(ただ、欠点がないだけじゃないか)

浩平はどこかむずがゆいような気持ちを、住井に昼食をおごらなければならない危機感のせいだと勝手に解釈することにしたのだった。

第２章　乙女のミッション

再三留美にせがまれ、住井から何度か人気投票の途中経過を見せてもらっているうちに、浩平はひどく困惑してしまった。
やっぱり瑞佳は男子生徒に人気があるのだ。浩平の思惑からは大きく外れ、相変わらず留美と瑞佳の得票数は競り合っている。見せてもらった時によっては瑞佳の得票の方が多いこともあるほどだ。
このままでは得意そうな住井に昼食をおごらなくてはならない。それだけは回避したかった。切羽詰まった気分になった浩平は、おもむろに留美に宣告した。
「七瀬、協力しよう」
「どういうこと？」
「住井と人気投票の賭けをしているんだ。あいつが長森に賭けたから、俺は自動的にお前に賭けることになってしまった。俺の昼飯の為に、ぜひお前に勝ってもらいたい」
何やら訳の解らない内容に、留美が怪訝そうな表情を浮かべる。
「そりゃあ、努力はするけど……」
浩平はぽん、と留美の肩を叩いて激励する。
「お前ならできる。もちろん俺も投票締め切りまで全力で協力するから、何があっても長森に勝ってくれ」

「……解った」
助力があるのは嬉しいし、自分の都合のいいように話が動いているのだが、妙にしっくりこないといった表情の留美は煮え切らない口調で了承した。
勝負の機会は思ったより早く回って来た。
期末テスト前のテスト範囲をいち早く教え終わった現国教師が、満足そうにチョークを置いた。
「これから残り時間を使ってミニテストを行う」
一通り試験範囲をクリアした生徒達の、ほっとした表情がいきなり不満そうなものに変わる。しかし現国教師は余裕ある満足そうな笑みを崩さない。
「これはテスト範囲に理解を深めてもらう為のもので、成績には全く関係ない。しかし、答え合わせした後で上位の者と下位の者の名前を発表する。手を抜くと大恥をかくから、そのつもりでやれ」
(相変わらず、うまいこと煽ってるよな)
浩平はげんなりしながらも、とりあえず一通り解こうという気になる。
(……お？)

留美の背中が強張っていた。
やる気だった。
どうやら留美はこのミニテストで勝負をかけるつもりらしい。煽動上手の教師に乗せられて、ひとり燃え上がっているようだ。確かにここでひどい成績を取れば、留美が今まで必死になって作り上げてきた『愛らしい乙女』のイメージは崩壊するだろう。少女趣味な理想の自分に向かって涙ぐましい努力をしている留美は、絶対に『顔は可愛いんだけど頭悪いよな、あいつ』などとは死んでも言われたくないに違いない。
ここが勝負の決め所なのだ。
ならば、浩平も手伝うしかない。
『ここで負ける訳にいかないのよ！』
『でもなあ、現国はかなり分が悪いぞ。現国だったら長森はトップクラスだ。一位を取ったこともあるはずだ』
瑞佳の方を一瞬窺った。
いつも通りの顔をしているが、不安そうには決して見えない。もともとテスト勉強は真面目にする瑞佳のことだ。得意の現国の勉強に抜かりはないに違いない。
『あいつに勝つなら満点以外にないぞ。自信はあるのか』

『そこまではないわ』
浩平は留美以外に聴こえないように声を落とした。
『共同戦線で行こう』
『どういうことなの』
『まず俺が手伝う。住井にも訳を話さず手伝わせてやるし、お前の隣の席も俺が覗いてやる。これで4対1だ。そのくらいいればかなり勝つ確立は上がるだろう』
『……解った。4人がかりと言う訳ね』
留美が軽くうなずく。
テスト用紙が裏返して配られてくる。全員に行き渡ったのを確認して、教師が始め、と宣告した。
素早くテスト用紙をめくる。
(結構難しいぞ、これは)
浩平も国語の成績は悪くない方だが、いくつか解けない問題があるようだ。これは、カンニングの方に力を注がねばならない。
住井の国語の成績は、下から数えた方が早い。しかし住井もまた、カンニングにかけては半ば天才のようなもので、周囲の人間がどれだけ正答率を保持しているかによっては、

かなりいい点数をあげるはずだ。
留美の隣にいる女生徒とは、席は近いが浩平は喋ったことがない。だからどの程度成績がいいのかも解らないが、このクラスの女子はそこそこ真面目なタイプが多いから、ある程度の勉強はしているだろう。
留美自身の成績は、彼女のやや粗忽な言動からすると、あまりよさそうには思えない。
これは、浩平が頑張らねばまず奢らされる羽目になるだろう。そう予想をつけた。
とりあえず確実に正解だろうという問題だけ、一気に留美に伝えてやる。
『残りは今チェックする』
留美はうなずいた。
現在空白になっている問題は全部で４問。
とりあえず１問目。浩平は教師に気配を悟られないように他の人間の答案を覗いた。
住井の答案には、どう考えても不正解だろう、と思われる内容がでたらめに書かれている。続いて女生徒の答案を覗く。しっかり書かれてあった。
浩平は小声で留美に伝える。
２問目、３問目、と順調に留美に伝えてゆく。
しかし、最後の４問目になり、浩平は進退極まった。

やはり難しい問題なのか、住井の答案にも女生徒の答案にも、答えは書かれていないのだ。仕方なく、再び自分で考え始める。
（ううっ、解らん。何だよこの問題は！）
しかし、時間だけは無情に過ぎてゆく。
「終わり！　隣の席と用紙を交換しろ」
未練たらしく答案を眺めていたが、結局思い付かない。隣の住井がテスト用紙をもぎ取ってゆき、自分のを押し付ける。
自分の答案はまあまあ悪くない正答率だ。しかしあの解けなかった問題もあり、満点とはとても言えなかった。後は留美自身がどこまで正解を叩き出したかだろう。
答案が回収されてゆくのを教師が集め、教壇で成績順に並べているらしい。
「1問、めちゃくちゃ面白い大学入試問題を試しに入れておいたんだが、正答率はほとんどゼロだ。ひとりしか解けていない」
（面白いからって、二年生のミニテストにそんなもん入れるなよお！）
浩平は身を強張らせた。
「満点は長森瑞佳ひとりだ。しかし、この一問を除いて全部正解した者が3人。井上、芝田、七瀬、以上の三人だ。下位の方は……」

がっくりと留美の力が抜けるのが、後ろから浩平に見て取れた。
いつもなら、瑞佳と同点首位くらいまで持っていけたのではないだろうか。今回は運が悪かった。留美はやるだけやったのだ。トップとは言わないまでも、かなり上位に食い込んでいたのだから、そんなに男子の人気が減ることもないだろう。
そんなことを思っているうちに授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

昼の段階である程度危惧していた通り、留美は瑞佳に抜かれていた。
「まだ、あと半日あるだろ。残りの得票が全部七瀬なら逆転も可能だ」
「そんな奇跡みたいなこと要求しないでよ。まあ、努力はするけど」
どちらでもない女子に一票入っただけでも無理なのだから、確かに道は険しい。
「まあ、七瀬が頑張ってるところを見ててくれてる奴だって、絶対いると思うぜ」
「ん、そうだよね」
留美はいつもよりはか弱い笑みを浮かべてうなずいた。
その表情が女の子らしい、というのはあえてやめた。
放課後、甘いものが食べたくなった浩平は、帰り支度をしている瑞佳に声をかけた。

　実は浩平は、割と甘党である。商店街の甘いものを置いてある店は、ほぼ網羅している自信があった。今日はその中でも、行列ができるほどおいしいという評判のクレープ屋『パタポ屋』のクレープが食べたい発作にかられていた。
　甘いものは、時々いきなり食べたくなってしまうのが困ったところだ。
「長森、久しぶりにパタポ屋に行かないか」
「ごめんね、浩平……わたし、部活があるから」
　瑞佳はオーケストラ部でチェロを弾いている。小さな頃から習っていただけあって、かなり上手いらしい。
　自分も一応は音楽関係の部活である軽音楽部に入ってはみたのだが、その軽音楽の内実がジャズであるというだけで思い切り腰が抜け、すっかりやる気が失せてしまったのだった。それから浩平はずっと幽霊部員で通している。だから音楽がどうとか語れるほどレベルが高くはなかった。
　ただし瑞佳の方はオーケストラ部の顧問である音楽教師に、音大へ行かないかと勧められてもいるようだし、相当なレベルではあるのだろう。
　12月に行われる演奏会に向けて、部の方でもひどく忙しいらしい。一応瑞佳から聞かされていたのだが、話半分に聞いていていたらしくすっかり忘れていたのだ。

「でも、浩平がどうしても今日、って言うなら無理するけど」
「いや、いいよ。演奏会のこと忘れてた俺も悪いんだし。じゃあな」
手を振って教室を出る。
女の子達に混ざって男ひとりで行列に加わる根性はなかった。

帰り際に中庭を歩いてゆくと、グラウンドの方から練習している運動部の声が聴こえてくる。既に帰宅部の生徒のほとんどは帰ってしまったので、中庭には誰もいない。
正門の方へ曲がる瞬間、ほんの少しだけ練習風景が視界に入る。
何かに打ち込んで、それだけで一日が終わってしまう人種。とても楽しそうな彼ら。
別の人種としか思えない。
浩平は自分がそんな風に生きるのは全く想像できなかった。
自分と同じように退屈した男友達と遊ぶのも楽しかったし、瑞佳と寄り道して帰るのも好きだった。何かに熱中することなく、ぬるま湯に浸かったような生活が好きでたまらなかった。
ずっとこうしていられたらいい。
平穏で退屈な、ただそれだけの日々。

自分で求めなければならない何かを探すのではなく、今ある楽しいものを消費して生きていけたらいい。そんな自分が好きだった。

（違和感）

だから何かに熱中する人種を見ていると、むずむずするような居心地の悪いものを感じてしまうのだ。チェロに打ち込んでいる瑞佳に対しても、同じことは感じる。

浩平は暮れてゆこうとする夕陽を眺めた。

オレンジ色、朱色、緋色。

（空を、見ていた……前も）

ぼうっとした浩平は空ろな眼で夕焼けを眺めていた。

何かが語りかけてくるような不思議な気分。

それが心地よいものなのかそうでないのか、自分でも解らなかった。

眠りに就く前、浩平は真剣な表情で考え込んでいた。

明日こそは瑞佳を驚かせてやろう。

この前のフルヌード作戦は見事に玉砕してしまったので、今度こそは別の意表を突く何かを考えなくてはならない。

どうしたらいいのだろうか。
しばらく首をひねった後、浩平はアイディアがひとつ浮かんだ。
ベッドの下に隠れて寝ていれば、瑞佳は浩平がどこにいるのか解らないに違いない。着替えはあるのに本人がいない状況で、瑞佳はびっくりするだろう。
そしてとどめにベッドの下から浩平が驚かせば、腰くらいは抜かすかもしれない。
浩平は嬉しそうにベッドの下にある隙間に体を滑らせていった。

「浩平、こうへいー？」
朝、案の定瑞佳の慌てた声がする。
浩平は半ば眠りから醒めない状態でほくそ笑んだ。ぱたぱたと瑞佳の足音が床を響いて伝わってくる。探し回っているらしい。
それが子守歌のように感じて、浩平はうとうとし始めた。
「ああっ、いたっ！」
何故かひどく背中が痛い。どうやらずりずりと体を引きずられているらしかった。途端に視界が異様に明るくなる。
「どんな寝相してたらベッドの下なんかに入り込むのよっ」

ちょうど上半身だけをベッドの横から出しているような感じで、浩平は寝転がっていた。暗く感じたのは顔の前にベッドの板があったかららしい。
浩平は残りの下半身を自分で外に出した。
「いや、びっくりするかな、と思って潜んでみたんだけど」
「したした。びっくりした、これでいい？　もう本当に時間がないんだよ」
浩平は仕方なく瑞佳に押し付けられた着替えと鞄を持って階下に降りた。

いい加減に準備を済ませ、通学路を走る。
「ねえ、本当にわたしを驚かせる為にあんなことしてたの？」
「他にどんな理由があってあんな場所に寝なきゃならないんだ」
瑞佳は大げさに溜息をついてみせる。
「普段から充分驚いてるからあんなことしなくていいよ。体とか痛かったでしょう？」
「まあ、どこでも寝られる体質だしな」
「そんな馬鹿なことで気を遣ってくれるのなら、もっと違うことで気を遣ってくれたらいいのに」
「どんなことに？　俺としては一生懸命スペクタクルを供給してるつもりだけど」

「だから驚かすとかそういうのじゃなくって……毎日起こしてあげてることに、日頃の感謝を込めて、とかね」
確かに毎日起こす手間の報酬としては、あのネタでは割に合わないかもしれない。
しかし、意表は突きたい。
そう思った浩平が口を開いた。
「じゃあ、日頃の感謝を込めてデートにでも誘ってやるよ。もちろん、全部俺のおごりで、長森の行きたいところに連れてってやる。これでどうだ？」
「えええっ⁉」
意表は確かに突いたらしい。
しかも、フルヌード作戦の時よりも数段慌てているのだ。
瑞佳はあたふたとうろたえながら抗弁する。
「まっ、まずいよそれっ。体裁悪いって言うか……わたしなんかとデートして浩平のこと好きな子が誤解しちゃったら困るでしょっ？」
「誤解されようが何されようが全然構わないぞ」
これだけ瑞佳が慌ててくれているのだ。他のことなど知ったことではない。第一実在を確認していない代物のことなど気を遣っている余裕などあるものか。

しかし、思ったよりもインパクトは大きかったらしい。
突然瑞佳の脚が止まってしまったのだ。
瑞佳はいきなり赤面すると、パニック状態で浩平に言い返す。
「でもっ、わたしだよ、わたし！　解ってて言ってるの？」
「長森だろ。髭にも住井にも見えないぞ」
「だって、浩平馬鹿だよっ。わたしなのに、わたしなのに、わたしなのにっ」
「少し落ち着けって。深呼吸してみな」
瑞佳が言われた通り深呼吸を繰り返す。
「ほら、走れるか？　時間ないんだろ」
ふたりはもう一度走り始めた。
「長森は俺のことを心配だっていつも言うけど、俺の方がずっと心配だよ。そんな卑下してばっかで。人気投票だって結構……」
「えっ？」
「いや、何でもない。でも、やっぱ心配になるって」
「そんなことないよ。わたしなら大丈夫だよ。わたしは浩平と違ってひとりで何でもできるんだから」

「寂しいことを言う奴だな。まあ、デートの件はその気になったらいつでもチャーターしてくれ。長森が食いたいだけ食わせてやるから」
「うん、ありがとっ」
もうそろそろダッシュをかけないとまずい時間になってきた。
「スピードあげるぞ、長森」
浩平は瑞佳が遅れないように気をつけてスピードを上げた。

一時間目の授業が終わりにさしかかった頃、住井が一枚の紙を投げてくる。

人気投票結果発表
1位　　長森瑞佳

隅の方に『B定食希望。ごちそうさま』と書き添えられている。
浩平は溜息をついた。
あれだけ頑張っていた留美も気の毒だし、住井に昼食を奢らされるのも悔しいのだが、何故か浩平はそれ以上に割り切れないものがあった。

ちらりと、真面目に授業を受けている瑞佳の姿を見る。自分がいつの間にか行われている人気投票のトップになったなどとは、全く想像してさえいないだろう。
（結構、他の男も見てるもんだな……）
瑞佳のいいところを自分だけしか見ていないのだと思い込んでいたのを、思い切り馬鹿にされたような気がする。男に不自由しないはずなのに、ではなく、現実に男に不自由していないのだ。
例えば、そう、住井あたりも瑞佳のことが好きなのかもしれない。
そこまで考えて、浩平はゆっくりと首を振った。
（あほか、俺は）
瑞佳はただの幼なじみだ。互いにそんなことを考えないでいられる、空気のような関係が居心地いいのだ。それ以上のことは欲しくないはずだ。
チャイムが鳴った。
浩平は無言で前の席にいる留美の方にメモを渡してやった。
授業が終わり、何となく部室の方へ足を伸ばしてみる。
そんなことをしたくなった理由は解らない。何か、変わったことをしてみたかったのか

もしれない。部活に行く瑞佳を見て、たまには行ってみようかなどと気まぐれを起こしたのだ。

しかし、馴れないことはするものではない。

浩平が軽音楽部のドアを開いた時、当然予想されてしかるべきだが、顧問の教師を含めて誰一人いなかったのだ。

(何だかなあ)

部屋全体にうっすらと埃が溜まっているようだ。だとするとこの部屋に人が入り込んだのはかなり久しぶりということになるはずだ。途中でうるさいくらい賑やかに大道具を作って盛り上がっている演劇部が廊下にまで侵出しているのを、わざわざよけながら部室に来ただけあってどっと疲れが出る。

くっきりと付いた自分の足跡を妙にわびしい気分で眺めながら、浩平は部室を出ていったのだった。

何か小さな歯車が噛み合っていないような違和感を拭い去れないまま、浩平は夜、眠りに就いた。

心だけがどこかへさ迷い出てゆきそうな、奇妙な感触。

浩平の瞼がそのまま落ちた。

●●●

何となく、寄せては返す波のようだと思った。
夕焼けに彩られた空の下には、ビルが立ち並び、ライトを点灯した車がたくさん、道路に黄色い線を描き出す。車やバイクのエンジン音も聴こえる。
ただし、それは向こう側にだけ広がっている世界で、ぼくは何もない場所でその光景を見つめている。
向こう側には生活があった。
生きている人間の息吹があった。
でも、そこにぼくは決して辿り着くことはできない。どれだけ捜し求めても、決して触れることはできないのだ。
ころころ、と小さな音がした。
それは、こちら側の音だった。
ひどく、懐かしい音のはずだった。

でもぼくはそれが何だか解らないまま、音のたつ方を振り返る。
『ぼくは、あそこには帰れないのかな』
『あそこから来たってわかってるんだね』
ぼくはうなずいた。
『あの世界からぼくは来たんだ。あちら側の一部だったんだ』
『すごいね。でも、旅立ったんだよ……遠い昔に』
『そうだね、そんな気がする……でも』
遠い昔と言いながら、それから時など流れていない。
ぼくの考えを読んだように、その子が呟く。
『そう、遠い昔だけど、さっきなんだよ』
『それも、わかるよ』
動いているのは向こうの世界だけ。
こちら側の世界は止まったままなのだ。
ぼくはその、あまり年の変わらない小さな女の子とふたりで、止まったままの世界で向こうを見ている。
こちら側で見ているから、本当なら動いているはずの世界さえ、正しく動いているよう

に見えない。夕陽はいつまでも赤いまま。走る車は増えも減りもしない。
いつまでも、いつまでも。
つまりは、こういうことだ。
『世界は、ここまでなんだね』
『飽きたら別の場所に旅立てばいいんだよ』
この少女と寄り添いながら、ぼくは夕陽を見ていた。
どこへ行く当てもない。こちら側には時間さえも流れはしないのだから、ゆっくりとしてゆけばいいのだ。

●●●

「ほら、起きなさいよっ」
いつものように瑞佳に叩き起こされる。その様子だけ見るととても人気投票で見事一位を獲得した美少女とは思えないほどのドメスティックさだ。
「……実は俺、昨日校長を殴って無期停学処分になったんだ。いつ学校へ行けるか全然解らないから、もう放っておいてくれよ……」

大昔の不良ドラマ系の演技をオーバーアクションでやってみせてやる。
「校長先生なら昨日廊下で逢ったたよ。いつもの通りだった。すぐばれる嘘なんかつかないで、早く起きてよ」
「うーん。校長の奴、こんなところで俺の足を引っ張るか……あなどれん」
ぶつくさ言いながら浩平は起き上がった。
瑞佳に着替えと鞄を渡され、階下に降りる。どうやら瑞佳は用意する間に布団を干してしまうつもりらしい。たまにこうして瑞佳が布団を干してくれなかったら、きっと浩平の布団はカビの一大発生地になっているだろう。
浩平が準備を終えた頃、軽い音をたてながら瑞佳が降りてくる。
「今日は浩平、早いね。これだったらゆっくり歩いて学校に行けるよ」
壁にかかった時計を見ると、普段ならまだごたごたしている頃だった。
いつもと違って、ふたりはのんびりと歩きながら学校へ向かった。
普段は聴く余裕のない小鳥の声や、朝のやや淡い陽光にも心を向けられる。昨日雨が降ったたけに、樹々の葉も鮮やかな緑色だった。
「ねえ、たまには裏山を通って行こうか。ゆっくり散歩しながらだときっと綺麗だよ」
「……そうだな」

裏山へ続く道は学校への最短距離だ。
しかし急勾配の坂が間にあることで『心臓破りの坂』と言われており、よほど切羽詰まっていないとこの道を利用したくはなかった。
ただしそれも走って登校する、という前提があればこそだ。
ゆったりと歩いてゆけるのなら距離が長い訳でもなく、高台の途中には見晴らしのいい公園などもあり、学校の敷地と隣接している林までの間、実に気分のいい散歩コースだと言えるだろう。
いつもはまっすぐ行く道を右に曲がった。
「いつもこうやって登校できたらいいのにね。最近わたし部活が忙しくて浩平とあんまり喋ってないし」
「そうだな。こういうのもいいよな」
「でしょう？　浩平だってこうやってのんびり登校するの好きなんだよね。ただ、朝が弱いだけで」
瑞佳が嬉しそうに微笑んだ。
「ねえ、明日からこうやって早い時間に出て一緒に行かない？」
浩平は考え込んだ。

はっきり言って浩平の寝起きの悪さは極め付きだ。小さい頃はごくたまに叔母の由起子が起こしてくれていたが、全然起きない浩平に閉口して、大抵はベッドから突き落とされたものである。早く出るのを習慣付けられる自信はなかった。

それでも浩平はうなずいた。

「どうせ俺のことだからそんなに長くは続かないだろうけど、それでもいいなら」

「うんっ、それだけでも嬉しいよ、浩平」

瑞佳が笑んでみせた。こうして見ると、本当に人気投票で一位を取るというのもよく解る。花がぱあっと咲く瞬間を見ている気分だ。

公園にさしかかるとさすがに寒い。

「お前、寒くないか?」

「大丈夫だよ。浩平、わたしが寒いって言ったら上着貸してくれた?」

「俺が寒くなかったらな。寒かったら一蓮托生だと思っといてくれ」

「ありがと」

今日の瑞佳は本当に機嫌がいい。

いつもの、ある意味でお姉さんぶっている時よりもずっと可愛く感じる。

確かに、こういう朝もいいものだ。

浩平達は林を抜けて、学校の裏手に出るとフェンスを乗り越えた。

「そうだ、長森。暇になったらパタポ屋に行こうな」

「うんっ」

そんな言葉を交わしながら、いつもはダッシュして入る下駄箱へ歩いていった。まだ、登校してくる生徒もそれほどたくさんはいない。

のんびりとした朝だった。

第３章　差し伸べた手

瑞佳と約束した翌日も、浩平はいつもよりも早く出ることができた。
案外、早起きをしようとすればできるものだと自分でも感心する。冷たく芳しい空気を肺に吸うと、気持ちよく体が覚醒してくる。
林の枯れ葉を踏みしだいて学校へ向かう。
瑞佳が不思議そうに足を止めた。
「ねえ、あの子……何してるんだろ」
瑞佳は浩平の肩をつついた。
向こうに誰かがしゃがみ込んでいる。後ろ姿からすると女の子のようだ。小柄で、どう見ても小学生くらいにしか見えない。
その女の子からかすかにしゃくりあげる声が聴こえる。
泣いているのだ。
「ねえ、行ってみようよ」
「何でお前は……」
浩平は辟易した表情を浮かべた。
瑞佳には何かに同情するとそのまま入れ込んでしまう癖がある。その癖のせいで長森家には猫が何と8匹もいるのだ。しかし今回は猫ではなく人間だ。下手に関わっていいもの

でもないだろう。
瑞佳は真剣な顔で主張する。
「だって、心配じゃない。あんなところでしゃがみ込んでるなんて、具合悪いのかも知れないよ。倒れちゃったら大変だよ」
こうなってしまったからには瑞佳を止めようがない。猫と同じで拾うところまで行くしかないのだ。いつものことである。
浩平は諦めた。
瑞佳がゆっくりとその女の子に近付いてゆく。浩平も成り行きでついてゆくことになってしまったのは言うまでもない。
「ねえ、どうしたの？」
女の子が振り返った。
その体越しに彼女が穴を掘っていたのが見える。小さなスコップを頼りなさげに握っていた。体格としては中学生か小学校高学年、といったあたりだろうか。しかし何の表情も浮かんでいないその顔からは、具体的に年齢を推測するのは不可能だ。
女の子は何も言わない。
しかし、浩平には彼女が抱いているマフラーの中に、何か小動物が動かないまま包まれ

ているのが見えてしまった。
「そいつの墓か？」
やはり無言でうなずいた。こくり、というそのうなずき方が彼女自身をか細い小動物のように見せている。
「死んじゃったんだ……かわいそう」
しゃがんでいたせいで、コートの前がひどく汚れている。
女の子が自分で掘った穴は、そのコートの汚れに見合っていなかった。あまり力がないのかもしれない。
「ほら、貸しな。掘ってやるよ」
女の子からスコップを受け取ると、ざくっと土に突き立てる。
思ったほどには固くない。それを確認してから滑りそうな枯れ葉を一度おおざっぱにどける。そしてもう一度スコップを入れる。
浩平は無言で土を掘り続けた。
調子良く掘り進んで、手首のあたりまですっぽりと入るくらいの深さになると、女の子が浩平の上着の裾を引っ張る。もういいということらしい。
そして、マフラーに包まれていたその小動物の体をあらわにする。

イタチに似た、小さな動物だった。
瑞佳がやさしい声をかける。
「フェレットね。名前は何て言うの？」
「……みゅー」
その女の子が初めて声を発した。
瑞佳が微笑んだ。
「みゅー、って言うんだ」
「うん」
女の子はうなずくと、姿を見せてくれたフェレットをもう一度マフラーに包み込み、捧げ持つようにゆっくりと穴の中に横たえる。
「じゃ、埋めるぞ」
「うん」
女の子の返事を聞き、浩平は小さく盛り上げた土を穴へ落としてゆく。
スコップから土が落とされるのを、女の子も瑞佳も黙って見守っていた。
浩平の後ろから、しゃくりあげるような声が漏れた。そしてそれはすぐに、子供のような泣き声に変わった。

浩平は振り返った。
溢れる涙をこらえもせず、大きな声をあげて泣き続ける。
「みゅー、みゅーっ！」
女の子は浩平を押しのけ、半分ほど埋まっているマフラーを手で掘り出して抱き締めていた。何を言ったらよいのかも解らず、ただ呆然とする浩平をよそに、瑞佳は泣きわめく女の子に近付き、頭を撫でてやる。
どことなく母性的なイメージを感じる光景だ。
(俺のおふくろはあんなじゃなかったけどな……)
一瞬、苦い思い出がよぎるが、それを振り払ってしまう。
「ほら、もう眠らせてあげないとね」
瑞佳にやさしく諭されたことで、女の子は少し落ち着いたらしい。泣き声が収まってくる。
「もう一回だけさよならを言って眠らせてあげよう、ね」
「みゅー……」
しばらく別れ難そうにマフラーを離そうとしなかったが、やがてもう一度抱き締めて包みを土に返す。

「いいか、埋めるぞ。今度は掘り返すなよ」
女の子はうなずいた。
未練が湧いたりしないように手早く埋めてしまう。全部の土を戻してから、ぱんぱん、とスコップで土を固める。
「目印に何か石でも置いておこうな。それなら次来た時も、ここがみゅーの墓だって解るだろ」
浩平は近くを歩いて手頃な大きさの石を見つけ、その埋めたばかりで周囲と色が違う土の上に置いてやった。白くて丸い墓標だ。
「次来る時には花でも持ってきてやるよ」
浩平は立ち上がった。
「じゃあ、もうそろそろ行くか」
女の子の肩に手を置いたままだった瑞佳が、小さな声で囁く。
「わたし達行くけど、大丈夫?」
「うん」
どうやら女の子はまだその墓の側にいたいらしかった。
「じゃあね……ばいばい」

浩平が促すと、心配でたまらないといった調子の瑞佳もしばらくためらったが一度手を振って歩き出す。
中庭が見えるフェンスの側で瑞佳に訊く。
「おい、かなり時間をくったけど、今何時だ」
「ええと……うわっ」
それ以上聞くまでもなく、チャイムが鳴り始める。
浩平は素早く昇ると、おたおたしている瑞佳に手を貸してやり、瑞佳が着地したのを確認して走り始めた。
さすがに今日は不可抗力だろう。

昼休み。ゆっくりパンをかじっていた浩平に、学食から戻ってくる生徒達が話している話題が何となく耳に入る。
今日の日替わり定食のメニュー。
テスト対策。
いつも通り些細な内容だった。
しかし、いつもと違う話題がひとつ耳に入った。

「あれって、迷子とも思えないしなあ……何なんだろ、あれ」
「どうした。迷子を保護したのか」
浩平が噂話をしていた生徒に声をかける。
「さっきさあ、校内を私服の女の子が走り回ってるところを見たんだよ。忘れ物を届けに来たって訳でもなさそうだし、何だか変だなって」
「ふうん」
浩平が何かを言う前に、血相を変えた瑞佳が飛び込んでくる。
「浩平っ、浩平っ！　あの子が来てるんだよっ。学校の中を駆け回ってるのっ」
「あの子って誰だ」
呑気な質問をした浩平に、瑞佳はじれったそうに続けた。
「あのフェレットのお墓を作ってあげた子っ。あの子が学校に来てるのよっ」
「嘘だろ……？」
さすがに浩平もぎょっとした。
「あの子、絶対わたし達を探してるんだよっ」
「マジかよ。長森、どこで見かけた」
「第一校舎の廊下を走っていくところを見たんだけど、見失っちゃったの。探すの手伝っ

て！　わたしひとりじゃ手に負えないよ」
瑞佳の脚力は登校途中に鍛えられてはいるものの、女子の中では中程度、というところらしい。運動神経が鈍いという話も聞かないが、スポーツ万能という訳では全然ないのだ。あの小さなすばしっこそうな女の子が走り回っていては、瑞佳だけで捕まえるのは難しいに違いない。
浩平は立ち上がった。
「先生より先に見つけて確保しないとな」
浩平はとりあえず早足で第一校舎へ向かった。

さすがに一階から三階まである校舎のどこから手をつけたらいいのかさっぱり見当がつかない。
「どうしよう、浩平……」
「……待て」
浩平は瞼を閉じて耳をすました。
遠くから「みゅーっ、みゅーっ」と叫ぶあの女の子の声と、多分彼女が通り抜けた時に起こっているのだろう騒ぎ声が聴こえた。上だ。

この音の遠さからすると多分三階だろう。
「行くぞ、長森。三階だ」
「うんっ」
浩平はとりあえず瑞佳に構わず全力疾走した。
二階まで来ると声がもっと大きく響いている。しかしこの階ではなかった。それだけ確認して、足をゆるめず駆け上がる。
「みゅーっ、みゅーっ！」
彼女がいた。
しかし、その後ろ姿がぐんぐん遠ざかってゆくところだった。周囲の人間にぶつかりながらも、かなり速いスピードで小さくなってゆく。
「待てっ、おいっ！」
彼女のスピードはかなり速い。しかも、ただでさえ昼休みで混み合った廊下に野次馬まで出てきているのだから混乱状態だ。
しかし浩平も決して脚は遅い方ではない。するすると人込みを抜け、着実に目標に近付いてゆく。さすがに男女の脚力差があるので、あっという間に女の子の肩に手をかけて振り向かせる。

いきなり後ろから強い力で振り向かされたので、女の子はびくっと震えた。
「……廊下を走ったら怒られるぞ」
安心させるように笑いかけてやる。
女の子は真ん丸に見開いた瞳から、ぽろぽろと涙をこぼし始める。まずい、と思った時にはもう遅かった。
「うわあああああんっ！」
女の子は浩平の胸にしがみ付き、大声で泣き始めたのだ。
そこにやっと瑞佳が追い付いてくる。
「長森……どうすればいいんだ、俺は」
「あはは、よしよし」
横から瑞佳が女の子のさらさらとした髪を撫でる。
「よっぽど浩平のことが気に入っちゃったんだね」
「そういうもんなのか？」
「だって、ひとりで知らない学校まで探しに来ちゃうんだよ。こんなに不安がってるのに、一生懸命」
「うーん、それより早く泣き止んでくれ。ギャラリーにとんでもない誤解をされるぞ」

男の胸にすがって泣く少女。ゴシップ記事的な推測をされるのは火を見るよりも明らかだろう。浩平は頭痛がした。
女の子はまだ泣きながら顔を上げる。
「みゅーがいないの……」
浩平は困った顔で返事をする。
「みゅーは死んだろ。今朝、一緒に林の中に埋めてきただろ？」
女の子の顔がいきなり涙でくしゃくしゃになる。
泣かれる、と思った瞬間、瑞佳が女の子に笑いかける。
「寂しかったのよね？」
一度、大きくうなずいた。
「でも、わたし達、これからまだ授業があるから、それが終わったら逢おうね」
何度も何度も、こくこくとうなずいた。
「だから、もうちょっとだけ外で遊んでてね」
「うん」
そんな約束を気軽にしていいのか、と突っ込みを入れる前に、瑞佳が話をまとめていってしまう。

「放課後に校門のところで待ち合わせだよ。絶対校内に入ってきちゃ駄目だからね」
「うん」
「さ、行こ」
その後瑞佳は女の子を外まで送っていった。女の子は一度浩平のことを振り返ると瑞佳について歩き出した。
(ああやって見ると本当にお母さんと子供だよな)
ふたりが見えなくなってから、浩平は涙の染みがついた上着を眺めていた。

放課後になった。
瑞佳は部活の方に断わりに行って、もう一度教室に戻ってきた。
「お前、部活はよかったのか?」
「大丈夫だよ。もうチェロのパートの合わせは一度終わってるから。家でも練習しておくしね」
「ううう っ、俺が一緒に帰ろうって言った時には断わったくせに」
芝居がかった調子ですねてみせてやる。
「浩平とはしょっちょう帰ってるじゃない。今度浩平の為にも無理するから」

「まあ、わざわざ無理してもらっても、寄り道して帰るだけなんだけどな」
「そういうのも大事だと思うよ」
瑞佳が嬉しそうに笑う。
「それにしても、あいつ、いるかな」
「多分いるよ」
瑞佳がうなずいた。
個人的にはいてほしくないな、と思いながら校門まで向かった。

あれからずっと待っていたのかもしれない。
退屈そうな女の子の眼が、浩平達を見つけていきなり輝いたかと思うと、浩平達の方へぱたぱたと駆け寄ってきた。
「あはは、お待たせっ」
瑞佳がじゃれついてくる女の子の頭を撫でてやる。どうしても構ってしまいたくなるらしい。面倒を見たくてたまらなくなるのだろう。
「陽が暮れるまでにちゃんと送り届けてやるんだぞ」
「解ってるよ。そう言えば名前聞いてなかったね。何ていうの？」

「しいな」
「下の名前は?」
「まゆ」
「どんな字を書くの?」
宙にさらさらと指で字を書いてみせる。浩平には複雑すぎて読めなかった。
「繭? 蚕のつくる繭でいいんだよね?」
結構素早く指を滑らせたのにも関わらず、瑞佳は読めたらしい。
「わたしは長森瑞佳。で、向こうが」
「折原浩平」
「よろしくね、繭」
瑞佳がにっこりと微笑む。
「とりあえず表の通りまで歩いて行こうか」
「ところで、俺もいなくちゃ駄目なのか」
浩平が仏頂面で呟く。
「当然じゃない。浩平になついてるんだよ。ね、繭。浩平もいた方がいいよね?」
「うん」

負けずに浩平も訊く。
「俺はいない方がいいよなあ？」
繭は激しく首を振った。
「じゃ、決まり。行こう」
瑞佳が歩き出すと、繭もぱたぱたついて歩いた。
もう仕方がない。覚悟を決めてつきあおう。
浩平は大きく溜息をついた。

広い商店街まで出ると、繭が眼を輝かせた。
ちょうど側にはペットショップのウィンドウがあった。中ではテレビのＣＭなどで見憶えがあるような気がする小犬達がじゃれあっている。
むくむくした小犬はとても愛らしい。
瑞佳は少し哀しそうに言った。
「動物好きなのね」
「動物くらいにしか心を開けそうにない性格だからな……いや、こいつ自身が動物みたいなもんか」

無心にショーウィンドウを覗き込む繭の頭を瑞佳が撫でてやる。
「中、見てみる?」
そう言われて繭は沈んだ表情になった。
「ううん、いい……みゅーは、いないから」
「フェレットもいるんじゃないかな」
「みゅーはいないよな。死んだんだから」
浩平は口を滑らせてしまう。
繭が泣きそうになった。
「あっ、あっち見よう。あっち!」
瑞佳が足早に繭の背中を押してゆく。何となく側にあったファンシーショップに瑞佳が入り込んでしまう。浩平はぎょっとしたが、店の真ん前でふたりが出てくるのを待っているのも不気味だと思い直し、仕方なく一緒に入ったのだった。

結局、店では蛇とも何ともつかない、謎の生物のぬいぐるみを買わされてしまうことになった。瑞佳と割り勘で繭にプレゼントしたのだが、ひどく嬉しそうだ。
その後さすがに馴れない場所に出入りしたせいで気力がなくなった浩平は、瑞佳に繭を

送るのを任せ、そのまま帰宅した。
ひどく疲れたような気がする。
明日こそは平穏な日であることを祈りつつ、早めに眠ってしまったのだった。

しかし、世の中はそう甘くはなかった。
「ぐわっ、またかっ」
「浩平っ、また繭が校内を走ってるよおっ！」
浩平達が飛び出して行って、今度は浩平達のいる第二校舎で走り回る繭を捕まえたのだった。今日は昨日買ったずるずる長いぬいぐるみを首にかけている。
「廊下を走ると怒られるって言っただろう？　一度言ったことは聞け、な？」
一瞬、半泣き状態になったが、泣き出さずにうなずいた。
「繭、今日はどうしたの？」
繭はためらうように瑞佳を見た。
「学校」
「そう、ここは学校だぞ」
浩平の返事に噛み合っていないものを感じたのか、瑞佳が助け船を出した。

「学校に来たかったの？」
「うん」
「お前の学校はここじゃないだろう？」
藺はうつむいた。
「ほら、送って行ってあげるから、外へ行こう？　後でちゃんと話そうね」
瑞佳が昨日と同じように藺を校門まで送ってゆく。
浩平はいつもとは違う真面目な顔になっていた。
傷付いた小動物のような藺。どうやらまともに学校に行っていないらしい様子だ。多分、訳ありなのだと想像がつく。
何故、藺が学校に行っていないようなのか。
何故、こんなにも傷付きやすく、あけっぴろげな程に涙を流せるのか。
多分藺本人からの説明は無理だろう。だとしたらもっと詳しく話せる人間に訊く必要があるはずだ。込み入った話だとしても、藺が現実に浩平達になついているのだとすれば、知っておく必要があるのではないだろうか。

放課後、どこにも寄らずに椎名藺の家まで直行した。そして、長い間藺の母親という人

物と話し合って帰ってきたのだった。

自分は本当の母親ではないから、と前置きして、彼女は繭のことを語った。

「繭は、私に泣き付かない子だから……ひとりで泣く子だから……」

それは、あまりに悲しい言葉だった。

「誰にも慰められることを知らずに生きてきたんです。傍若無人に見えても、それは人の優しさを知らないからなんです。だから、あの子が集団の中に身を置きたがることなんて今までなかったので驚きました」

それはひとりの人間がまっとうに心を開いてゆく為にはいいことであるはずだ。

「でも、おふたりにも学校にも、いろいろご迷惑がかかりませんか」

「そんなことないですっ。全然迷惑なんかじゃありません」

「学校なんて、どうにでもなりますから」

帰り際に繭の母親は、自分の義理の娘とさほど変わらない浩平と瑞佳に、深々とお辞儀をしていた。どんな細い糸にでもすがり付くように。

帰り道、浩平はほとんど口をきかなかった。

瑞佳もそれは同じだった。

(椎名は……俺に似ている)

この街に来たばかりの頃の浩平は、心を閉ざし、ただ、泣き暮らしていた。
それこそ繭と同じように不登校のまま、家で生活する毎日。由起子の家の敷地が全世界だったのだ。その外には決して出なかった。
このまま泣き暮らして死ぬのだ、と信じ込んでいた頃だった。
あの頃、浩平も大切な存在を失った。
それをきっかけとして、いつまでも続くと信じていた平穏な世界は一瞬にして消え果ててしまったのだ。それは、今まで大切に思ってきた家族をやりきれない形で失ってしまうという形をとっていた。

7歳の時だった。
初めて転校した日以来、約三週間の不登校で休んでいた浩平は、他の生徒が帰ってくる時間になっても、ただ憂鬱そうな眼を付けっぱなしにしてあるテレビのあたりでさ迷わせていた。
その眼は、泣きはらして赤くなっている。
どれだけ涙が染みて痛くても、このままただ泣いていようと思っていた浩平の耳に、何か、ガラス窓にぶつかる音が届いた。

その当時も、今と同じ二階に浩平の部屋はあった。
こんな高い場所なのだから、何かのはずみでぶつかる物があるとは思えない。
誰かがぶつけているのだ。
固くて、軽いものをこん、と投げているのだ。
しばらく放っておいても、ガラス窓を叩く音は消えない。ゆったりとした間隔でこん、こん、とぶつけられる。泣き疲れて、まともに気力もなかった浩平にも、そうなると多少の好奇心は湧いてくる。
立ち上がって窓ガラスを開けたと同時に、眉間に大きな石が当たった。
「何すんだよっ！」
「ごめんなさいっ。ごめんなさいっ。いっしょに遊びたくってさそおうと思っただけなんだよっ」
「嘘つけっ」
そこまで聞いて浩平は、謝っているのが同じクラスにいた女の子であるのに気が付いた。
帰り道に送ってくれたので憶えていたのだ。
長森瑞佳。
浩平は憎々しい声で瑞佳を罵倒した。

「おぼえとけよっ！　明日からいじめてやるからなっ」
「うわあああんっ、嘘じゃないのにっ」
それから浩平は突然、不登校をやめた。
毎日毎日学校に来て、瑞佳をいじめ始めたのだ。パンツを引きずり降ろしたり、他の生徒の上履きを山ほど下駄箱に詰めておいたり、給食をひっくり返したり、今思うとよくあれだけめちゃくちゃなことをして、瑞佳との関係が壊れていないのが不思議なくらいだった。

あの時、瑞佳が石を投げてくれなかったら、決して外へ出ることのないまま心を閉ざし続けていただろうと思っている。
自分には瑞佳が手を差し伸べてくれた。しかし、繭には誰もいない。
母親は手助けしたいと思っているようだが、今の状態では繭の方にそれを受け入れるキャパシティがないだろうというのは予測できる。
剥き出しの傷は誰にも癒されないまま、唯一心を開いていた親友、フェレットのみゅーは死んでしまった。その葬式に居合わせたのは偶然だったとしても、過去の自分と同じ眼をした女の子を放っておくなどできない。

藺は偶然であれ自分達と出逢い、学校へ行きたいと、他人と関わりたいと思い始めたのだから。責任がない訳ではない。
浩平は低い声で瑞佳に宣告した。
「長森、椎名を学校へ行かせてやろう」
遠回しに藺の母に訊いていたのを瑞佳も見ていたはずだが、さすがに直接言われるとインパクトがあるらしい。やや、気弱そうに訊き返す。
「そんなの、ほんとにできるものなの……？」
「大丈夫だ。勝算はある」
藺を偽学生として学校生活を送らせる為には、まず必要なのは制服だった。
さすがに新品をいきなり仕立てて藺に渡すというのは、時間的にも経済的にも無理だった。しかし、これも入手する当てがないではない。
この学校の制服をまず必ず持っているにも関わらず、決して着てこない女生徒がいるではないか。
留美だ。
転校してから数日、留美はずっと前の学校の制服で通している。特に制服が仕立てあがらないことで困っているふしもない。持っているのに着ていないだけなのだ、と浩平は踏

んでいた。
明日の最後の授業に、試しに繭を連れてくる予定だった。やはり昼過ぎくらいまでには制服を借りる算段をつけておくべきだろう。
「七瀬が制服ができあがらなくて困ってるって話を聞いたことがあるか？」
「ううん、ないけど」
「なら大丈夫だ。あいつは必ず使ってないこの学校の制服を持っている。あいつから借りればいいんだ。俺が借りてやるから、お前は椎名に渡して着せてやってくれ」
「うん、解った」
ずっと真面目な学生で、学校に知れたらまずいことなどしたことのないせいで、瑞佳はひどく緊張しているらしいが、にっこりと笑ってみせる。
「繭、学校に来たらきっと喜ぶね」
「そうだな」
多分繭のことだからとんでもない苦労をかけさせてくれることは確実だが、もう後には引けない。他人と決して関われないまま、心を閉ざしてしまったかもしれないもうひとりの自分を想像し、浩平はやる気を出していた。
「頑張ろ、ね？」

「ああ」
浩平はうなずいた。
自分では気が付いていなかったが、浩平の表情はいつもと違って真剣だった。

第4章　ハンバーガー・パニック

「変態かおのれはあああああっ！」
翌日の一時間目が終わって休み時間になり、浩平は留美を屋上に連れて行った。
しかし、開口一番浩平は久しぶりに留美の強烈なパンチを食らわされたのだった。
「ま、待てっ。ちゃんと話を聞けっ」
いきなり「お前の制服をくれ」と言ったのが致命的だったらしく、浩平の説得はそこで一旦中断された。
まだ殴り足りなさそうな留美を押しとどめ、必死で繭のことを説明をする。
「理由から話せっ、あほっ。何をブルセラもどきの話をするかと思ったわよ」
「生憎だがそういうフェチな趣味はない」
留美の表情が穏やかなものに変わる。
「だったらいいわ。そう、実はもう持ってるんだ、ここの制服。こっちの制服の方が似合うし可愛いから、新しいやつはついつい着ないで済ませてるんだけど」
「だったら前のなんか要らないだろう」
「それはともかく、生徒がひとり増えたら普通気付くんじゃない？」
浩平は自信たっぷりに首を振った。
「あの髭のことだから、いちいち生徒の数なんて憶えてる訳がないだろう」

「何だか凄い担任ね」
留美は頭を抱えた。
浩平はためらわず押してみる。
「お前は何せ乙女だ。あんなババくさい制服、持っていることだけでも犯罪みたいな気分がするに違いないしな」
「そ、そう……そうね」
それほどひどくもないのではないか、と言いたげな留美を無視し、浩平は続けた。
「で、制服は昼休みに持ってきてくれ」
「ええっ、何でそんな時間に」
「六時間目に椎名が来るんだ」
留美は溜息をついた。
「解ったわよ。で、とりあえず貸すだけなんだから、絶対汚さないように言ってよ」
「任せておけ」
約束通り言うだけは言っておこう。
もちろん繭のことだから汚れようが頓着しないだろうが、それは今留美に言う必要のないことだ。

「ほら、持ってきたわよ」
昼食を食べ終わった浩平のところに、どうやら走って取りに行ったらしい留美が紙袋を渡しに来た。目立たないように机の中にごそごそとしまう。さすがにこんなものを持っているとばれたら、それこそ変態扱いだ。
しかし、クラスで惜しくも瑞佳にトップは譲ったが、やはり人気の高い留美の制服だったら、転売すれば高く売れそうな気がする。
(売ってやろうかな。誰がどれだけ高い値段を付けるか興味あるし)
そんな誘惑にかられたが、さすがにそれをしてしまったら、留美に再起不能になるまで殴られるだけでなく、学校へ来るのを楽しみにしていた繭もさぞがっかりするだろう。
しかしろくでもない遊びにどうしても気合が入ってしまうのは、浩平の性である。ふらふらとオークションでも開いてしまいそうにならないよう、相変わらず牛乳をお供に弁当を食べている瑞佳のところまで袋を持って行った。
「長森、これだ」
「うん、解った」
さりげなく受け取ってくれる。

こういう時に気心の知れた幼なじみは楽である。
後は時間が来るのを待つだけだ。
五時間目が終わり、休み時間になる。
浩平と瑞佳は待ち合わせていた中庭で、繭は退屈そうに立っていた。案外午前中から待っていたのかもしれない。
「待った？」
「うん」
浩平が時計を見ると、約束の時間ちょうどだった。繭の方が早く来過ぎたのだろう。
瑞佳がにっこりと笑うと繭に紙袋の中を見せる。
「ほら、ここの制服だよ」
繭が歓声をあげる。多分まともに袖も通していないのだから、ほぼ新品と言って差し支えないのだ。
「俺が身の危険も顧みず入手してやったんだ。礼を言え」
「うんっ」
「じゃあ、急いで着替えようか」

瑞佳が繭を樹の陰へ入ってゆく。
どうやら着替えるのに手間取っているらしい。奇声を発しながら四苦八苦しているようだった。どんなことになっているやら想像もできない。
しばらくして上機嫌の瑞佳が出てくる。
「おいで、繭っ」
「みゅーっ」
いつもよりお澄ましししているように見えるのは、単に新品の制服のせいだろうか。それでも繭は嬉しそうにくるくる回ったりしている。
「やっぱり少し長いか」
小柄な繭と、どちらかと言えばすらりと背が高い留美では、着丈が10センチほど違っているだろう。指など袖から半分ほど出ているだけだ。
「大丈夫だよ、このくらい。似合ってるよ、繭」
にこー、と子供のように笑う。
「じゃ、長森達は教室の前で待ってろ。俺は机と椅子を調達してくる」
浩平はそこでふたりに一度別れを告げ、空き教室へ向かった。隅の方にある机と椅子のセットをかついで教室へ戻る。廊下のところで瑞佳と繭が待っていた。

「今、お前の席を作ってやるからな、椎名」
教室の中に机を運ぶと、自分の席の側まで持って来た。
おもむろに、隣にいる住井に声をかける。
「机を一個後ろにずらせろ」
「……ちょっと待て。俺の席は一番後ろでめいっぱいだぞ。これ以上下がれるか」
「成せば成る。限界に挑戦してこその人生だ」
有無を言わさず住井の席を壁に押しやり、繭の机を入れ込んだ。
「椎名、ここがお前の席だ」
「ほえー」
解っているのかいないのか、妙にとぼけた声を出す。
壁際に押し付けられて脱力している住井に、瑞佳が謝った。
「ごめんねぇ、住井くん」
「大体、この子は誰だ。お前達の子供か」
「あはは、そんなことないよ」
「馬鹿なこと言ってないで、挨拶くらいしろよ」
住井の冗談を一蹴した浩平は、住井の机を一層壁に押し付けてやる。

「ぐぐっ、やめろ……本当に死ぬ。えっと、俺は住井護。お嬢ちゃんは何て名前だ？」
「しいな、まゆ」
「そうか、よろしくな」
「うん」
そんなこんなで騒いでいると、留美も顔をこちらに向けた。
「この子が言ってた子？　案外可愛い子じゃゃな……ぎゃあああっ！」
留美は大声で叫んでいた。
いつの間にか留美の側に寄った繭が、留美のお下げを引っ張っていたのだ。何故か妙に嬉しそうだ。例のごとくみゅーみゅー言いながら髪を掴んでいる。
「いたい、いたいいって！」
「繭、そんなことしちゃ駄目だよ」
繭はつまらなそうにお下げ髪を離した。留美はわなわなと震えながら物騒な台詞を小声で呟いている。
「ほら、七瀬も自己紹介しろ」
「あたしは七瀬留美……っぎゃあああっ！」
「みゅーっ」

油断したところをすかさず引っ張っている。そう言えば留美のお下げ髪はフェレットの尻尾を彷彿させせないでもない。あの、蛇だか何だか解らない代物を「みゅー」だと言っていたのだから、その程度には似ているのかもしれない。
あたふたと瑞佳が留美に近寄る。
「ごめんねえ、七瀬さん。泣いてる?」
この頃にはもうクラス中の連中が繭の周りに集まっていた。当然みんな野次馬だ。
きょとんとしている繭を囲んで、留美にしたように質問攻めにしている。留美の時には男子生徒ばかりだったが、年下の、ぽわんとした女の子が相手なので、かわいいもの好きの女子も喜んで集まってくる。
その分暑苦しくて仕方がない。
「馬鹿、寄るな。椎名もこんなのに答えなくていいぞ。ゆっくり馴染んでいけよ。とりあえず、もうすぐ授業だからな。頑張れ」
授業は最初から前途多難だった。
無理やり席を作ったのでちょうど留美と浩平の斜め横に座っている繭は、留美や浩平のことを見てはみゅーみゅー言ってうるさいこと限りない。

（本当にこれで通常の授業なんて受けられるのか？）
浩平は頭痛がした。
どう考えても繭は自分達より年下にしか見えない。つまり、授業をしている範囲は上級生のレベルなので、繭にとってついてこれないだけでなく、ひどくつまらないに違いなかった。現にこうして退屈そうにいろいろ構ってほしがっている。
留美がみゅーみゅー言う繭に閉口して、顔を側に寄せた。
「ねえ、もうちょっと静かに……ぎゃあああっ！」
退屈していた繭が、お気に入りのお下げ髪を摑まないはずはなかった。
浩平が口を開こうとした時には既に、留美は半泣き状態で机に突っ伏してしまっていたのだった。そのパニックで中断した授業が再開されてから、繭に何か言おうとする。
しかしトラブルの中心にいた繭は時既に、幸せそうに寝息を立てていたのだった。

夜、自分の部屋のベッドに横たわり、浩平は大きく息をついた。
繭の一件は、浩平にとってかなり精神的疲労を与えているらしい。
かつての自分と同じように傷付いた繭を助けたいとは思っているが、誰かを真剣に助けるということ自体に馴れていないのだ。

自分のことにでさえ真剣にならないようにしているところがある浩平が妙に真剣になってしまうのは、あの時と同じように瑞佳がいるからかもしれない。

閉じこもった浩平のことを、外の世界へと誘ってくれようとした瑞佳。瑞佳と一緒に繭の心を癒すことが、ある種の充足になっているのかもしれない。

悪くはない気分だが、疲れることも確かだ。

一度あくびを漏らし、浩平は眠りに引き込まれて行った。

●
●
●

幸せな日常は、永遠に続いてゆくのだと思っていた。

何も考えず、ただ楽しいことだけを拾い続けていられるのだと。

でもあの日、ぼくは知らされた。

永遠なんて、なかったんだ。

ずっと続いてくれるものだと信じ込んでいたものが壊れた日まで、ぼくはそんなことは知らなかったんだ。

泣いているぼくに、彼女が囁いた。
「えいえんはあるよ」
その言葉は
「ここにあるよ」
ぼくの心が
「ほんとうに？」
永遠のある場所にいることを理解させた。

ぼくにとってそれは、かつての幸せな日常が帰ってくるという意味でしかなかった。
気が付いたら、ぼくは永遠がある場所に立っていたのだ。
それがどういう意味を持つのかなんて、何一つ考えなかった。

●　●　●

「どうもお前に起こされると、条件反射で惰眠を貪りたくなるんだよなあ」
翌朝もまた気持ちよく晴れ渡っていた。

毎度のことながら瑞佳に起こしてもらいつつ、浩平は勝手なことを言っていた。
「もうちょっと別の起こし方をしてくれれば、すぱっと起きそうなんだけどな」
「どんなだよ」
瑞佳が怪訝な顔をして訊く。
言ってはみたものの、実は考えていなかった。仕方がないので適当に思い付いたことを言ってみる。
「そうだな。キスして起こしてくれるとか」
「どうせそんなことしたって絶対ぐーぐー寝てるよ」
「まず起きるだろ」
「何で？」
「どきどきするからな」
ついつい返事をしてしまってから、間抜けなことを口走ったのに気が付いた。
しかし瑞佳は浩平の思惑には気付かず、慌てふためいている。
「わたしなんかにキスされて嬉しいのっ？」
「男ってのはそういうもんなんだよ」
居心地悪い思いで浩平はいい加減に話を切り上げようとしたが、瑞佳の方はショックか

ら立ち直っていないらしい。
「そっか、わたしにキスされて嬉しいんだ……浩平」
とんでもなく恥ずかしい台詞を小声で呟いている。
思わず浩平は瑞佳から着替えと鞄を強奪して階下へ逃げ出してしまった。

少し照れくさいような、間の悪い雰囲気のまま、浩平達は登校した。
教室にはもう留美がいた。何故か彼女のトレードマークでもあるお下げ髪を両手でそれぞれ摑んでいる。
「何やってるんだ？」
「守ってんのよ。見れば解るでしょ？」
何からだ、という間もなく、横開きの扉をがらりと開けて繭が駆け込んできた。
「みゅーっ」
そう言いながらやおらに留美のお下げ髪を握っている両手を、上からがしっと摑みそのまま引っ張っていたのだ。なるほど、と納得する。
「お前さあ、髪の中に何か仕込んでおけば？　サボテンとか爆弾とか」
「どこの女がそんなもん髪に仕込んで歩くのよ。それって嫌すぎるわよ」

「じゃあ諦めるんだな。椎名がお前の髪を引っ張らなくなるとは思えん。フェレットの一種だと思っているからな」
浩平は無情にも言い放った。
留美が何か言おうとした時、ちょうど髭がドアを開けて入ってきたのだった。

昼休み。
生徒達はおのおの学食へ食べに行ったり、教室で弁当を広げたりしている。
しかし繭は放心した様子で立ち尽くしていた。
「椎名、飯は食わないのか?」
「おかねだけある」
「なら、学食だな」
「がくしょく?」
どうやら馴染みのない単語らしい。繭の学校には学食がなかったのかもしれない。
浩平は説明してやった。
「学校には学食というものがあるんだよ。学生食堂の略だ。弁当のない奴はそこでセルフサービスのランチを食ったり、脇にある購買でパンを買ったりするんだよ。どっちでも椎

名が好きな方を選んで、金を払って食えばいいんだ」
「うん」
心もとなさそうに繭が一度うなずく。
「学食は下駄箱の方へ行く廊下を、反対側にまっすぐだ。食い物の匂いがするからすぐ解るはずだ」
一瞬、ついて行ってやろうとも思ったが、それでは繭の為にならない。
かいがいしく面倒を見るのは瑞佳の方でいい。繭を安心させる笑みを浮かべて頭を撫でてやるばかりが人に心を開かせる方法ではないはずだった。
自分がしなければならないのは、繭をちゃんとひとり立ちできるようにすること。その一歩を踏ませてやることだ。
「じゃ、行け」
自分ひとりで食事を調達できるように頑張らせなければならない。
繭はまだ浩平の前でためらっている。ひとりで知らない場所に行くことが不安で仕方がないのだ。
「おなか、空いてないのか」
「おなかすいた……」

「そのままじゃ午後の授業、受けられないだろ」
「うん」
「あれ、どうしたの？」
気になったのか、瑞佳も様子を見に来てしまう。
「椎名にひとりで学食に行かせようとしてたんだけど」
繭は頼るようにみゅーみゅー言いながらすり寄ってゆく。その心細そうな顔を見て、瑞佳がこう言い出すのは必至だった。
「やっぱりわたし、一緒について行ってあげるよ」
「駄目だ。それじゃ学校に来てる意味なんかないだろ。椎名も長森に泣き付かないで、ちゃんとひとりで行け」
ようやく決心したのか、繭はひとりで駆け出した。
それを気になるように見ていた留美に、浩平は声をかける。既に浩平とのやり取りで、地が見えてきたのか、今日はもう取り巻きの男達はいなかった。
「七瀬、昼飯食おうぜ」
自分の机を無理やり留美の机にくっつける。
瑞佳も小さな弁当箱を持って、留美のところにやってきた。浩平もまた、自分の机から

買ってきてあったパンを取り出した。
大騒ぎしながら食べていると、早く食べ終わって戻ってきた男子生徒が浩平のところに来た。
「おい、購買であの、何てったっけ、折原の連れてきた子がわんわん泣いてたぜ。金でも持ってなかったんじゃないのか？」
瑞佳が血相を変えた。
「行こうっ」
瑞佳が浩平の手を引っ張って走り始める。
購買に駆け込むと、そこには既に人だかりができていた。その向こうから繭のものとすぐに解る泣き声が響いている。購買のパン売り場の方だ。
人だかりをくぐって、繭の方に近付く。
パンが並べられている棚の前で山ほどパンをぶちまけて、繭は大泣きしていた。
瑞佳がそのパンを拾ってやる。自分も一緒に拾ってやった。その時に浩平はそれがどれもハンバーガーであるのを確認した。
「どうしたんだ？　言わなきゃ解らないぞ」
しゃくりあげながら、繭が言葉を漏らす。

「ハンバーガー……」
「繭、ハンバーガーが食べたかったんだね」
「でも、足りないって……っ」
繭の眼にはまた涙がたまってきた。
しかし、それにしてはハンバーガーの量が多すぎる。自分と瑞佳が拾った分を合わせると、ちょうど１ダースあった。
「おまえ、12個も食おうとしたのか」
「いっぱいたべたかったの」
「いっぱい食べたくても12個は多すぎだ」
瑞佳がやさしく諭す。
「ほら、繭。ちゃんと計算してみようね。１個１６０円するでしょ？　繭のお昼代はいくら？」
繭は掌に乗った５００円玉を瑞佳に見せた。
「じゃあ、みっつしか買えないよ。それにジュースだって欲しいでしょ？」
「ジュースほしい」
「だったら、ジュースを買うお金も残しておかなきゃ。だとしたらふたつだよ」

「ハンバーガー、もっとたべたい」
「じゃあ、ジュースはいらない?」
「ほしい」
「どっちかだよ」
これでは昼休みが終わるまで問答は続きそうだ。
それに本当に空腹なら、我慢するのは辛い。浩平も食べ盛りだからそのへんの気持ちはよく解る。
「立て替えてやるからちゃんと返せよ。でも、12個は多すぎだ。いくつ欲しいんだ?」
「10こ……」
「絶対食えん。減らせ。でなきゃもっと安いものにしろよ。これからだって飯代かかって仕方ないだろ」
「ハンバーガーがいい」
「わたしも出そうか?」
「金はある。でも6個にしとけ。絶対それ以上は食えない」
「6個……うん」
物足りなさそうにうなずくと、繭はハンバーガーを6個取った。浩平は繭のお金で買え

ない残り4個のハンバーガー代を立て替えることになった。
　何個かのハンバーガーは絶対残ると思って頭が痛い浩平の気持ちを知らず、繭は腕から溢れるようなハンバーガーを抱え、スキップせんばかりの喜びようで教室に戻った。
「うわっ、何これ」
　いきなり自分の机にどさどさとハンバーガーの山ができて、留美がうろたえた。
「椎名の昼飯だ」
「それにしても、よくおんなじものばかり食べる気になるわね」
　浩平がもっともらしく告げると、繭は嬉々としてハンバーガーかぶりついた。しかし、想像していたことではあるが、繭が食べきったのは2個だけ、3個目のハンバーガーを一口かじったところで玉砕してしまった。
「もうおなかいっぱい……」
　満足そうに制服の袖で口に付いたソースを拭くのを見て、留美が叫んだ。
「こらっ、タレがつくでしょっ」
「やっぱりそんなに食べられなかったんじゃないか」
　今の繭は小さな子供と同じだ。眼で見てどれだけでも食べられると信じ込んでしまい、現実に胃のキャパシティがどのくらいあるのか気にかけていないところがある。

このへんもおいおい教えてゆかないと駄目だな、と浩平は思った。
結局昼食だけで昼休みが終わってしまったのだった。

五時間目が終わり、休み時間になる。
「みゅー……トイレ」
「自分で探してこい。学校には山ほどトイレがあるから、どれかには必ず行き着く」
うん、とうなずき椎名が教室から出てゆく。
「ねえ、繭はどこに行ったの？」
心配そうに瑞佳が寄ってきた。昼休みの件もあり、心配でたまらないのだろう。
「トイレ」
「場所は教えてあげたの？」
「いや、校内にはたくさんトイレがあるだろ。廊下を右に歩いて行っても左に歩いて行ってもあるんだぜ」
「大丈夫かなあ」
それでも瑞佳は心配そうだ。だんだん浩平も心配になってきた。
「……ねえ、浩平」

「後、追うか」
廊下に出て、繭の後ろ姿を探す。浩平達は難なくきょろきょろしながら歩いている繭を見つけることができた。
「ちゃんと向かってるね」
「当たり前だ。まっすぐ歩いたら教室に入るか窓から飛び降りでもしない限り、絶対トイレに着くんだよ」
しかし、繭がもたもたしている間にするりと他の女生徒が入ってゆく。
繭はついて入らないで、何故かそのまま通り過ぎて階段を降りていった。
「家のトイレと混同してるな、あいつ」
次に立ち止まったところは何と生活指導室だった。おもむろに横開きのドアを開け、入って行ってしまう。
生活指導の教師がまさか学生全部の顔を憶えているはずもないが、偽学生の繭がひょこひょこと入り込んでいい場所でもない。浩平達がやきもきしている間に、何事もなく繭が出てきた。トイレでなかったので戻ってきたのだろう。
しかし、様子がおかしい。
歩き方が小刻みに、早足になっている。そしてきょろきょろと不安そうに周囲を見回し

ている。
そのまま小走りで下駄箱の方へ駆け出した。
「どこへ行くつもりなのかな、繭」
繭は靴も履き替えないまま外に出てゆく。
ひとつの推測が浩平の頭に浮かび、浩平はぎょっとした。
「あいつ、外でする気だ！　もう止めなきゃやばいぞ。走れ、長森っ」
浩平達も上履きのままで繭を追いかけた。
繭が出てきたのは中庭だった。しかし繭の表情は一層強張る。
時期柄本来ならいないだろうと思われる、バレーボールをして遊ぶ女生徒達が中庭に陣取っていたのだった。これでは隠れて用を足す訳にもいかない。
浩平達が必死で繭のところに追い付いた時にはもう大声で泣き叫んでいた、
「ごめんね、繭っ。ほら、トイレはこっちだからねっ」
瑞佳が繭の肩を抱き、校舎の方へ連れてゆく。
その光景をバレーボールをするのをやめた女生徒達が見ていたのだった。
夜になり、瑞佳から電話があった。

「どうした、長森」
『繭のことなんだけど』
どことなく硬い感じの声が響く。
『……やっぱり、無理があるのかなあ』
「学校生活のことか」
うん、と瑞佳が小さい声で言う。
『凄くかわいそうになってきちゃって……なんだか、見ていられないよ』
声が湿っぽくなっている。電話口で姿が見えないが、涙をこらえているのかもしれないと思った。
瑞佳は、困っている相手には無条件に手を差し伸べてしまうようなところがある。
しかしそれは、やわらかな少女のやさしさであって、獅子の子を千尋の谷に落とすような厳しいやさしさではない。甘えられたら際限なく受け入れてしまうのだ。
我が子を抱き締める母のように。
無条件で受け入れてくれるやさしさ、というのは、瑞佳のとてもいいところでもあるだろう。しかし今そうしてしまうことは、繭にとって決してよいことではない。
だとしたら、浩平こそが厳しいことを言う役を引き受けるべきなのだ。

「なあ、長森……今椎名には頑張ろうって気があるんだ。だからいろいろあっても学校に来てる。俺達は友達として最後まで見守ってやればいいんじゃないかと思うよ。よく考えてみろ。嫌になったとしたら椎名は学校に来なくなるだけだ。ある意味で今までと同じでしかない。まだ椎名にとってはそれだけのことなんだよ」

『そうだね、繭、本当に頑張ってるもんね。そんな風にはしたくないよね』

「それとな、椎名とはあまり一緒に帰るなよ。これから自力で友達を作るということもできるようにしてやらないとな」

『うん……そうだよね。ありがと、浩平。ちょっと気が晴れたよ。じゃ、おやすみ』

「ああ、おやすみ」

浩平は受話器を置いた。

(何だか俺、いつもと似合わないくらい真面目だよな)

半ば困惑するように考え込む。

たまにはこういうのも悪くないかもしれない。しかし、今日の疲労は極め付けだ。明日からも繭に関するどたばたでいろいろ大変なのだから、早く眠ってしまおう。

そう思って浩平は眠りに就いた。

今にも暮れてゆこうとする夕陽だった。
ひどく悲しい光景をぼくは黙って見ていた。
『どうしてこんな悲しい光景の中に、ぼくはいなくちゃいけないんだろう』
『あたしには綺麗に見えるだけだけど、そう見えるっていうのなら悲しい光景なんだろうね』
誰もいない、夜を迎える寸前の海。寄せては返す波の音は聴こえるけど、やっぱり決して夜は来ることがない。
『あなたの中の光景なのは確かなんだよ』
『ぼくの心を風景に置きかえてみたときの姿なのかな……』
『だとしたら、少し悲しすぎる？』
こんな場所だからこそ、ぼくは求めたのだろう。
どこに戻ることもできない、孤立した場所。なにもないこの場所できみと一緒にいられること。それはとても大切なことだと思う。
きみと一緒にいられることとの引き換えに、閉ざされているんだろうか。

それとも、きみと一緒に閉鎖される為にこそ、この世界は存在しているんだろうか。
わからない。
どこまでも行ってしまえばいいんだ。
ぼくの心の深みに。

第５章　好きという言葉

繭は見る見るうちに多くのことを学んでいった。
ひとりでも食事を調達できるようになり、トイレも自分で探せる。それだけでなく、自分が食べられないほどの食べ物をもてあますことも段々なくなっている。大好きなハンバーガーに囲まれると幸せになってたくさん買ってしまうのも、少しずつではあるが我慢できるようになってきているのだ。
そして浩平と瑞佳だけでなく、留美や住井、他のクラスメート達ともある程度支障なく喋ったり、笑ったりできるようになっていた。殊に留美あたりとは大騒ぎしながらもうまくやっているように見える。
繭は少しずつ成長していた。
そんな状態だったからこそ、予想しておくべきだったかもしれない。
夜、瑞佳が連絡してきた時に浩平は自分が何の心構えもしていなかったことを心底後悔していた。
『繭のお母さんから電話があって、繭を元の学校に復学させるって……!』
瑞佳は明らかに動転していた。浩平はそのショックに引きずられないように、なるべく平静な声色を作る。
「ほら、長森落ち着け。ちゃんと説明しろ」

まだ頭の中が整理されないような感じで瑞佳が話し始めた。
藺の母は娘がよその学校へ偽学生として入り込むのをひどく心配していたが、それが藺にとっていい状態であることは認識していたらしい。他人に興味を抱き始め、外への関心を持って、自分の身の回りのことを何とかしてみようという意欲を、家庭でも見せ始めているという。
しかし、そのままずっと本来行くべきでない学校に通わせておく訳にもいかない。これ以上浩平達の学校に愛着が湧き、このままよそへ馴染めない状態になる前にこそ、ちゃんと元の学校へ戻ってほしいと思っているらしい。
「まあ、もっともだな」
浩平はうなずいた。
「で、いつから来なくなるんだ？」
『23日までだって。最後の授業までってことじゃないかな』
「なるほどな。三学期から復学、という意味だな」
浩平はうなずいた。
「来週はテストで半日だし、ほとんどいる時間はないな。テスト明けに椎名をどこかへ連れて行ってやるか？」

『うん、そうしようよ』
瑞佳に挨拶をしてから受話器を切った。
「今日は演奏会前に最後に合わせるから、どうしても部活に行かなきゃ」
放課後、瑞佳は申し訳なさそうに謝った。
繭が復学の件についてどう思っているのか訊こうと思っていた浩平は、結局椎名家まで繭を送りがてら、繭の母に確認してくるつもりだったのだ。
さすがにこれは瑞佳がいないからと言って適当に放り出しておく訳にもいかない。
「椎名、今日はお前の家へ行くから一緒に帰ろうな」
「うんっ」
他に話せる相手ができたとは言え、まだまだ浩平のことは一番のお気に入りらしい。
商店街をぶらぶらしながら繭の家へ向かう途中。
「ハンバーガー……」
ふと繭が足を止めた。
浩平もよく行く、最近増えてきたファストフードのハンバーガー屋だった。繭は外まで漂ってくるハンバーガーの匂いにつられたらしい。

「お前、昼飯もハンバーガーだったろう？」
相変わらず繭は昼食にハンバーガー以外のものを買ってきたことがない。最近は食べきれるように2個買って戻ってくるのが成長したところだろう。
「てりやきバーガー」
繭はてりやきバーガーのポスターを指差した。
確かに、てりやきバーガーは購買のハンバーガーにはない。
「てりやきバーガーが一番好きなのか？」
「うん、たべたい」
もうすぐ繭は学校へ来なくなってしまうのだから、一緒に食べてやってもいいか、と思わなくもなかったが、やはり浩平は厳しい顔で戒めた。
「今食べると夕食がうまくなくなるぞ。お母さんが繭に食べてもらおうと思って作ってくれてるんだろ？　それを無視して、食べたいからって食べるんじゃ動物と一緒だぞ」
「……てきやりバーガー」
「椎名は動物なのか？　人間だろ？」
「わかった……たべない」
「よし」

浩平はわしわしわしわしと繭の頭を撫でてやった。

椎名家で、浩平は繭の母と逢って話をした。
「椎名は……復学のことを知ってるんですか」
「まだです。私が決めた段階で長森さんにお話ししました」
「俺が話して、いいですか」
「……お願いします」
繭の母は静かに頭を下げた。
浩平は会釈して繭の部屋に向かった。
繭の部屋のドアをノックし、そのまま中に入る。
繭が振り向いた。浩平と瑞佳が買ってやった謎のぬいぐるみにからまって遊んでいるようだ。
「ほぇ?」
「椎名、話しておきたいことがある。真面目に聞けよ」
「うん」
「今までお前、よく頑張ったよな。偉いと思うぞ」

「うん」
「もうちゃんとやっていけるようになったな？」
不思議そうに繭が浩平のことを見やる。
浩平は一度深呼吸した。
「お前が行くべき学校でもちゃんとやっていける。俺はそう信じてる」
その時繭の表情にはまだ何も浮かんでいなかった。それでも浩平は続けた。
「お前は強くなったよな。ちゃんと頑張ってきたよな。俺も長森もちゃんと見てた。椎名のお母さんだってちゃんと見てた。だから、新しい学校でもちゃんと頑張ってるって見せてくれるよな」
繭の眼から涙がこぼれた。しかしいつものようにわんわん泣き出したりはせず、必死で涙をこらえている。
「もし、辛い時があったら俺も長森も聞いてやる。だから、頑張れ。それにお前が辛いのに負けてるところを見ると、長森が泣くぞ。お前は強いんだから、あいつを泣かしてやるなよ、な」
「……うんっ」
それは、無防備で傷付きやすい女の子の顔ではなく、一生懸命大人になろうとしている

少女の顔だった。
「よし、えらいぞ」
浩平は繭の頭をがしがし撫でてやった。

椎名家を辞し、帰宅してすぐ浩平は瑞佳に電話をかけた。夕食時だからさすがに部活から帰っているだろう。
コール2回で、瑞佳本人が出る。
『もしもし、長森ですけど』
「俺だ。今日、話してきたよ……椎名に」
わずかに沈黙が流れる。
『繭、どうだった？』
「泣いたけどな、頑張ってくれるみたいだ。ちゃんと送り出してやろうぜ」
『……うん』
「椎名が頑張っていくつもりなのに、お前が泣いてどうするんだよ。つられて椎名が泣くかもしれないぞ。ちゃんと笑って送り出してやれよ。友達なんだから」
『そうだねっ、わたしが泣いてたら繭が心配しちゃうもんね』

一生懸命明るい声を出す。
空元気なのだろうと明らかに解るが、浩平は追及しなかった。

次の週、テスト期間に入った。
もちろん繭は答案を書く振りをするだけだ。浩平もこの時ばかりは居眠りしたりせず、何とかテストに打ち込んでいる。
一日目のテストが終わり、繭に声をかけてやる。
「疲れただろ。どこか遊びに連れてってやろうか。長森も一緒にハンバーガーでも食うか？」
ひどく心ひかれたようだったが、繭はゆっくり首を振る。
「おようふく、つくってもらいに行くの」
制服を頼みに行くのだろう。復学の為の準備は着実に進んでいるということだ。
「そうか、それなら仕方ないな。じゃあ、暇な日があったら言えよ」
「うんっ」
繭は帰って行った。
今日は繭と遊んでやるつもりで時間を空けたのに、思わず拍子抜けしてしまった。

ひとりでいる浩平の側に瑞佳が寄ってくる。
「あれ、浩平。繭は帰っちゃったの？」
「ああ、制服を注文しに行くらしい。遊んでやろうと思ってたんだけどな」
「そっかあ、残念だね。よかったらわたしと遊ぼうよ。わたし、暇だから」
今は昼だから、いつも行列ができる『パタポ屋』も少しは空いているに違いない。さほど並ばずともおいしいクレープが買えるだろう。そう思うと食欲が湧いてきた。
「長森、パタポ屋行こうぜ。この前行きそびれたし、おごってやるよ」
瑞佳が嬉しそうに笑った。瑞佳もパタポ屋のクレープは大好きなのだ。
ハンバーガーばかり食べている繭にもそのうち食べさせてやろう。甘いものが嫌いでなければ必ず気に入るはずだ。

この時間だと商店街もかなり空いていた。
午後からの休みを遊んで過ごそうと思っている生徒も見かけない訳ではないのだが、他校と必ずしもテスト期間が一致していないので、やはり空いていることに変わりはなかった。パタポ屋の前には数人の女の子が並んでいたが、さほど待つこともなく、最前列に並ぶことができた。

「ん、おいしいっ」
瑞佳はおいしいものを食べる時、とても幸せそうな顔をする。
もちろん、自分が食べているものも、極めつけにおいしいに違いないのだが、他人がおいしそうに食べているのも同じく極めつけにおいしいものだと知っていると、どうしても食べたくなってしまうのだ。
「あ、あの猫のぬいぐるみ、すごく可愛いねえ」
瑞佳がよそ見をした隙にクレープを大きくかじってしまう。
クリームに刻んだフルーツが混ざっていて舌に心地よい甘さが広がる。
「ああっ、わたしのクレープかじった！」
「他人の食いかけをかじるなんて汚いことをする訳ないだろ、ばか」
「そうだよねえ」
疑わしそうに浩平を見たが、ぬいぐるみの方が気になるらしく、すぐに横を向いてしまった。もちろん浩平がその隙を逃す訳がない。しかし、がぶっと深くかぶりついた拍子に、口の中には紙の部分まで入ってしまった。
浩平が顔をしかめる。
瑞佳がじっと浩平の顔とかじられた紙の部分を見る。

「浩平、もぐもぐしてみて。中に入ってるのが浩平のクレープなら、全部食べられるよね。だって、浩平の紙のところ、全然破れてないいんだもん」
「うっ」
白状しない限り、どうしても紙を食べる羽目になってしまうらしい。
仕方なく浩平は瑞佳の言う通り口の中の物を咀嚼し始めた。しかし、紙を呑み込んでしまいそうになった時につい、口から紙を吐き出してしまった。
「ああっ、やっぱり浩平が食べてたんだ！　ずるい。わたしも浩平の食べる」
「俺のクレープ！」
瑞佳から取り上げようとしたが、あっさりと浩平の分も食べられてしまう。小さな頃から一緒にいたせいで、そういったことには互いに全く抵抗がなかった。
「ほらほら浩平、この猫ほんとに可愛いでしょ？」
そんな風にして過ごす日々が本当に自然だった。

テスト期間の間、久しぶりに帰りは瑞佳と遊ぶことができた。
最終日は瑞佳が繭につきあって何か買い物をすると言っていた。新しい学校で使えるようにステーショナリー関係を見に行くらしい。しかし、女の子が好んで寄り付くような文

具類のコーナーは、やはりファンシーグッズと同じで近寄り難い。
浩平はひとりでテスト終了の開放感を楽しみながら、クリスマスの飾りで溢れた商店街を回っていたのだった。

●●●

真っ青な空に漂う雲海が、白い大地みたいに続いている。
空だけの世界。
『この下にはきっと、なんにもないんだ』
『そうかな。広い野原に羊がたくさん放し飼いにされてると思うな』
『なんにもないんだよ』
『だったら大地を作ろうよ。広大で新緑の生えたばかりの大地』
『いらないよ、海でいい』
幸せそうに草を食べる羊なんか見たくなかった。
青い空の下には青い海だけ。それがよかった。
『羊はみんな海に落ちてゆくの？』

『ぼちゃぼちゃと海に落ちて、そこでぷかぷか浮かんで余生を過ごすんだ』
『でも、その羊達は、みんなあなたなんだよね』
ここはぼくの心をそのまま映している場所だから。
今のぼくは無力なまま海に浮かんだ羊。
『でも、夢の中ではみんな、空を飛ぶんだよ』
きみはぼくの眼を見つめて言った。
でも、それは無力な羊には似合わない、開放的な光景だ。
『羊達は自分達の立場をわきまえた上で、海を選ぶんだ』
『それも自分の喩え?』
ぼくが自分の立場をわきまえてこの世界を選んだとするのなら、それはひどくこの世界を、そしてきみを侮辱していることになる。
きみは、気付いているんだろうか。
ぼくがこの世界を疑っていることを。
無条件で素晴らしい世界だと思えなくなっていることを。
それをごまかすようにぼくは口を開く。
『でも、羊達はとても泳ぎがうまいんだ。気持ちよさそうにじゃぶじゃぶ泳いで波をかき

分けてゆくんだよ』
『だったらいいよね。空が飛べなくても』
でも、空と海だけの世界に辿り着ける陸なんかないんだよ。
ずっと、海で浮かんでいるだけなんだ。

●●●

テストが終わって授業は通常通りになった。
久しぶりに住井がメモを渡してくる。いつも通りの生活サイクルになったので、冬休み前にひとつ、暇つぶしのネタを考えた、というところだろう。
何となく眠かったたし、眠気ざましに参加してみるもの悪くはない。そう思った浩平はメモを受け取った。

ビッグチャンス到来！
クリスマスキャンペーン実施のお知らせ
くじ引きによる抽選で一名様限定。意中の彼女に告白する権利を進呈。

浩平は溜息をついた。
(こりゃまた極悪な企画だな)
もちろん告白したからと言って成就する保証など何もない。みんなで白羽の矢が当たった気の毒な当選者を逃げられないようにはやし立て、見事玉砕するのを楽しむというネタだろう。見ている分には楽しいが、自分でやると思うとぞっとする。
住井がいくつか出ているこよりを浩平に差し出している。もう既に2、3本しかない。
仕方なく浩平はそのうち一本を引いた。
耳を澄ますと、教室中から男子生徒の溜息が聴こえた。
つまりほとんどの男子生徒が参加しているということだ。
浩平はこよりをほどいた。
その瞬間、浩平は硬直した。

当選、おめでとうございます。

そう書かれてあったのだ。

教室中の男子生徒が安堵の表情を浮かべている。もはやすり替えは不可能だ。
進退極まった浩平が、留美の背中をつつく。
「おい七瀬、いいものをやろう……」
「折原、こっちが先だ」
無情にも住井が呼び止める。
「見せてみろ。まだ当選者が名乗り出ていないからな」
「見ろ、はずれだ」
裏返してみたが通用しなかった。しっかり透けて見える。
住井がにっと笑った。
「おめでとう。クラスの男子生徒一同、お前を心から応援しているからな」

半日しか授業がないので、後は帰るだけだ。
「じゃあな、七瀬……」
全部言い終わる間もなく、浩平はダッシュした。
あんなことをさせられてはたまらない。逃げるが勝ちだ。
しかし浩平の企みは住井には当然見透かされていた。走り抜けようとする浩平の腕をが

っし、と摑む。
いたずらっぽい童顔がにまっと笑った。
「まさか逃げたりしないよなぁ？　みんながこれだけ後押ししてくれるんだもんなあ」
「わあったよ、黙ってろ。集中が削がれる」
とりあえず冗談で済ませておける相手をピックアップしなければならない。最初に繭のことが浮かんだが、ぽわんとしている間に意味も解らずうなずかれる危険がある。だとすると相手は瑞佳と留美に絞られる。どちらでも冗談にしてくれそうだが、どちらにしておこう。
しばらく考えて、やはり瑞佳にすることにした。
つきあいの長い瑞佳なら、あっさりと浩平をあしらってくれるだろう。
(うーん、案外『俺のカノジョになってくれええええっ』とか言って、髭に告白するのもありかもしれん)
受けは取れそうだが、それからが怖すぎる。
やはり瑞佳で行くことにしよう。
「じゃあ、行ってくる」
「おうっ、見届けてやるからな」



浩平は心の中で住井に呪いの言葉を呟くと、もう教室から出て行こうとしている瑞佳を呼び止めた。

「何？」

こうやって仮にも愛の言葉を告げる為に向かい合っていると、それが冗談でも緊張するものだ。しかし、本気でもないのにそうやっているのも馬鹿らしい。

浩平は口を開いた。

「長森っ、ずっと前から好きだったんだ。俺とつきあってくれっ」

（ほら、長森。早く茶化せっ）

心の中で叫んでいるが、当然瑞佳に届く訳もない。

瑞佳は戸惑ったようにうつむき、そのまま唇を開いた。

「うん、いいよ……浩平がそう言うなら、わたしはいいよ」

「……あ？」

多分浩平はひどく間抜けな顔をしていただろう。

瑞佳は照れたように笑うと、用があるから、と駆け去ってしまった。瑞佳の頬がほんのりと赤らんでいたのに気が付いたのは、瑞佳がいなくなった教室で男子生徒に歓声をあげられながら囲まれた時だった。

（何考えてんだ、長森っ）

こんな予定ではなかったのだ。大仰に告白してきた浩平を瑞佳に一蹴してもらい、その後でこっそり種明かしをして、窮地を救ってくれたお礼に何か奢ってやっておしまいだったのだ。

浩平は自分が言ったことが巻き起こしたことを、まだ信じられなかった。

瑞佳の件がよほど衝撃的だったのだろう。

翌日浩平は珍しくひとりで起きてしまったのだった。

身支度をし、食事を終えて、ひとりで家を出る。

「長森……」

玄関の前に瑞佳が立っていた。ちょうど起こしに入るところだったのか、待っていたのかは解らない。明るく笑んでみせる姿はいつも通りにも不自然なようにも見えた。

「おはよっ。今日はまた寒いね」

「ああ」

「ほら、こんなに息が遠くまで届く」

はあああ、と息を吐いてみせると、寒気で息が白くなる。

「浩平は、どこまで届く？　ほら、はあーってやってみてよ」
あまり気を入れずいいかげんに息を吐く。
「今の本気出した？　わたしの方が遠くまで届いてたよ」
今度はちゃんと息を吐いてみせる。遠くまで届く息を見て、瑞佳が笑った。
「わあ、やっぱりずっと遠くに届く。今度はわたしも本気出すからね」
そんなことをしながら歩いている。しかし瑞佳は行きを吐き過ぎて頭が痛くなったらしい。浩平は低い声で制止する。
「わたし、なんか馬鹿みたい……」
瑞佳の笑みに、ためらいが混ざっている。
「何だか、違う感じがするなあ。これから……冬休みも、クリスマスも去年と全然違うんだろうなあ」
「一年たてばいろいろ違うだろ」
「そうだけど……多分今年は特別に違うよ」
瑞佳が何を言いたいのか解る気がした。
「だって……わたしたち、つきあってるんだよね。だから、違うと思う」
照れて頬を染める瑞佳に対して、ひどく居心地の悪いものを感じていた。瑞佳のように

その変化をいいものとは取れなかった。
何か、大切なものが変わってしまったのだ。
「俺、他のクラスに用があるから、先行くな」
浩平は瑞佳の声も聞かず走り出していた。

瑞佳といるのが妙に辛い。いつも一緒にいたのに。
学校でも何となく瑞佳を避けてしまっている。瑞佳から逃げようと思って昼休みは繭を誘って学食へ行こうとしたのに、それを見た瑞佳が寄ってきてしまったので、結局繭を押し付けて自分は誰もいない埃のかぶった部室でパンをかじっていた。
さすがに瑞佳も数ヶ月寄りつきもしない部室にいるとは思うまい。
（何で俺、こんなことしてるんだ）
あの告白はただの罰ゲームみたいな代物のはずだった。
決して受け入れられるはずがないからこそ、相手に瑞佳を選んだのだから。普段の関係からして色気も何もない。じゃれあっている子供の延長だったのだ。
それだけしか望んでいなかったのに。
瑞佳の方もそうだと思っていたのに。

瑞佳の、ほんのり紅潮させた頬を思い出す。
『うん、いいよ……浩平がそう言うなら、わたしはいいよ』
いつから瑞佳はそんな風に思っていたのだろう。全く気付きさえしなかった。まるで自分だけが子供のままでいた事実を突き立てられたようで、妙にいらいらする。
(こんなじゃないんだ……)
昼休み終了のチャイムが鳴る。
ひどく辛そうに顔を歪め、浩平は教室に向かった。

放課後になり、浩平はそそくさと帰ろうとする。
下駄箱のところで、浩平は足を止めた。
瑞佳が待っていたのだ。
「一緒に帰ろうと思って」
「別に無理しなくてもよかったんだぞ」
「部活の方は全然心配ないんだよ」
確か演奏会はこの前の日曜日に済んでいるはずだから、抜けられなくもないというのは本当だろう。しかしどうにも割り切れない。

オーケストラ部が今もまだ練習しているのは、遠くからかすかに聴こえてくるクラシック音楽の音色ですぐに解る。真面目に部活に出ていた瑞佳が、頼まれもしないのに休むというのもどことなく嫌だった。

それでも断わる理由もないまま一緒に歩き始める。

ひどく冷え込んできている。

瑞佳が軽く震えながら白い息を吐いた。

「雪が、降りそうだね。今年もまたホワイトクリスマスになるのかな……」

「……そうだな」

浩平はまともに瑞佳の言葉を聞いていなかった。

手に、温かいものが触れる。

冷え切った浩平の手を瑞佳の温かい手が握っていたのだ。そこに視線をやると、瑞佳が照れて笑った。

からみつく温かいものが何故かうっとうしかった。

「本当に寒いよな」

浩平は瑞佳の手を軽く振りほどき、自分の上着のポケットに入れる。

瑞佳がひどく気まずそうに自分の手を引っ込め、何事もなかったように他愛ない話を始

めた。それさえも癇に障った。

●●●

虚無からは、幸せは生まれない。
たったひとりで果てのない海に投げ出され、ぼくは泣き叫ぶ気さえ起こらない。何もない。何もないのだ。
何もないから失わない。
何もない世界で、ぼくは何を恐れているのだろう。
それは多分最初から知っていたことなのだ。
終焉。
全てが終わってしまい、二度と動き出すことはない。
そのことをぼくは知っていたから……こんなにも、空虚だったんだ。

●●●

瑞佳に逢いたくなかった。
そのせいかもしれないが、浩平はひどく早く起きてしまった。
それこそラジオ体操ができそうな時間にさっさと身支度をして、食事をとって家を出る。
この時間なら瑞佳もまだ来はしないだろう。
まだ暗い道を歩いてゆく。
学校には誰もいないどころではなかった。しかし、入り込める場所はいくらでもある。
適当に潜り込んで教室に向かう。
ドアの下部にある通風口を勝手に開け、そこから入り込む。
教室の電気を点け、自分の机のところまでやってきた。それから何をするともなく、椅子に座ってぼうっとしている。しばらくすると日直の生徒がやってきて、教室をうろつき始めた。それから間もなく、早く登校する生徒達が教室にちらほら入ってくる。
瑞佳も浩平が家にいない以上そろそろやってくるはずだ。
何となく居心地が悪くなり、教室の外に出た。
ＨＲが始まるまで、どこかに隠れていよう。
そう思っていたが、廊下を走ってくる瑞佳に捕まってしまった。息を切らせている。よほど急いで走ってきたのだろう。

「どうして先に行っちゃうんだよ。待っててくれたらよかったのに」
瑞佳が口を尖らせる。
それさえもいらいらする。
「……いつそんなこと頼んだんだよ。起こすのだって、お前が勝手に起こしに来るんだろう？」
「そりゃ頼まれてないけど、浩平がそれだけわたしに心配をかけてるってことだよ」
「勝手に心配して勝手に世話焼いて、恩を着せてる気になるなよ」
瑞佳の表情が揺れる。ひどく動揺しているようなのが解ったが、浩平はフォローする気には全くならなかった。
「ごめん。でもわたし、恩を着せてるつもりじゃなかったんだよ。ただ、浩平のことが純粋に心配なだけ……」
「それがうっとうしいんだよ」
廊下を繭が走って寄ってくる。今日は繭が最後に登校する日だ。
「みゅーっ」
嬉しそうに寄ってくる繭の頭を黙って撫でると、浩平は瑞佳の方を見ないようにして廊下を歩いていった。

放課後、校門のところで繭を見送ることにした。
いつもよりは緊張している繭に、浩平は笑いかけた。
「よく頑張ったよな、椎名。ちゃんと次も頑張ってるって聞かせろよ」
「うん」
瑞佳が、腕に紙袋を抱えて走ってくる。
「どうした、長森」
瑞佳がにっこりと笑った。
「これ、繭におみやげっ。てりやきバーガー」
「わあっ」
繭が嬉しそうに袋を開く。そして食べてもいい？　という表情でそのうちの一個を取り出して瑞佳を見る。
「うん、食べて」
繭はその場でハンバーガーにかぶりついた。
「あああっ！」
向こうから叫びながら誰かが走ってくる。同じように紙袋を抱えている留美だった。

「何なのよ。これじゃあたし、ただの間抜けじゃない」
やはり繭の為にてりやきバーガーを買いに行ったものらしい。
「じゃあこれいらないだろうから、あたしが持って帰るわ」
「みゅーっ」
既にハンバーガーを一個食べてしまった繭は、留美のお下げ髪をぎゅっと引っ張っている。留美が奇声をあげて叫ぶが、寒い往来でそんな光景に注目する人間はいない。
さんざんお下げ髪を引っ張り飽きると、繭は留美の紙袋も奪い取った。
やはり、山ほどのハンバーガーに囲まれるのは幸せでならないらしい。
袋の大きさから想像するに、全部で優に15個はあるだろう。どうやって消費するのか興味が湧いたが、それは浩平の気にすることではない。
涙ぐむのをこらえて一生懸命笑顔を作る瑞佳も、照れているのかいつもよりもぶっきらぼうな留美も、頑張っている繭のことが好きなのだ。
繭の顔は、普段よりもわずかに大人びているように見えた。
「みゅーっ！」
満身の力を込めて、繭が左手を振る。
三人はそれに応えて手を振ってやった。



早々に留美が帰ってしまい、浩平と瑞佳だけが残される。
ふたりだけになってしまうと、途端に気まずくなる。
「あのね……浩平、どこかへ寄って行こうよ。話したいこともあるし……今朝のこととか、繭のこととか」
浩平はうんざりした表情をあえて隠さなかった。
「早く帰りたいんだよ。行きたきゃひとりで行けよ。俺は帰る」
「浩平とお話ししたいから行きたいんだよっ」
瑞佳の悲痛な声を無視して、浩平は早足で歩き出した。
それでも瑞佳がついてくる気配を感じると、そのまま走り出した。
遠くから浩平の名を震える声で呼びかける瑞佳の声が響いた。

今日はクリスマスイブ、終業式だった。
退屈極まりない式が終わると、髭がプリントだのを配布して、いい加減に話を終えた。
生徒達は冬休みやクリスマスパーティの予定を楽しそうに話し合っている。それを浩平は無表情で見つめていた。

「浩平、一緒に帰ろ？」
髭が退出するとすぐに瑞佳が浩平の机の前まで走ってくる。
「それとも用がある？」
「いや、ないけど」
「じゃあ、いいよね」
浩平は瑞佳と一緒に教室を出た。
帰り道、ためらうように瑞佳が話を切り出す。
「今日って、クリスマスイブだよね……」
「そうだな」
気乗りしなさそうな様子で相槌を打つと、瑞佳が泣きそうになっていた。
それを見ていると浩平の中に、何か暗い感情がゆったりと湧いてくる。その感情が高ぶってくると同時に、浩平は瑞佳に笑いかけた。
「なんか、うまいものでも食いに行こうか」
「うんっ」
花が咲くように愛らしい笑みが瑞佳に浮かんだ。
夕方の5時に、駅前の時計塔の前で待ち合わせして、浩平は瑞佳と別れた。

行くつもりなど毛頭なかった。
久しぶりに汚くなった部屋の掃除をした。洗い物をまとめ、雑誌を縛り、ごみを捨てた。それだけでも重労働だ。終わってからゆったりとベッドに横たわり、つまらないテレビを見ながらうとうとと眠りについた。
途中、何度も電話が鳴った。
しかし黙殺した。
クリスマスを祝えるのは幸せな人間だけなのだ。自分はそんな幸せな人間ではないのだから、こんな日に誰もかけてくるはずなどない。
頭の中から、泣きながら電話してきているはずの人物の影を無理やり追い払った。

第 6 章　夜天

いつも通りの、住井達と飲んで大騒ぎして過ごす新年。基本的に由起子叔母さんは放任主義なので、ある程度大きくなった甥っ子が酒を持ち込もうと騒々しい宴会を始めようと、全く頓着していなかったから、結果的に山ほど酒壜が転がることになる。
大晦日から浩平の家に半分住み付いているような住井が、アルコールのせいでけだるそうな声で訊く。
「折原、長森さんとはどうなってんの」
お前達のせいでめちゃくちゃだ、と言ってやろうと思ったが、やはり何も言わないでおいた。そんなことをわざわざ言うのも嫌だ。
「俺達のおかげでつきあえたんだから、感謝しろよ」
黙っていると、尚も住井が言いつのる。
「うまくいってんだろ？　お前、クラスの長森さんファンクラブの期待を裏切るような真似すんなよ？　長森さんファンクラブは全員、お前に長森さんを託した気分でいるからな。まあ、花嫁の父みたいなもんだ」
「そんな奴いる訳ないだろ。みんなとっとと別れればいいいと思ってるさ」
浩平自身が一番そう望んでいるのだから。
住井は首を振った。

「長森さんファンは皆純情なんだよ。だから長森さんがいいんだろうけどな」
純情、という言葉がどうしても気に障った。男どもの純情、そして、瑞佳自身の純情。不愉快で仕方がない。
みんな壊れてしまえばいい。
全部自分の足で思い切り踏みにじってやりたかった。

男達が雑魚寝している二階ではなく、一階に降りてきて、浩平は瑞佳に電話をかけた。
この前のクリスマスパーティをふたりでやり直そう、と。瑞佳は全く疑うこともなくはしゃいでいた。
「この前はごめんな」
『いいんだよ、もう』
「時間は明日の夜７時くらい、場所は学校の教室。いろいろ飾り付けておくからびっくりしろよ」
『そんなのは黙ってやってびっくりさせるもんだよ』
「そうだな」
『すごく楽しみだよ、浩平』

瑞佳の幸せそうな笑い声。

浩平も明日が楽しみでならなかった。そして明日には瑞佳の純情も、瑞佳を密かに慕う奴らの純情も、まとめてぶち壊すことができるのだ。

夜の学校に向かうと、校門の前で瑞佳が待っていた。手に持っている小さな包みに気付いたが、何も言わなかった。浩平がそれを受け取ることはないのだから。

ふたりは夜の学校へ入り込む。

静かで、真っ暗な廊下を歩いた。あまりに静かにせいで、余計に寒さを感じる。

「どうなってるんだろ、教室」

「見てのお楽しみだ」

実際には何もデコレーションなどしている訳がない。浩平が用意していたのは別のものだった。そいつは、息を殺して瑞佳が入ってくるのを待っているはずだ。

そうして、瑞佳が教室に入った時、瑞佳自身が無惨なデコレーションとなるのだ。

暗闇の中、瑞佳がそっと浩平の手を握る。

自分達の教室の前に来ると、ゆっくりとドアを開ける。

暗闇にたくさんの机のシルエットだけが浮かんでいる。普段の教室とは全く別のものの

ように見えた。誰も立ち入ることの許されないような雰囲気。
浩平は瑞佳を暗闇の教室に引きずり込み、壁に押し付けた。
「……浩平？」
「寂しかったか、長森」
「ねえ、どうしたの。浩平」
浩平は瑞佳の手を強く握ったまま、体を素早く引いた。
そして、代わりに瑞佳の前に寄った人物がいる。暗闇に眼が馴れない瑞佳は、眼の前にいる男が浩平でないなどと全く想像していないようだ。
男のはあはあという荒い息。そして、服をまさぐる音。
「……浩平っ」
それでも瑞佳は浩平の手を握ってくれていた。
今自分に触れているのが浩平だと信じて。
浩平の胸にぎりぎりと痛みが走った。
「……っ！」
瑞佳の手を振りほどき、乱暴に壁を殴る。そうして蛍光灯のスイッチを難なく探して押した。いきなり点いた蛍光灯が白く眩し過ぎる。

瑞佳の下着をずり下ろしかけ、押さえつけていたのは他のクラスの男だった。
自分がされていたことを、瑞佳は明るいところで見ていた。
「あ、あれ……っ？」
まだよく理解できないように瑞佳が声をたてる。とかと、間もなくこの意味を理解するだろう。そして信じていた相手から受けた心ない仕打ちに傷付くのだ。
耐えられなかった。
自分のしたことに、浩平自身の神経が保たなかった。
瑞佳が自分の名前を呼んでいたのも構わず、浩平は駆け出していた。

(俺は、長森が好きだったんだ)
どうして気付かなかったのだろう。
浩平が本当は瑞佳のことが好きだったことを。
つきあい始めて、瑞佳の優しさを一人占めできるようになった時に、多分もっと苦労するべきだったのだ。一番大切なものが安易に手に入ってしまったことで、浩平は瑞佳の存在が大切なものなのか解らなくなってしまったのだ。それで瑞佳を傷付け、それでも浩平のことが好きだということを確認したかったのだ。

（こんな形でしか確認できないなんて……俺は、馬鹿な子供だ）
どれだけ大切に思っていても、こんな扱いを受ければ許せないはずだ。それまで好きでいてくれればいてくれるほど。今の瑞佳が浩平を見やる時に、普段は決して見ることのない冷たい視線を投げてきても全く不思議はないのだ。
償いをしたかった。
償いという名目で側にいたいのだ。そうして浩平などよりもっといい男を、瑞佳をずっと大切にしてくれそうな男を薦めてやるのだ。
『でもね、わたしは浩平でないと駄目なんだ』
浩平は激しく首を振った。
まだ自分に都合がよすぎる言葉を期待している。そんな奇跡のようなことに期待するしか、救われる道などありはしないのだ。本当に瑞佳のことを思うなら、直ちに瑞佳の前から消えてやるべきなのに。
足音が聴こえた。そして、荒く息をつく気配。
「置いてっちゃうなんてひどいよ、浩平。真っ暗で、怖かったんだよ」
どこかで、解っていたような気がする。
こうして、瑞佳なら追ってきてくれるだろうということが。

「寒いね、浩平。ほら、はあーってしてみて」
瑞佳の方を見ないように、浩平は言葉を絞り出した。
「別れよう」
「どうしたの、浩平」
背中に、やわらかなものが当たる。多分瑞佳の頬だ。
「ひどいクリスマスになって、ごめんな」
「いいんだよ、わたしは」
どうしてあんなにひどいことをされたのに、許してしまえるのか。
「お前、自分が何をされたのか解ってるのか……解ってるのか、馬鹿!」
浩平はたまらず叫ぶと、振り返って瑞佳を乱暴に押しのける。
「クリスマスの夜だって、お前が待ってるのを知ってて行かなかったんだ! さっきだって俺のことを信じてくれてるお前を他の男に自由にさせてやろうとした……何とか言ってくれっ! 何とでもなじってくれよっ!」
浩平は瑞佳が自分に見切りをつけて去ってゆくのを待っていた。ここで嫌われてやることこそが、瑞佳の為になる。そう思っていた。
去ってゆく足音は聴こえなかった。

「ほら、はあーっ、てしてよ、浩平。はあーっ、て」
瑞佳に言われる通り、息を吐いてやる。
白い息が遠くへ届く。
「ね、ずいぶんと白くなってるでしょ」
「ああ……そうだな」
一瞬、眼の前がうるむ。
「わたしはね、浩平の側にいたいよ」
「でも、浩平が別れたいんだったら、それもいいと思うよ」
「ああ」
「でもまた、やり直せるよね」
浩平は星空から降ってくる光を浴びるように、瑞佳の言葉を待った。
「わたしは、浩平でないと駄目なんだ……やっぱり、浩平でないと駄目なんだよ」
「……俺も、長森じゃなきゃ駄目だと思う」
にっこりと瑞佳が笑う。
その笑みは、澄んだ夜空のように綺麗だと思った。
「じゃあ、お別れ。でも、今日は一緒にいてよね」

「ずっとお前の側にいるよ……いたいからな」
浩平は瑞佳の肩を抱き寄せる。
瑞佳が冷えないように気を付けてずっと夜を過ごした。何もしなくてよかった。側にいさえすればよかったのだから。
やり直そう。
そう誓った。

始業式の朝。
瑞佳の通学路の途中で浩平は待っていた。こんなことは今までなかったはずだ。いつも瑞佳が迎えに来てくれるばかりで、自分が行ったことはなかった。
瑞佳が軽く驚いたようだった。
「どうしたの、こんなところで」
「決まってるじゃないか。待ってたんだよ」
「わたしを？」
不思議そうな顔をしながらも浩平に笑いかけてくれる。
「迷惑だったか？」

「ううん、嬉しかったよ」
「そうか、よかった」
全てが新鮮だった。瑞佳の言動、自分自身のリアクション。
並んで歩き出した時、話している瑞佳の隙を見て手を繋いでみる。
「わっ」
「ど、どうした」
瑞佳が驚いているのは見て明らかだというのに、それでもいつも通りの振りをしている。しかも全然成功していない。
結局瑞佳は何を話していたのか忘れてしまい、無言で手を繋いで歩くという羽目になってしまった。互いに照れながら通学路を歩く。そんなことさえ自然に、心地よく感じてしまうのは、瑞佳と気持ちが通じ合っているからだろう。
本当に、幸せだった。

●　●　●

陽も暮れて、空を見上げるとそこは違う空なんだ。

いつもとは違う人生につながっているんだ。

ぼくはそのまま海を越えて知らない街で過ごす。そして、いつしか大きくなって、思うんだ。幼い日を送った、自分の生まれた街があったことを。

そこにあったはずのぬくもりのことを。

『それは、今のあなたのことなのね』

『そんな風に聞こえた？』

『うん』

あのときぼくは自分の街にいることを願った。もちろん、この世界を否定しようと思った訳じゃない。この世界の存在を受け止めた上で、向こうの世界へ残れるんじゃないかと思ってたんだ。でも駄目だった。

『そんなこと、わざわざ言ってほしくないよ』

ただ、ぼくがもっと頑張っていれば、あの場所にいることができたのかな。自分の努力ひとつでどうにでもなったのかな。

それだけが気になるんだ。そうできたとしたら、人との絆ってそんなに安易なものだったのかな、と思うと悔しいんだ。

『多分、無理だったと思うよ。あなたの中で、この世界はもう始まっていたんだから』

やっぱりそうだったんだ。
でもそれが無理でも、この世界を終わらせることはできたかもしれない。
できるかもしれない。

『この世界は終わらないよ……もう終わっているんだから』

●●●

前のように、朝は瑞佳に起こされるようになった。
「全くもう、心を入れ替えて早起きが身に付いたのかと思えば、すぐこれだもん」
浩平は瑞佳の小言を聞きながら、まだ半分眠りから醒めないでいる。
「じゃあねえ……」
ぷにゅっ、と頬に柔らかく湿ったものが当たり、浩平は慌てて飛び起きた。
「効果てきめん！」
頬をこすっている浩平に瑞佳が笑ってみせる。
「まさか、今の……キスか？」

「ピンポーン」
浩平はすぐさまわざとらしく寝入った。
「ばか、もうしないよっ」
「なら起きない」
「起きてるよ……もう、仕方ないなあ。あと一回だけだよ」
瑞佳が唇を寄せようとした瞬間に浩平がいきなり起き上がった為に、瑞佳が枕に激突していた。
「お前、恥ずかしい奴だな。キスしようとして逃げられたのか。言いふらしてやったらみんな驚くぞ」
「もうっ、だったら意地でもするもんっ」
瑞佳が飛び込んできたせいで、浩平の頭が壁に当たる。瑞佳の顔が至近距離にあった。
ぷっくりと可愛い瑞佳の唇がすぐ側に見える。
「キス、意地でもするんじゃなかったのか」
「……いいの?」
「だから待ってやってるんじゃないか」
しばらく瑞佳が構えていたが、突然赤面する。

「やっぱりやめ……っ！」
瑞佳が顔を引いてしまう直前、浩平は瑞佳の頭を自分に向けて固定した。歯が当たる音がしたが、ちゃんと唇が触れ合っていた。
懐かしい味と、匂いがした。

結局ぎりぎりになって登校することになってしまった。
「そういや、今日、午後から用はあるか？」
「まだ解んない。もしかしたら部活あるかも」
「じゃあ、駄目だな。ふたりでどこかへ行こうと思って」
「いきたいよ、わたし。都合つくなら帰りに言うから、ね」
「そうだな」
浩平は瑞佳が自分と一緒に出かけるのを喜んでくれることが嬉しかった。
放課後、瑞佳はしばらくすると浩平のところに戻ってくる。
「部活の方で集合がかかってるけど、早く終わるって」
「じゃあ決行だな」

「浩平、一度帰る？　わたしも帰ると思うし」
「そうだな。じゃあ、1時半に高台の公園で」
瑞佳と手を振り合い、浩平は商店街へ向かった。
今日は珍しく暖かかった。その陽気の中、浩平は瑞佳や繭と一緒に入ったファンシーショップの前に立った。パステルトーンの店に入るのはかなり抵抗があるが、その店の前でずっと立っている不審人物になるのも嫌だったので、勇気を出してドアを開けた。
中に入った瞬間に、ほわほわした物体とパステルカラーで頭痛がしたが、ここで引く訳にはいかなかった。今日は、瑞佳へのプレゼントを買いに来たのだから。
あの最悪のクリスマスのやり直しをしたかった。心を込めたプレゼントを持って、ちゃんとした服を着て、瑞佳を待っていたかったのだ。
（それにしても、あいつは何をもらったら喜ぶんだ？）
大体瑞佳や他の女が喜ぶ類の代物は、浩平にはよさがさっぱり理解できないのだ。花やぬいぐるみの類をもらって喜ぶ人種の気が知れない。そんな人間がこういった店でものを選んでも、まともなものを見繕えるはずもなかった。
どれもこれも同じに見えてしまう。
かと言って自分が間違いなくセンスが悪いと思うものでは、万人が見てもセンスが悪い

だろう。この店にも時折そういう想像を絶する代物が転がっており、かえって眼を引いてしまう。
「彼女にプレゼントですか？」
「はい、って、えーと……」
多分店員もこうやって、ファンシーグッズの前で脂汗を垂らすガマ状態の少年をたくさんあしらっているのだろう。馴れた調子で訊いてくる。
「何か、具体的にお探しのものはありますか」
「女の子が喜びそうなもので、うーん……」
浩平の実に煮え切らない発言を受け、店員は任せておけ、といわんばかりにうなずいてみせた。
「だとしたら、やっぱりぬいぐるみですね。こちらなど今一番人気となっておりまして、雑誌でも評判になりましたが、どうでしょう。相手のご趣味はどんな感じですか？　キャラクターものとか、動物とか」
そこで浩平はひらめいた。
瑞佳の猫好きは半ば病気である。三日連続で猫を拾ったことがある人間は、浩平が今まで生きてきた中で瑞佳しかお目にかかったことがなかった。テスト期間にふたりでクレー

プを食べた時にも、瑞佳はここのショーウィンドウを覗いて、猫のぬいぐるみに歓声をあげていたではないか。

浩平はおもむろに猫っぽいと思われる棚に手を突っ込んで、意気揚々と店員の顔に付き付けた。

「これ下さいっ！」

眼の前に自分がぶら下げた代物を見て、浩平は硬直した。

うさぎだった。

「かしこまりました」

店員は浩平からうさぎのぬいぐるみを受け取り、レジまで持ってゆく。

「消費税入れまして、９２４０円となります」

こんなうさぎのぬいぐるみなんぞにそんな高値を払う奴の気が知れない。そう思いながら泣く泣く財布から一万円札を出す。うさぎのぬいぐるみはあっという間に器用な店員にラッピングされ、釣り銭と一緒に浩平に手渡された。

去り際、自分が手を突っ込んだ棚に並んでいるのが全部うさぎであることを確認して、全部蹴落としてやろうかと思ったが、そのうさぎについている『オイラ、喋るぴょん』という読んだら死にそうなコピーを見て脱力し、そのまま出ていったのだった。

（それでめちゃくちゃ高い訳か……）

何はともあれ、プレゼントは確保された。まともに考えると気に入ってもらえるのか怪しいような気がしたが、瑞佳は自分が選んだものなら必ず気に入ってくれる。そんな気もしていた。偶然ではあるが、このうさぎには世界でたったひとつのプレゼントになってくれる機能が搭載されている。それをフル活用しよう。

家へ帰るとキッチンには簡単に昼食が作れる用意だけがしてあった。それを冷蔵庫の中にしまっておいた。今日は瑞佳と昼食をとるのだから。

二階へ上がり、制服の上着だけ脱いで椅子にかけておく。

ベッドの上に正座し、さっき買ったばかりのプレゼントの包みを破らないように開ける。丁寧に脇へよけておき、うさぎのマニュアルを見た。

七転八倒しながらも何とか声を吹き込み、もう一度包み直す。

その時にはもう約束の一時半は過ぎていた。

急いで持っている服の中で比較的かっちりとした服に袖を通し、髪をきれいにとかして部屋から飛び出す。いつものスニーカーではなく革靴をはいて駆け出した。

心臓破りの坂を全力疾走する。

間もなく、はあはあと息をつきながら公園に着いた。髪はばさばさに乱れており、体も

熱い。シャツのボタンをひとつ外して熱気を逃がす。
しかし、誰もいなかった。
公園の外を犬を散歩させている老人がひとり歩いていたが、肝心の公園の中は無人だったのだ。
違和感。
一瞬、奇妙なものを感じたが、あまりに短すぎて浩平はしっかり認識できないままその違和感を忘れてしまった。
そのまま噴水の縁に腰かける。
時計は1時55分。
(あいつもふてぶてしくなったもんだよな……俺が遅刻するって見越してるんだな)
ただし、盛装した男がプレゼントだと明らかに解る包みを持って人を待っているのは、実に恥ずかしいものがある。
3時になっても、瑞佳は姿を現さなかった。昼食を食べずに待っているのだから、さすがに空腹になってきた。
しかし4時になっても瑞佳は来なかった。
4時半頃になると見る間に空がかき曇り、冷たいものが肌に落ちてくる。雨だ。

しかし傘を持っていないので避ける手段はない。
(あいつだってあの日、こうやって待ってたんだろうな。馬鹿だから、平気で二時間も三時間も、今日の俺みたいにプレゼント抱えて……)
だったら自分も待とう。
しばらくそうしていたが、雨はとうとう本降りになってきてしまう。プレゼントが濡れてしまうといけないので、抱きかかえて庇うように持っていた。靴も下着もぐちゃぐちゃに水を吸っている。
突然、視界が暗くなった気がした。
我に返ると、浩平は噴水の側に倒れていた。顔のあたりが泥でざりざりと痛い。
(馬鹿、長森……プレゼントが濡れちまうだろ)
ひどく寒気がした。
瑞佳が倒れて冷たくなっている浩平を見つけたのは、6時を過ぎた頃だったらしい。

体が全く動かなかった。
節々をさいなむ鈍痛のせいだけでなく、筋肉にも力が入らない。しかし、学校を休んでしまうと瑞佳に逢えなくなってしまう。そんなのは嫌だった。

無理やり体をベッドから滑り落とす。しかし体力が保ったのはここまでだった。落ちた床の上でまともに動くことができないまま転がっていた。
どれだけそうしていたのかは解らない。
しかし気付くと側に瑞佳がいた。
瑞佳がひどく綺麗に見えた。
「浩平、びっくりしたよ。床で倒れてるんだもん」
瑞佳に手を差し伸べると、火照った浩平の掌を握ってくれた。ひどく冷たくて気持ちよく感じるのは、自分の掌が熱いからだろう。
「熱、下がってはいるみたいだけど、まだまだあるね」
微笑んでくれている瑞佳の顔を見ていて、浩平は思った。
「キスしていいか」
「ええっ？　駄目だよ浩平っ、病人なんだから」
動転している瑞佳がとても可愛い。
「長森とキスしたら絶対元気が出る」
「嘘だあ……」
瑞佳が頬を赤らめてうつむいている。

「じゃあ、一回だけだよ」
瑞佳が枕元に手をついて、身を寄せてくる。その時浩平は瑞佳の首に手を回し、唇を重ねた。決して瑞佳を離さないように抱き締めながらキスを続ける。
「だ、駄目……浩平」
最初は抵抗しようとしていた瑞佳から、やがて力が抜ける。自分の唇で瑞佳の唇を挟み込んだ。やわらかくて、温かい唇だ。
「お前……やっぱ牛乳の味がするな」
そう言うなり、浩平は瑞佳をベッドに引きずり込んだ。それだけでもひどく体力を消耗する。瑞佳が浩平の名を小さく呼んだ。
今にも意識が薄れそうになっていた。おまけに体中が痛くてたまらない。
瑞佳をどれだけ愛しているか、ダメージをこらえてどれだけ愛せるのか、この身で証明するつもりだったのだ。浩平は瑞佳をベッドに押し倒し、全身で覆い被さった。
「浩平っ、起きたりしちゃ駄目だって」
「いいんだ。頑張るからな、俺は……」
瑞佳に笑いかけてやったつもりだった。しかし、動くたびに関節に走る痛みのせいで、瑞佳に届く前に笑みではなくなっているかもしれなかった。

ゆっくりと、瑞佳の服を脱がしてゆく。そうすることで特に楽しんでいる訳ではなく、素早く脱がせることが体力的に不可能なだけだった。

胸の前で瑞佳が両手を合わせ、それ以上脱がされないように抵抗する。しかし、浩平は両腕を頭の上に押し上げ、制服の上着をめくりあげた。

胸を覆う白い下着もやはり上へずりあげる。器用に外している余裕は全くなかった。

瑞佳の胸は綺麗なラインを描いている。

そこに、浩平は自分の顔を埋めた。

やわらかい。いい匂いがした。

そのまま胸に埋もれて眠ってしまいたい欲求にかられそうだった。

それでも浩平は熱でまともに動かない指をショーツに引っかけて、不器用に降ろしていった。

瑞佳が真っ赤になった。

「ね……カーテン、閉めようよ。恥ずかしいよっ」

窓まで歩いていたら、その間に倒れてしまう自信があった。

「じゃ、お布団……かぶして、お願い……っ」

そんな体力を使っている余裕はなかったのだ。ショーツでさえしっかり脱がせる余裕が



なくて、片足に引っかけたままで放ってあるのだから。
脂汗が体中から流れていた。
「駄目だよ浩平、もうよしとこうよ。倒れちゃうよ……その、また別の日の方が。元気になってからの方が」
それでは意味がないのだ。
この苦しいときでなければ、今大事に思っている気持ちにふさわしくないほど簡単に手に入ってしまった瑞佳を、どれだけ大事に思っているかという証明にはならないのだ。
浩平は瑞佳の両膝を立てようとするが、瑞佳の方も必死で力を入れてくる。
「見えちゃうもんっ。やだよ……っ」
「見たいんだよっ」
「明るいからよく見えちゃうもんっ」
「よく見たいんだよっ」
「じゃあスカートめくらないでっ」
そんな問答をしているうちに、体力が限界にきた浩平は、がくん、と瑞佳の腹部に顔が落としてしまう。そのまましばらく瑞佳の上で休む。
瑞佳が半泣き状態で訴えた。

「もう横になっててよ。死んじゃうよっ！」
「それでも、やめない」
霞んでよく見えないまま、瑞佳の方を向く。
長い沈黙があったような気がした。とうとう瑞佳は根負けした。
「わかったよ……」
瑞佳が全身の力を抜いたのが、浩平にも解った。
脚が持ち上がるようになったからだ。
「すごく恥ずかしいんだから……あんまり見ないでよ」
その光景があまりに羞恥心をそそるらしく、瑞佳はぐっと顔をそむけた。浩平は自由になった両脚を広げ、ベッドに押し付ける。そのせいで瑞佳の部分は浩平の顔の前にさらされることになった。
思わず喉を鳴らす。
「浩平っ、見過ぎだよっ」
瑞佳が脚をばたつかせたが、浩平の手で押さえつけられて動けなかった。
そのまま、瑞佳のその部分に口をつけた。
「ええっ？」

舌を差し出し、その部分で上下に動かす。ゆっくりと舐めている間に、瑞佳の中から溢れてくる液体が浩平の口に入ってくる。
瑞佳の匂いがした。
瑞佳を感じていた。
浩平は一度その部分から口を離し、瑞佳に告げた。
「長森……いくぞ」
「ど、どこへっ?」
「馬鹿、入れるってことだ……」
浩平の性器はその間に充分硬くなっていた。
機能しているのが不思議な状態だというのにそうなっているのは、瑞佳を必死で愛そうと思っているからだろう。
「いいな、長森」
瑞佳は一瞬浩平の性器に眼をやり、思わず眼をそらしてしまう。
段々視界がぼやけてきて、自分が瑞佳の上で何もしないでいるだけでも辛い。
「辛そうだよ、浩平……」
「どんなに辛くても、長森が、好きだから頑張るんだよ」

「……解ったよ」
瑞佳がうなずいた。
瑞佳の両脚を抱えて、腰を沈めていった。浩平のそれが瑞佳の中に入ってゆくたび、瑞佳が眉を寄せた。
「痛いか……？」
「ううん」
しかし一度途中でつかえたところで、瑞佳は苦痛に歪んだ。
瑞佳とひとつになっている部分から出ている液体に、赤いものが混じる。それでもやめなかった。瑞佳もまた、痛いのをこらえて協力してくれる。
最後まで入ってしまった時にはもう、動かすのは難しくはなかった。
瑞佳の体の、体内の温かさを感じながら、瑞佳の愛を感じながら、浩平は動き続けた。
「はあ……っ」
その途中瑞佳を抱き上げ、抱き締めた。
ずっと好きだった瑞佳を、自分の限界ででも抱けたことが誇らしかった。大好きで、大切でたまらない瑞佳を安易に抱いてしまうのは嫌だったのだ。
浩平は動いた。

そして、果ててからもそのまま瑞佳を抱き締め続けていた。
翌日も無理がたたったせいか、浩平は動けなかった。熱はある程度下がった感じはするのだが、体力を使い過ぎたせいだろう。昨日とは違う感じに体が痛い。
朝、瑞佳が学校に行く前に寄ってくれた。
「ちゃんと養生してるんだよ」
「う……」
まともに声が出なかった。しかし、浩平は瑞佳を手招きした。
ひとつ、気になったことがあったのだ。
枯れてしまってほとんどは息と変わらない声で喋る。
「な……がもり、あのひ、おくれ……たの、は、なぜだ……？」
「……」
瑞佳の過失で遅れたのなら、こんな高熱を出した浩平に必ず平謝りしているはずなのだ。
謝ってほしい訳では全くないのだが、瑞佳の性格は把握している。
それが、謝罪どころか言い訳の一言もないのだ。瑞佳らしくなかった。
しかし数秒後、浩平はうすら寒い思いを味わった。

表情の消え失せた瑞佳の顔。まるで往来ですれ違う通行人を見ているような顔。

「……なが、もり？」

おそるおそる呼びかけてみる。

「わたし、あの時偶然浩平を見つけたんだよ。ほんと、大変だったんだから」

瑞佳の顔に笑みが浮かぶ。それは明らかに自分の混乱に戸惑っていることをごまかす為の笑いだった。

「じゃあ、帰りにまた寄るね」

浩平はうなずいた。

瑞佳がドアを閉めると、階段を降りてゆく音が遠ざかってゆく。

気味の悪い思いを抱いたが、何しろ浩平の体力自体が既に枯渇状態だ。喋れないのに無理やり声を絞り出したのもまずかったのか、ひどく眠くなってきた。

そのせいで先刻起こったことの意味を深く考えることはできなかった。

体力のなさと、まだ残っている熱の残滓に攪乱されて考えが浮かばない。

明日までにはしっかり回復して、瑞佳と学校へ向かおう。そして帰りに一緒にどこかへ寄り道しよう。

意識が薄れかけた浩平が考えていたのが、これから瑞佳と過ごす楽しい学校生活だった

としても、愛する人を抱いた直後の少年の発送としては何も不思議はないだろう。
しかし、それは長い眼で見れば間違っていた。
浩平は消耗しているのにも構わず、必死で考えるべきだったのだ。熱は養生していれば治る。体力も食事と睡眠で回復する。
時がたてばたつほど手遅れになってゆくことが、既に浩平が見えない場所で進行していたのだった。

●
●
●

悲しいことがあったんだ。
楽しい日々がずっと続くと思っていたのに。
永遠なんて、なかったんだ……。
ぼくが泣きながらそう言った時、きみは言った。
「永遠はあるよ」

きみの小さな掌がぼくの頬をはさむ。
「ずっとわたしが側にいてあげるよ、これからは」
ちょこん、と一瞬だけ寄せられた唇だった。
あれは永遠の盟約だ。
盟約だったんだ。
それを果たす為に、全てはかならず動き始める。
ぼくはそれを知っていた。知っているだけだった。
どういう意味だか解らないままで。
永遠の意味も、時が流れてゆくことの意味も。
あの時のぼくはなにも知らなかった。

第７章　きみがいる奇跡

翌日には体調はかなりよくなった。
本調子とまではいかないものの、動くのに全く支障はなく、浩平はそれまでかいた汗を流して朝食をとろうと思った。
数秒後。浩平はキッチンに入ったまま、奇妙な顔で立ち尽くすことになった。
何故か朝食がなかったのだ。
由起子叔母さんは仕事でとても忙しいので、朝食を作れないことは実はままあった。それでもカップスープくらいは用意してあったり、最悪の場合は『コンビニででも買って食べること』と書き置きして、小額のお金が置いてあるのが常だ。
カップラーメンがそのまま置いてあることさえ少なくなかった。
しかし、テーブルに何も置いていないというのは、今まで初めてだ。
まして浩平は昨日まで熱を出していて、いくらか病人食らしい、消化のよいものを揃えてあったのだから、その余りでも出してあっても不思議ではないはずだ。昨夜見た時にはまだインスタントおかゆのパックがあった。
浩平は一応冷蔵庫を開けてみる。
インスタントおかゆのパックは昨夜と同じようにそのまま入っていた。
へたを切って洗ってある苺も中にあった。

昨夜、戻ってきた由起子叔母さんが、用意してくれたものだろう。
夏でもなければ由起子叔母さんは、不精な浩平が食べ物を口に入れざるを得ないように必ずテーブルに出しておいてくれる。浩平がこの家に来た時からずっとそうだった。何故いきなり用意してくれなくなったのか解らないが、浩平は奇妙な違和感を抱いた。
（たかが食べ物のことで、俺も変だけどな……）
由起子叔母さんは大手文具メーカーの管理職になって数年、異常に忙しくなっている。だからいつか朝食を作れなくなっても全く不思議ではない。
この程度のことでああだこうだ言うのも嫌だった。
しかし、そう思っていても感じてしまうこの違和感は何なのだろう。
結局浩平は苺だけをいい加減に食べ、そのまま家を出たのだった。

「プレゼント、ありがとね。すっごく可愛いうさぎさんだったよ」
そう言えばベッドの側には例の包みは転がっていなかった。
「どこへ消えたかと思ってたよ」
「もらっちゃいけなかったの？」
小首を傾げて瑞佳が訊く。

浩平は思わず恥ずかしくなって言い訳をしてしまう。
「あれは……俺が衝動買いしたんだ。ファンシーショップからうさぎが呼んでいる声が聴こえてきて、ついふらふらと……」
「嘘ばっか」
瑞佳がくすくすと笑う。それでも精一杯格好をつけて言った。
「あんなのでよかったらやるよ。うさぎの声は幻聴だったに違いない」
「すごく可愛くて、わたし、気に入っちゃったよ。嬉しかった……あれ、クリスマスプレゼントでしょう?」
「まあな」
そこで返事をしてしまっては、今までのがただの照れ隠しだったと公言したようなものである。瑞佳は幸せそうに微笑んだ。
「じゃあ、わたしもお返し」
瑞佳が何かを差し出した。やわらかくて、あたたかな感触。
手袋だった。
細い毛糸で丁寧に編んである、明るい黄緑色の手袋。きちんと編まれているせいで、かえって手作りだと知れた。デザイン化されたイニシャルが手首のあたりに見える。

「わたしとお揃いなんだよ、ほら」
瑞佳が自分の手をひらひら動かしてみせた。
「嫌がらせみたいなものだよ。それ、つけて歩ける？」
「これくらい何てことあるか」
浩平は手袋をはめた。触り心地がいい。多分、瑞佳は浩平が身につける時に気持ちがいい毛糸を一生懸命選んでくれたのだろう。冗談めかしていても、その愛情が伝わってくるようだ。
「いい感じだぞ」
「よかった。じゃあ、愛用してよね」
後半はまた茶化してしまったが、瑞佳の頬がほんのり紅潮している。
浩平も照れてしまって冗談で済ませたが、言葉には全く嘘はなかった。
瑞佳が編んでくれた手袋を授業中にも根性でつけていたら、さすがに手が蒸れてしまった。見かねた瑞佳がいつもはつけていなくてもいいと言わなかったら、手に水虫でもできていたかもしれなかった。

こんなに幸せな日々を送ることは二度とないのかもしれない。
そう思うほど幸せだった。
瑞佳がいてくれればそれはずっと続くし、瑞佳はずっと自分の側にいてくれると思った。
確かめてはいないが、そんな気がした。
いつもみたいにじゃれあって、馬鹿なことを言って笑う。側に一番大切で、愛している人がいてくれる。
そんな毎日がずっと続く。
続くのだ。

学校からの帰り道、緋色から朱色へ、朱色から薄紫へのグラデーションが泣きたくなるほど美しい夕焼け。その独特な色に頬も髪も染められて、瑞佳が微笑んだ。
「すごいね、浩平……真っ赤だよ」
「お前もだ」
どこまでも続く、赤い世界。
耳元で、からころ、と小さな何かが転がるような音がした。
浩平の動きはそこで凍った。

みさおが泣き出した。

ぼくが真空飛び膝蹴りごっこで遊んでやったら、それがまともに当たって泣き出してしまったのだ。そのたびに、ぼくはおかあさんにおこられる。

でも、みさおはぼくが謝ってやると、いつもすぐに泣くのをやめる。

みさおがべつに忘れっぽいからじゃなくって、ぼくがいい兄でありつづけたからだと思っていた。

●
●
●

みさおは、父さんをしらない。

そんなことを言ったらぼくだって父さんのことなんか、いたことくらいしかおぼえていないのだ。でも、みさおは全然父さんのことそのものをしらない。

だから、母さんとみさおとぼくしかいない家族で、男としての愛情をそそいでやれるのは、ぼくだけしかいないんだと信じていたから、みさおを大切にしてやりたいと思っていたのだ。

たとえば、父親参観。
ぼくにとっての父親参観はなんとなくいごこちの悪い、背中にしせんを感じてやだなあ、という日でしかなかった。そういうものだと思っていた。
でも、他のやつらにとっては、父親参観はうれしいものらしかった。
どんなにさえないお父さんでも、自分のことを見ていてくれるだけでそわそわして、どきどきするものらしい。ときどき後ろをふりかえって、自分のお父さんがいるのをちらっと見たりしている。
だから、ぼくはぼくの味わったような、つまらない父親参観はみさおに味あわせたくなかった。他のやつらがよろこんでいるのと同じくらい、みさおによろこんでほしかったのだ。
父親参観のちょっと前、ぼくはみさおに言った。
「父親参観さあ、ぼくがでてやるよ」
「お兄ちゃんって、あいかわらずばかだよね」
ぼくはみさおをアイアンクローごっこであそんでやる。最近のおきにいりだ。
泣きそうなかおで、みさおが言いかえした。
「だってっ、お兄ちゃん、おとなじゃないもん」

「そんなもの変装すればだいじょうぶだと決まってるんだ」
「背がひくすぎるよ」
「空きかんを足の下にしこむ」
「そんなまんがみたいにうまくいくわけないよ」
「だいじょうぶだ。うまくやってみせるよ」
「ほんとおっ？」
「だから父親参観の日はたのしみにしてろよ」
みさおはうれしそうな声をたてた。さいしょはばかにしてたくせに、おしまいは笑顔になっていた。ぼくはみさおの笑顔が好きだったから、ぼくもまた父親参観にみさおを喜ばせてあげられるのが楽しみだった。

もうそろそろ、靴の下にちょうど合う缶とか、どこかにしまってあるお父さんのスーツとかをちゃんと用意しなきゃいけないな、と思ってたころだった。
みさおが病気になったのは。
ぼくはみさおがどんな病気なのか聞かされなかった。
でもけっきょく父親参観の日を、みさおは病院のベッドで過ごすことになった。

「いつも腹出して寝てるからだぞ。気付いた時には直してやれるけど、さかずにいつもは直してやれないよ」
「でも、おなかに落書きするのはやめてよ。まえも身体検査のときに笑われたんだよ」
「だったら寝相をよくしろ」
ぼくはみさおの前髪をかき上げてやりながら、窓の外を見た。
空の青が鈍くなっている。
もう、秋が終わろうとしているのだ。

冬になっても、みさおの病気は治らなかった。
暗くなってしまってからぼくは、背中にあるものをかくしながら入った。
「どうしたの、こんな時間に」
この頃みさおは本ばかりよんでいる。おもしろいよ、と言うけど、そんな字ばっかりの本をよんでいたって、おもしろいはずがない。ぼくにしんぱいをかけないように、やせがまんをしているんだ。
だから、ぼくは持ってきてやったものをみさおに出してやった。
プラスチックでできた、カメレオンのおもちゃだ。

平らなところで動かしてやると、おなかのところのローラーと連動した舌がぺろぺろうごく、というものだった。みさおにあげようと思ってぼくのおこづかいで買ったのだ。
「わあ、おもしろいね」
「だろ？」
「でも、ここは平らなところがないよ」
よくかんがえてみたらそうだった。
ベッドにねたきりになっているみさおの、手にとどくところには平らなところなんかなかった。がっかりしたぼくに、みさおはわらってみせた。
「だいじょうぶ。てのひらを使えばいいいんだよ」
小さなみさおの手の上で、カメレオンをころころ動かしてみせた。
ぼくが試したよりゆっくり動くカメレオンを見て、みさおは嬉しそうだった。
これで退院までのほんのちょっとの間、みさおが退屈することはないはずだ。

でも、すぐに退院できるだろうと思っていたみさおは、思ったより長く病院にいなきゃいけないみたいだった。
一度、大きな手術をした。

後で知ったけどその時みさおのおなかは、みさおのおなかでなくなったらしい。意味はよくわからなかった。お医者さんのせつめいは難しすぎたのだ。

せつめいしてもらった時のことは、いつもはやさしいお医者さんが、怖い顔でながながと話していたことだけだった。

その時それよりもつらかったのは、それまでぼくと同じようにみさおのことを心配して病院に来てくれていたお母さんが、病院とはちがう場所に入りびたるようになっていったことだ。このことは、みさおにはくわしくは言えなかった。

家の中に、変な『さいだん』みたいなのが置かれるようになった。

かべには、お札がべたべたと貼られていた。

たまに帰ってくると、お母さんはその『さいだん』に向かってぶつぶつとお祈りしているばかりで、まともにぼくと話をしてくれなくなった。

だから、それからのぼくはいつも、ごはんを買う為のお財布をじぶんで持ち歩くようになっていた。たったひとりでごはんを食べて、テレビを見て、お風呂に入って寝た。

なんだか前のお母さんとはちがった眼つきのお母さんが、ごくごくたまに『せっぽう』をしてゆく。そのことはみさおには知らせたくなかったけど、すぐにみさおにも解ってしまった。お母さんが変な服を着たおばさんを連れて、みさおの病室でおいのりをしていっ

たからだ。

それからはお母さんはほんとうにたまにやってくると、家でするのと同じように『せっぽう』をみさおにもしてゆく。だからみさおもぼくも、それにはなれた。

でも、ひとつだけみさおには言っていないことがある。

みさおの部屋に貼ってあった、女の子向けのアニメのポスターが外されて、お札が壁いっぱいになっていることだ。それだけでなくて、部屋の中にはお墓の線香を甘ったるくしたような匂いがいっぱい染み付いているのだ。

みさおの部屋じゃなくなったみたいだった。

しばらくした頃、病室に行ったらみさおの髪がなくなっていた。

ただでさえひどくやせてきているのに、頭をつるつるにされてしまうと、ぜんぜん区別がつかなかった。

カメレオンのおもちゃをころころ動かして遊ぶみさおは、げっそりと落ちくぼんでしまった眼でそれを見ていた。

ぼくはみさおに、ぜったいに『辛いか』とか『苦しいか』とは聞かなかった。そんな風に聞いてしまったら、みさおはぜったい、ううん、と首をふるに決まっているのだ。

でも、ほんとうに苦しかったり辛かったりしたときには、じぶんで言うだろう。その時に元気づけてやればいいんだと思っていた。
後から見れば、それはまちがっていたような気がする。みさおが苦しいと言った時には、もう助けてやれるような状態じゃなかったのだから。

「みさお、今年の願い事はなんだ？」
「もちろん、元気になることだよ。それで、お兄ちゃんがきてくれる、ちちおや参観日をむかえるの」
新しい年が来て、みさおはますます小さくなったような気がする。青白く、消えてしまいそうに見えた。
あれからみさおの口からは、父親参観のことがよく出るようになった。ぼくは今年こそはみさおの夢をかなえてやりたかった。早くその日が来てほしかった。

またすることになっていた手術が、とりやめになった。ぼくはほっとした。
みさおのおなかがどんどん取られてゆくようで怖かったのだ。手術をしなくていいということは、みさおの病気がなおっているということだ。ぼくはうれしかった。

みさおは相変わらず、ぼくのあげたカメレオンをころがして遊んでいた。
そのまま、ふと寝入ってしまったみさおが、そのまま起きないいんじゃないかって、ひどく不安になった。
これからだんだんよくなるはずなのに。
みさおの誕生日までには、なおってるといいんだけどな。

ある日、みさおが言った。
「ちちおや参観日にしようよ、今日」
「今日？」
「うん」
ぼくはみさおがどうして今日でなければならないと思ったのかはわからなかった。ただ、みさおが今日したいと思うなら、今日してやるべきだ、と思っただけだ。
「場所は？」
「ここ」
「ほかの子は？」
「みさおだけ……ふたりだけの、ちちおや参観日。だめ？」

「よし、やろう」
みさおがふっ、と消えてしまいそうなほどはかない笑みを浮かべた。
ぼくは家まで戻って、変装用具をとって走った。病院の廊下で、かなり前にれんしゅうした通り、足の下に缶をしこんで服を着替えた。
油性マジックで髭をかく。ほんとうのお父さんに髭があったかおぼえてないけど、髭があった方が大人だって感じがしたのだ。
カンカンカン。おぼつかない脚でみさおの部屋に向かった。
ドアをノックして中に入った。
みさおの返事はなかった。
「……みさお？」
「う……っ、お、お兄ちゃん」
一生懸命笑おうとしていた。
それでもみさおの顔はゆがんでいた。
「ちがうだろ。お父さんだぞ」
「うん、そうだね……」
ひどく苦しそうだった。でも、ぼくはみさおがそう言い出すまでいつものお兄ちゃんで

いなければならないのだ。
「じゃあ、見ててやるからな」
ぼくは壁を背にして立つと、ベッドに横たわったみさおを見た。
それだけのことがひどく苦しそうに、みさおはカメレオンを動かしている。コミカルなカメレオンの顔から、舌だけゆるゆると出るのが悲しかった。
みさおがうめいた。
こんなに妹が苦しんでいる時に、ぼくは見ているしかできないんだ。部屋の一番はなれたところで、荒く吐かれる息の音を聴いているだけだ。
カメレオンが動きを止めた。
そして、とうとうみさおからその言葉がもれた。
「くるしい……っ！　くるしいよ、お兄ちゃんっ」
ぼくは走った。足の下の缶のせいで転びそうになりながら、みさおにかけ寄った。
「みさお、だいじょうぶだぞ。お兄ちゃんがそばにいるからな！」
泣きながら、痛い痛いとうったえるみさおの手を握る。
「はあっ……お、兄ちゃん」
「どうした、みさお。お兄ちゃんはここにいるぞ」

「うん……ありがとう、お兄ちゃん……」
それがぼくの聞いたみさおの最後の言葉だった。
その直後、騒ぎを聞き付けたお医者さんや看護婦さんがばたばたと駆け込んできて、みさおが何かをしゃべったのかさえ解らなかったのだ。
ぼくはいい兄であり続けたと思っていた。
あの感謝の言葉は、それに対してのものだと思いたかった。

一日中、雨が降っている日にみさおの葬儀はおこなわれた。
そのせいで、ひどく静かに思えた。ぼくは感情が消されてしまったように冷めた眼で、みさおの棺をずっと見つめていた。
喪主、という葬儀をする大人の人は、由起子叔母さんだった。遠くの街からやってきて、いろいろ手続きをしてくれた。
お母さんは最後まで現れなかった。ただ、思い出すだけでうんざりするような、例の宗教団体から何か届いていたらしい。
こんなふうに送られることを、みさおがのぞんでいたとは思えない。あんまりさびしすぎる妹の最後をぼくはただ、見ていた。

ぼくは、ほんとうにひとりになってしまったのだ。
ひとりになって、みさおが遊んでいたカメレオンのおもちゃを見たとき、ぼくは初めて涙を流した。まるで、堰を切ったように涙がとまらなかった。
こんな悲しいことが待っているなんて、ぼくは知らなかった。
ずっとみさおと一緒にいて、みさおの笑みを見ていられるのだと思っていた。みさおがぼくをお兄ちゃんと呼び、このカメレンのおもちゃで遊び続けてくれるのだと思っていたのに。
ぼくはこんな悲しいことのために生きてきたのだろうか。
そんな未来に向かって進んでいるのなら、前なんか見たくない。ずっとここでみさおと一緒にいた場所にとどまっていたかった。
永遠に。

だからこそ、永遠の盟約をぼくは交わしたのだ。

●
●
●

「瑞佳っ！」
生まれて初めて、瑞佳を名前で呼んでいた。
瑞佳は無言で浩平を見つめている。その眼には一切表情は浮かんでいない。こんな表情の瑞佳を、前にも見たことがあった。
公園に来るのが遅れたのは何故なのか。
瑞佳を抱いた日の翌日、浩平が瑞佳に問い質した時の瑞佳の表情だった。
「……瑞佳？」
喉に不快な唾液が絡み付いた。何となくひりひりするように軽く痛む。
「……どうしたの？　浩平」
何事もなかったように微笑もうとする瑞佳を見て、浩平は悟った。
自分の存在が薄れてゆく。それをひしひしと感じていた。それこそが最近感じている違和感の正体なのだ。
（永遠の盟約……）
浩平は夕焼けを見つめた。
今まで現実なのかそうでないのか解らなかった、たったふたりで空を見つめていた世界。

どうあがいても、決してどこにも届かない世界。向かう場所も、訪れる時間もない。
それこそが、永遠なのだ。
（この空の向こうに、永遠があるんだ……）
絶望した、子供の頃の浩平が求めた世界。
あの日にこそその世界は始まり、やがて浩平と共に収束してゆく。それはあの世界へ行ったまま、決して戻ることはないことを意味する。
「なあ、瑞佳。望んだ世界が生まれていたとして、そうしたら、どうなると思う？」
低い声で浩平が訊くと、瑞佳は不思議そうに首を傾げた。
「望んだ世界？　何だか意味がよく解らないけど」
「例えば……そうだな、小さな時にお菓子の国のお姫様になりたいと強く思っていた女の子がいたと思ってくれ」
「あ、わたしがそうだったよ。そんなこと思ってた」
「時がたって、知らないうちにお菓子の国がその子の強い願望によって生まれていたんだ。そうしたら、どうなると思う？」
瑞佳はしばらく真面目な顔で考えた。
「女の子は……選ぶんじゃないかな。お菓子の国に行くのか、元の世界に残るのか」

選ぶなどということができるのだろうか。浩平は混乱する記憶を探って考え込んだ。物語にはもうひとり、別の登場人物がいたはずだ。

常に浩平と寄り添っていた少女が。

「王子様がいるんだ。その国には」

「うん」

「女の子は盟約を交わしていたんだ。一緒に暮らそう、って」

「うん」

「女の子は大きくなって、小さな頃の夢は薄れて大切なものができた。お菓子の国に行く気がなくなった。条件が変わってしまったんだ。そうしたら、どうなる」

瑞佳は小声でああなってこう、だのと呟いてから顔を上げた。

「そうなると女の子は、強制的にお菓子の国へ連れて行かれるんじゃないかな」

「そうすると俺……いや、女の子はこの世界ではどうなると思う?」

「いなくなるんだよ」

ざわり、と背筋に冷たいものが走る。

向こう側に行き、なおかつこの世界にも同時に残ることが不可能であるのなら、確かにこの世界には存在できなくなる。簡単なことなのだ。

しかし感情的にはどうしても割り切れなかった。
小さな子供の頃の、しかも身内の死で動転していた子供がすがるように交わした、他愛もない口約束のせいで、この世界から浩平は消えてなくなりつつあるのだ。
由起子叔母さんは数年来欠かさず用意してくれた朝食を、何も言わないまま用意しなくなった。愛している瑞佳でさえ、浩平に関する記憶が曖昧になっている。
このまま全ての人にも忘れ去られて、遠い空の向こうの世界へ行ってしまうのか。
ひどくせつなかった。
浩平はうっすらと笑みを浮かべて瑞佳に頼んだ。
「瑞佳。できるだけ俺のことを思っていてくれよな」
瑞佳は浩平の笑みによぎる陰に気付くことなく、幸せそうに笑った。
「わたし、本当にいつもいつも浩平のことを考えてるんだよ。勉強の時とか以外はね。きっと浩平、わたしの頭にどのくらい浩平のことばっかり詰まってるか知ったら、びっくりすると思うよ」
「そりゃ気が付かなかったな。そういうことはいちいち口に出して言ってくれたらいいんだよ」
「そんなの、いくつ口があっても足りないよ。また袖のところが汚れてるな、とか、ちゃ

んと朝食食べてきたのかな、とか、顎のところに髭が伸びてるな、とか」
「いろいろ見てるな」
「まだまだあるよ。今ちょっと優しかったな、とか、今の浩平ちょっと格好よかったな、とか、ちゃんとそんな浩平の為に頑張れてるかな、とか……」
最後の方は涙で声がかすれていた。
浩平は瑞佳の頬に手をやった。
「そんなことを考えてたのか、お前。不甲斐ない俺にはもったいないくらいの、立派すぎるくらいの彼女だよ。俺の方が頑張らないとな」
「浩平だってわたしの為に頑張ってくれてるよ。すごくすごく」
「だったらいいけどな」
浩平は瑞佳の唇に自分のそれを寄せた。
大好きな瑞佳が自分のことを忘れないでいてくれれば、その間だけでもこの世界に留まっていられる。自分の大好きな瑞佳の側に。
側にいたかった。
側にいてやりたかった。
「……今日、初めて名前で呼んでくれたね、浩平」

できるだけ長く、瑞佳の側にいたかった。

翌日、浩平の考えを立証してみせるようにまた朝食は用意されていなかった。それだけでなく、由起子叔母さんが自分の食事をとって、洗い桶に食器を浸けてあった。
自分ひとりの食事を用意して食べ、会社へ行ったのだ。
最初からそうしていたように。
浩平は結局朝食を食べないで、迎えに来た瑞佳と学校へ向かった。

それからの浩平は休み時間にはあまり教室にいることがなくなった。
屋上に続く階段に座って、生徒達が通り過ぎてゆくのを見る。何人も顔見知りが浩平に気付かないまま、正確には知らない人間と判断して投げた視線をそらして歩いてゆくのだ。
彼らに、そして彼らを含むこの世界自体に置き去りにされたような気分だった。
それはただの感想ではなく、現実そのものだった。
始業間際の校門。
昼時の食堂。
放課後の通学路。

いろんな場所に立ち尽くし、流れてゆく生徒達を見ている。そこそこ親しくて、見れば必ず声をかけてくれるような相手までが、浩平に気付かなくなってゆく。

時間が流れてゆく。

だんだん永遠の世界が近付いてきているのだ。

「あ、浩平。こんなところでどうしたの？」

いつも通り屋上へ続く階段に座っていた時、通りかがった瑞佳が声をかける。

小さな子供のように、ぱたぱたと駆け寄ってくる。

多分、ほとんどの人間が自分を認識しなくなっている時期に、浩平を見つけてくれた人間がいること自体が不思議な感じだ。

「お前を待ってたんだ」

「こんなところを通りかかるのって、そんなにないんだよ？」

「じゃあ、ここで逢えたのは奇跡なんだな」

浩平が笑ってみせると瑞佳も微笑み返した。

「隣、座らないか」

「うん」

瑞佳が浩平と触れる位置に座った。

「ほんとは、こんなところで何をしてたの？」
「本当に奇跡を待ってたんだよ」
「わたしと逢える？」
「ああ。あのな、瑞佳……俺はお前とずっと一緒にいたいよ」
「……え？」
「離れず側にいてくれよな」
約束を交わしたかった。そうしていないとひどく不安で仕方がなかったのだ。
瑞佳が照れたように、ほんのり頬を染めた。
「うん、浩平がそうしたいならそうするよ。でも、わたしのことがうっとうしくなったら言ってよね。浩平に迷惑をかけたくないから。だから、それまではずっと一緒にいるよ。そんなの、恋人同士でもないのに変かな」
瑞佳は別れたままの相手なのだ。
よく考えれば別れてから瑞佳と気持ちが通じ合い、瑞佳と触れ合ったのだ。今の互いに大切に思えて、解り合える関係を、なりゆきで好きだと告白した時のようにぶちこわしにしたくない。そうでなかったとしても、好きだという言葉でくくってしまうことによって、類型的な恋人像の形に関係そのものを小さく切り取ってしまうような気がしてならなかっ

た。
瑞佳と一緒にいられるという確証を得て、瑞佳が浩平のことを忘れていなかったら、その時にこそ言おう。そう思った。
「いくら変だとしても、ふたりがそう思わなかったらそれが俺達の普通なんだよ」
「そうだね。これが、わたし達の普通……」
瑞佳が笑いかけてくれた。
その普通に、いつまですがっていられるのかは解らないけれども。

しかし、変化は思ったより早く来た。
陽の光が暖かくなり始め、そろそろ三学期も終わる準備を始めなければならない頃。朝食を抜く癖ができた浩平は、瑞佳と一緒に朝の通学路を走っていた。
「浩平っ、前っ！」
よける間もなく、浩平は誰かと派手に衝突した。
前にもこんなことがあった。もちろん、こんなに手加減なく他人にぶつかるような人間は留美以外にはいない。
案の定、アスファルトの上に突っ伏していたのは留美だった。

「相変わらず、俺が悪いみたいじゃないか……」
「当然でしょっ⁉　ね、そこの人も見てたでしょっ……あれ、瑞佳じゃない」
留美は瑞佳に気付いて素早く立ち上がってスカートをはたいた。その後浩平の方に顔を向けた。きょとんとした眼で浩平を見ている。
浩平は視線の意味をすぐに理解した。
留美もまた、浩平のことを憶えていないのだ。それを悟った瞬間、留美にかけようと思った声が出なくなってしまった。いつも通りに七瀬、と呼びかけて、予想通りの返事が来るのが怖いのだ。
あなた誰、と。
瑞佳ひとりが状況の呑み込めないまま、浩平と留美の顔を見較べていた。
結局留美は例のスピードで先に行ってしまい、浩平と瑞佳も再び走り出した。
校門まで来て、浩平の足が止まる。
クラスでも留美は、結構親しくしていた方だった。その留美が浩平のことを忘れてしまっているということは、他のクラスメートも推して知るべしだ。
耐えられなかった。
「さぼろうぜ、瑞佳。どっか行ってふたりで遊ぼう」

「どうしたの、浩平。駄目だよ。次の休みにしよ?」
次の休みなど、多分ないのだ。
「ほら、約束するから」
瑞佳が小指を出した。浩平は無言で自分の指をからめる。
「指切った……え?」
瑞佳の指を離さず、浩平は言った。
「いやだ。このまま連れていく。どこだっていい。そうだ、遊園地にしようか……ふたりでジェットコースター乗って、観覧車乗って、コーヒーカップ回して……」
「痛いよ、浩平……っ」
力をゆるめた時に、指は切られた。
「もうチャイム鳴るよ。行こっ」
瑞佳は走り出した。
浩平はそこに立って、小さくなってゆく瑞佳の後ろ姿を見ていた。瑞佳が気配のない浩平のことを気にかかって振り返る時には、もう浩平は立ち去っていた。
浩平はただ、歩いていた。誰かとの接点、自分を繋ぎ止めてくれる対象を探して。

そして、はたと自分のしていることの無意味さに気付く。
自分が側にいたいのは瑞佳だ。いつなくなるとも知れない時間は、大好きな瑞佳と、自分のことを好きでいてくれる瑞佳と過ごすべきなのだ。
そう思うと、いてもたってもいられず駆け出していた。
瑞佳も一緒に連れていきたかった。もし戻って来られない世界へ行くのだとしたら、瑞佳と行きたい。それはわがままだろうか。
朝、逃げ出してきた校門から勇気を出して入り込む。毎日通っていたはずの学校は、その中にいる人間が自分のことを忘れているという確証ひとつで、ひどくよそよそしく見えた。
そして廊下を歩く浩平の脇を、友達だったはずの人間達が知らん顔で通り過ぎる。そんな辛い現実にも耐えながら、教室へ向かう。
ちょうど瑞佳が教室から出てきた。
「み……」
そこで、言葉は止まった。
瑞佳の視線が浩平の周囲をよぎる。その途中に浩平の上も通ってゆく。
一番見たくなかった現実が、浩平を打ちのめした。

瑞佳の眼は、明らかに浩平を知らない人間として捕えていたのだった。

その夜は、自分がもういる資格のなくなった部屋のベッドでこっそり眠った。由起子叔母さんに気配を悟られないようにこっそりと、ただ、疲れを癒すベッドを供給してもらっているありがたみを痛感しながら。精神的なダメージのせいでまともに疲れはとれなかったけれど、寝る場所があるだけでもかなり違う。

しかし、もうここにもいることはできない。

いずれ自分の家に見知らぬ人間が勝手に寝泊まりしていることに、由起子叔母さんは必ず気付くはずだ。今の状況を警察に理解してもらえるとも思えない。警察に突き出されたらおしまいなのだ。

由起子叔母さんが出かけてから、浩平は財布を持って家を出た。

9年間過ごしてきたこの街を歩いていると、あまりにせつなくなってくる。

あの店にだって入ったことがない。この道も通ったことがない。そのどれもが入り込んでさえいれば内包している物語を見せてくれたような気がした。

何かが、変わったかもしれない。しかしもう遅すぎる。

今にでもこの空へと消えてゆきそうな感じがするほどだった。自分自身でもその存在感が希薄になっているのが解る。そうなればなるほど、向こうの世界がリアルになってゆき、向こうの世界で過ごすのに支障がなくなってゆくのだ。

もう、それでもよかった。

向こうは永遠の世界なのだ。瑞佳の思い出を抱えて、その記憶を反芻して過ごせばいい。幸せな、何よりも幸せな記憶があるのだから、ただひたすら瑞佳のことだけを考えていよう。

何もない永遠の中でさえ辛くないほどの幸せを、浩平は憶えているのだから。

交差点に差しかかった。

浩平は横断歩道の向こう側に瑞佳がいるのを発見した。もう下校時刻なのだろうか。瑞佳と一瞬だけ視線が合った気がするが、全く瑞佳に表情の変化はない。

他人なのだ。

そんなことを最後に突きつけられたくはなかった。幸せなまま永遠の世界へ行けるのだと思っていたかったのに、それは叶わぬことらしい。

信号が青に変わる。

人波が動き出した。浩平もその流れに乗って歩き出す。
瑞佳もまた向こうから歩いてきた。
知らない人がすれ違う、どこにでもある風景でしかない。そうでないことを知っているのは浩平ひとりだけだ。大切な人だった瑞佳が全てを忘れてしまったことで痛みを感じているのは浩平だけなのだ。
一番大好きな人と、他人のようにして浩平はすれ違った。

後ろで、瑞佳が軽く声をあげたような気がした。
その瞬間、背中に温かいものが触れた。
「捕まえたっ、やっと……！」
どうなっているのか解らなかった。
「浩平、捕まえたよ」
信号が点滅を始める。
「また逃げられないように、知らん顔してたんだよ。駆け寄って、正面から抱き締めたかったけど……ぼろぼろ泣き出しそうだったけど、我慢して……っ！」
信号はとうとう赤に変わった。誰もいない歩道で、浩平と瑞佳のふたりだけが立ち尽く

していた。
「痛い……離してくれよ」
「嫌だよっ……またわたしを置いて逃げちゃうもん」
「大丈夫、逃げないよ……ただ」
正面から瑞佳を抱き締めたいだけなのだから。

瑞佳が浩平のことを思い出したきっかけは何なのか、いつから記憶の混乱があったのか、そんなことには興味はなかった。瑞佳が自力で浩平のことを思い出すほどに好きでいてくれたことが嬉しかった。ただ、それだけだった。
瑞佳もまた、浩平とクラスメートの奇妙な感じについて問い質したりはしなかった。それは今触れてはいけないことだったのだ。
どこにも行く当てのない浩平の為に、瑞佳はあまり行きなれない公園まで浩平を連れて行って芝生に座った。そうして、ごく自然にその膝に浩平が頭を乗せて横になる。
大好きな瑞佳の膝でのんびりと過ごせることが幸せだった。
眠ってしまうまで、こうしていていいのだ。
全てを話した訳ではないのに、浩平が消えてしまうことを瑞佳は何となく悟っているよ

うだった。何も訊かず、膝を貸してくれている。
前に行った店のお好み焼きが食べたいとか、些細なことを喋りながら暖かい風に吹かれながら、ふたり共がいつも通りの雰囲気でいようと努力していた。
いつでも側にいて笑いかけてくれた瑞佳。全ての季節に、全ての幸せな思い出に瑞佳がいた。過ぎ去ってゆくからこそ大切な、かけがえのないものだ。
「同じ時間を過ごせてよかったよ、瑞佳」
瑞佳は涙を堪えていた。無理やり涙を引っ込めると、何事もなかったように笑顔を作ってくれる。
「ねえ、笑顔でいられてるかな、わたし……」
「ああ、笑顔だよ」
「そう、よかった……」
ひどく眠かった。
浩平は眠気のせいで落ちそうになる瞼に構わず、いつもの世間話を続けようとする。
最後に、鳥の羽音がひどく大きく響いたような気がした。

第８章　永遠の終わり

一面の青い空だった。
ついさっきまで、瑞佳の膝から見上げていたやわらかく灰色がかった空よりも、ずっと澄んでいるどこまでも鮮やかな青だった。
春を迎えようとする時期の空ではなかった。
真夏の、眼に染みるほどにはっきりとした青空。
子供の頃、稚拙なタッチで絵日記に描いたのと同じ空だった。どこからか聴こえる蝉の声を聴きながら、浩平はその澄み切った青を見つめて立ち尽くしていた。
昔の浩平は、こんな風にただ空を眺め、蝉時雨を聴くことなどはなかった。やりたいことが無限にあった。そんなことに時を費やしている余裕などありはしなかったのだ。
そもそも、思い付きもしなかったかもしれない。走り回ったり、プールで泳いだり、友達と遊び回ったり、限りない楽しみだけがあった。
まだ妹のみさおが、幼稚園に通っていた頃のことだ。
みさおが小学生になってからの夏には、そんな無邪気な思い出はない。入学してしばらくたってから行われる、父親参観日の前にみさおは入院してしまったからだ。ラジオ体操もプールもそっちのけで、毎日みさおの病室へ通っていたのだから、空を見る余裕などあったとは思えなかった。

みさおには、楽しかった夏の思い出がちゃんとあっただろうか。浩平はふと、そんなことを考えた。
病院の窓から見下ろす夏の景色。遠くから聴こえる子供達の楽しそうな声。たったひとりで病室にいた時のみさおは、それが辛くはなかったのだろうか。今になってそんなことを思うと、あの当時の自分がどれだけ子供だったのかを痛感してしまう。
みさおが初めて『苦しい』と言ったあの日。
最後に告げられた感謝の言葉は、浩平が信じていたように、そして信じたかったようにいい兄であったことへのものでもあっただろう。しかし、それだけではない何かが透かし彫りのように浮かんでいるのを、今なら理解できる。
みさおは、浩平を傷付けたくなかったのだ。
自分の死が大切な兄を傷付けるのを少しでも回避したかったのだ。そして、自分の言葉を大切な兄に伝えておきたかったのだ。
(大人、だったんだな……みさおは)
今更ながらそんなことを思う。
この一瞬後に全てが終わりになってしまうとしても、大切な存在の為に、かけがえのない何かの為に頑張ろう。そう思ったからこそみさおは、あの最後の父親参観を求めたのだ

ろう。そんな気がした。
遅ればせながらもそれを自覚できたのは、浩平もまた、大切な存在を見付けたからだった。愛している、誰よりも大切な瑞佳。瑞佳と一緒に長い間培ってきた絆を、時の流れの中で変わってゆくものだからこそ大切なのだと知ったからだった。
もっともっと、大事にしてやりたかった。今まで泣かせてばかりだった。困らせてばかりだった。
瑞佳のことをもっと愛したかった。

浩平は照り付ける夏の太陽の下、ゆっくりと歩いていた。
こんな感じで歩き続けた記憶はない。あったかもしれないが、それでどこかへ辿り着いた記憶もなかった。その記憶を裏切ることなく、どれだけ歩いてもその景色は変わったようには見えなかった。
太陽は中天近い変わらぬ場所に輝いている。
蝉の声は決して止むことはない。
全く変わりはしないのだ。
(本当にここは『永遠』なんだな)

妙な形で納得してしまう。
暑くてたまらないがそれで日射病になることもなく、歩き過ぎて疲れることもなく無限に歩いていられる。汗もかいているが喉は渇かない。食べ盛りの浩平が昼時になっても空腹を感じない。
現実と照らし合わせてみると、おかしなことだらけだ。
この永遠の世界で浩平はずっと子供のままだった。子供の姿のまま、子供の傷付きやすさのままで、この永遠の世界の中で彼女と二人きりでいたのだ。
ずっと浩平の側にいてくれた少女。
いつまでも隣で待っていてくれた少女。
彼女との盟約を果たす為に浩平はこの世界までやって来たのだ。彼女に逢わなければならない。逢って言わなければならないことがある。しなければならないことがある。
そう思ったと同時に後ろから草を踏む音が聴こえた。
『やっと来てくれたんだね。ずうっと待ってた』
ひどく懐かしい声だった。
それでいて、最近にも聴いた記憶のある声だった。その人物が持っているらしい物が、ころころと音をたてる。

(違う。この音は)

この人物に関する記憶にまつわるものではないはずだ。この音は彼女ではなく、妹のみさおが持っていた玩具の音だ。

転がすと舌をぺろぺろ動かすカメレオンの玩具。

浩平はこの地で起こったこと全てを思い出しつつあった。

『……みずか』

振り返ると、すぐ側に初めて逢った時のまま何も変わらない、子供のままの瑞佳が立っていた。お気に入りの黄色いリボンもそのままだった。しかし現実の世界に残してきた、あの瑞佳本人でないのは一目瞭然だった。

子供の瑞佳……みずかの手には、かつてみさおが持っていたカメレオンの玩具が握られていたからだ。あの後どこかへ持ち出した憶えがないし、瑞佳がそれを引っ張り出してきたはずもない。

浩平がプレゼントにと渡してやった時から、決して身の回りから離さないで持ち歩いていた玩具だ。

病院からたった一度だけ、みさおが外泊を許可されて自宅に戻って来た日も、風呂に入るのにさえ玩具を持って入ったのだ。入院する前は玩具を持って入りたいなどと、だだを



こねたりしなかったのにだ。
当時の浩平は、あれがプラスチック製でよかったと思ったものだ。木製だったりしたら、間違いなく腐っていただろう。
その、みさおの玩具を持っている他は、外見的に出逢った頃の姿を留めているみずかが、浩平を見上げているのだ。かつてこの地を訪れた時には、浩平もみずかと同じくらいしか身長がなかった。それからこちら側の世界では浩平も決して成長したりしなかったのだ。
幼い頃に心の痛みに耐えられず、ただ永遠を望んだ結果だ。
ここにも瑞佳はいる。初めて逢った時のまま変わることのない、小さなみずかが。この世界でも瑞佳は苦しむ浩平を助けてくれていた。それが、移りゆく時間というものを度外視した、子供じみた形ではあってもだ。
子供であることに関して、そもそも永遠の世界の住人であるみずかには全く罪はないのだ。永遠の世界には成長も有り得ない。永遠ということはそもそもそういうことだ。
罪があるのだとしたら、この年になるまで流れてゆく時間の中で大切な、かけがえのない唯一のものを見つけられなかった浩平自身の幼稚さだ。みずかはただ、自分ができることをしてくれていただけなのだ。
浩平は笑いかけた。

『みずか……逢って、ちゃんと話がしたかった』
『うん』
みずかがこっくりとうなずく。
『約束通り、迎えに来てくれたんだな……みずか』
『永遠がほしいって、子供のままでいたいって、浩平がのぞんだんだよ』
盟約の証明。
失ったみさおの象徴を証拠としてカメレオンの玩具を持っているのだろう。
『そうだな』
どうやって永遠の世界で生きているみずかに、時間が熟成させてゆく大切なものについて理解してもらうことができるだろう。
してはもらえないかもしれない。
しかし、長い間自分の為に努力してくれていたみずかに、理解できないだろうと見くびったままで真剣でない言葉を告げるのは嫌だった。
それはあまりにも不実だと思った。もしみずかに理解できなかったとしても、浩平自身は精一杯理解を求める努力をするべきなのだ。
言葉を選びながら浩平は口を開く。

『キャラメルのおまけなんて、もういらなかったんだ』
『どうして？　いっぱいあそべるのに？　ずっとあそんでいられるのに？』
『大人になるってのは、そういうことなんだよ。流れてゆく時間の中で、自分の大事なものを見つけて守ってゆく。もちろん傷付くことだってあるけど、ひとつの場所に留まってちゃいけないいんだ。進んでさえいれば、必ず大切なものが見つかるんだから』
みずかは浩平の言葉を頭の中で反芻しているようだった。学校の宿題に取り組んでいる時の、小学校時代の瑞佳と似た表情だ。
しばらく考えて困ったように首を振る。
『わからないよ』
『俺は、どれだけ傷付いてもそれ以上に大切にしたい人を見つけた。それはすごく幸せなことなんだ。みずかが傷付いて心を閉ざした俺を大切にしてくれたみたいに、俺も瑞佳を……向こうでも俺を見つけてくれた瑞佳を大切にしたいんだ』
みずかは無言で浩平を見上げた。
ここにいることで、この世界で空を眺めて永遠を夢見ることで、浩平の心の平安が保たれていたのだ。そのことに感謝しなければならない。
心を閉ざした当時の浩平には、正しい意味で守ってくれる人間はひとりもいなかった。

残った家族であるはずの母は葬儀の後にも一度たりと姿を見せることはなく、由起子叔母さんは彼女なりのやり方で幼い同居人の為に尽力してくれはしたものの、心にまでは決して踏み込んではこなかった。

多分それもまた、みさおの死が与えた傷を癒さない方向へ向かう要因だったのかもしれない。瑞佳がいてくれなかったら、世界に関わってゆくことはなかったかもしれない。

みゅーの葬式で浩平や瑞佳と出逢ったばかりの頃の繭と同じように。その繭も今は自分の強さを取り戻し、新しい学校で戸惑いながらも頑張っているのだ。

その道を示してやることになった浩平が、歩き出せない訳がないはずだ。心の底ではそうすべきだと思っていたからこそ、瑞佳と奮闘してきたのだから。

自分自身の為に、助けてくれた大切な人達の為に、自力で進まなければならない。

浩平はもう、その力を持っているのだから。

『みずかは怒るかもしれないけど、俺はもう永遠はいらないんだ。一番大事な人のところへ帰りたい。これからを歩んでゆける世界に戻りたいんだ』

『……うん』

『怒るか、みずか』

浩平の口調は静かだった。

みずかはゆっくりと首を振った。
『そういうのってわからない。でも、浩平はその方がしあわせなんだね』
『ごめんな』
『多分浩平がこの世界にずうっといられないんじゃないかって、少しだけ思ってた。終わらせたがってたから。でもね、浩平のこと大好きなんだよ。それはほんとだよ』
浩平は慰めるようにみずかの小さな体を抱き締めた。このくらいしか背丈がなかった頃、みずかがこんなに小さく感じたことはなかった。
『ありがとう、みずか』
『なんでお礼を言うの？』
『傷付いてた俺を慰めてくれたのはみずかだよ。あの時みずかがいなかったら、俺は死んでいたかもしれないんだから』
『……よくわからない』
『解らなくてもいいんだ。とにかく、ありがとうと言いたいんだ』
『ふうん』
少し不思議そうに、それでもみずかは浩平の背中に手を回した。
子供独特の細くてまっすぐな腕がいとおしかった。

『みずかは、過ぎてゆく時間を見たことはないのか？』
『うん、ないよ』
そう言えばひとつの場所に留まっている間には、決して時は移っていなかった。青空と夕焼けを、同じ場所で見たことがなかった。今になってそれに気付く。
みずかに、それを見せてやりたい。
流れる時が美しいということを、一番解りやすい形で知らせたかった。
今の自分ならそれができる。
『見せてやるよ』
浩平はみずかをやわらかな草叢に座らせると、肩を抱いた。
小さな男の子の姿では決してできないポーズが楽にできる。あの頃の自分にとって、高校生は充分『大人のおにいちゃん』だった。大きくなった今ならみずかの体を安定させるのに全く苦労はしない。その代わりみずかにすっぽりと抱き締められるということはもうできなくなっているのだ。
浩平は頭の中で考えた。
どこまでも澄み切った青空が曇り、あたたかな雨が肌を濡らすところを。虹が出て、再

び晴れ渡るところを。そして、ふたりで見た美しい赤系のグラデーション。
そして最後には空は暗くなり、夜空に散りばめたような星が輝く。
みんな見せてやりたかった。
心の移り変わりの中で、大切な人を見つけてゆくことの素晴らしさを理解してもらえなくても、この空の変化の美しさは必ず解るはずだ。
浩平の為だけに存在した、永遠しか知らない少女に対して、それくらいのことはする義務があるはずだと浩平は思っていた。
『みずかが飽きるまで、この空を見ていような』
『うん』

花が咲いて散り、空が高くなる。夏の海を見つめる。秋の黄昏の中、ふたりで影踏みをする。舞い飛ぶ雪を掌で受ける。それが解けてゆくのを見ていた。
朝が来て空が白み、青い空をただ見上げ、夕焼けの赤で染まる互いの頬を見て、星の瞬く夜を迎える。
あの冬の日に瑞佳とふたりで見た思い出だった。
はあーっ、と白い息を吐いてみせた瑞佳の笑顔が浩平の脳裏に浮かぶ。

みずかにも見せてやりたかった。
移りゆく時の一瞬一瞬が、かけがえのないものだと伝えたかった。
みずかは、夜空を見上げながら歓声をあげた。闇に散らばった無数の小さな光の粒を背景に少女の後ろ姿が浮かんでいるのが、ひどく非現実的な気がした。
『天の川……手ですくえそう』
『ああ、綺麗だな』
『ほんとうに、綺麗だね』
みずかが振り返った。
みずかの屈託のない笑みを今まで見たことがなかったことに、浩平は気が付いた。確かに笑いかけてはくれていた。その笑みに浩平は慰められたはずだ。しかしそれは、自分が嬉しかったり楽しかったりで笑うのとは違っていた。
本当にただ、守られてきたのだと痛感する。
しかし、今の笑みは現実の世界にいる瑞佳と同じものだった。浩平までも嬉しくなってしまいそうな瑞佳の生き生きとした笑みだった。
『ありがとう、浩平。うれしかった』
『……おい』

花が咲いたような笑みを浮かべたまま、みずかの姿が薄らいできていた。
浩平は慌ててみずかの肩に手を置こうとする。しかし、その手はみずかの体を通り抜けてしまう。
『こういう気持ちなんだね……ありがとう』
声もまた耳に届かなくなりつつあった。
薄らいできているのはみずかだけではなかった。その後ろにある数え切れないほどの星たちも、夜の空も、全てがぼやけてきていた。
浩平自身の姿もまた、消え果ようとしていた。
(このまま俺、消えるのか?)
そんな脅えを感じる前に思い浮かんだのは、大好きな瑞佳の笑顔だった。
瑞佳の笑顔が見たい。
意識が薄れてしまいそうな浩平が最後に考えていたのは、瑞佳の笑みを見る為に、現実の世界に戻ってゆきたいということだけだった。
『浩平』
大切なひとが呼びかける声が胸に響いたような気がした。

エピローグ

「……浩平？」
いきなり軽くなった自分の膝を見下ろしながら、瑞佳が囁いた。
最初から瑞佳ひとりしかいなかったかのように、公園は静まり返っている。世界全部が瑞佳に対して嘘をついているような気がした。

しっかりと確証があった訳ではなかった。
自分の周囲から確実に、折原浩平という少年の気配が消えてゆくのに、瑞佳が気付いた頃にはもう、どうしようもないような状態だった。誰よりも浩平のことを思っているはずの自分自身からでさえ、彼の記憶が曖昧にされてゆく。浩平のことを認識できなかった時期さえあったような気がする。
潮が引くようにゆっくりと、浩平の気配は薄められていったのだ。
『うっす、オレ、バニ山バニ夫！』
自分の部屋の奥、一番大切な宝物だけを集めて飾ってある場所に置かれた、新しいぬいぐるみ。腹部を押して流れ出る少年の声に、殴られたようなショックを受けたのが、浩平を思い出すきっかけだった。
どうして忘れ果てていたのだろう。

ずっと自分が大切に思ってきた、いつどこへ行ってしまうとも知れない雰囲気の幼なじみ。寝起きの悪い彼の為に毎朝、起こしに行ったはずなのだ。そうして、幼なじみから恋人に変わり、別れ、友達のような恋人のような居心地がよくて曖昧な関係を続けていた少年。いつもいつも彼のことばかり考えていたほどに、瑞佳の心の中心にいた人物だったというのに。

折原浩平。

他の誰が忘れても、自分だけは忘れてはいけないひとなのに。

(浩平……また、わたしを置いていっちゃうの?)

いつも瑞佳は浩平に置いていかれるような気がしていた。

女の子を混ぜてくれない男の子同士の遊び。遅刻寸前で学校へ駆け込む時、速くて追いつけなかった日。つきあい始めた頃の冷たい背中。あの星の夜に傷付いたように駆け去る後ろ姿。いくつもの過去が思い浮かぶ。

しかし、今度は極め付きだ。

浩平はこの世界のどこにも存在することなく、なかったことのように世界は進んでゆく。その浩平がいないのが自然な世界に、瑞佳は取り残されてしまうのだから。

もう話すこともできない。

ふざけあうことも、触れることも。
そう思い知った瞬間、瑞佳はひたすら浩平を探し始めた。
既に旧知の仲になっている浩平の叔母、小坂由起子からも、浩平の存在は消え去ってい
た。ただ瑞佳を親しい年下の知人だとしか認識していず、浩平に連れられて行って紹介さ
れた出逢いは消え去っていた。
クラスメートも、窓際の一番後ろの空席のことを誰も気にしなかった。いつもつるんで
いた住井も、じゃれあいの喧嘩をしていた留美も、瑞佳の親友である佐織も、浩平のこと
を憶えていなかった。
浩平の尽力がきっかけで学校へ行くことができるようになった繭も、すっかり浩平のこ
とを忘れ去っていた。
誰からも浩平の記憶が消え去っていることを悟った瑞佳は、知っているかぎりのところ
を走り回って浩平を見つけ出すつもりでいた。
偶然なのだろうか。あの時横断歩道で浩平を見つけたのは。
瑞佳を見て、ひどく辛そうな笑みを浮かべた浩平が、その表情を消して瑞佳の後ろへ視
線をやった時、もう一度置いていかれるような気がした。
呼びかけたらそのまま いなくなってしまいそうだった。

すれ違いざまに浩平を抱き締めることができた瑞佳は、ぎりぎりで浩平の全てを失わずに済んだのだ。済んだのだと信じたかった。

(必ず、戻ってくるよね……浩平)

浩平が気持ちよさそうに瞼を閉じていた膝をしばらく見つめ、寂しそうに立ち上がった瑞佳は、無人の公園から立ち去ったのだった。

高校二年の終わりが浩平のいないまま過ぎてしまった。

三年生の教室にも浩平の姿は現れなかった。最初からそんな生徒はいないと言わんばかりに生徒数がひとりだけ減っていた。進路分けは2年の時に済んでいるのでクラス自体は持ち上がりなのだが、誰もそれに気付きはしなかった。

周囲は浩平の存在がいきなりかき消えても、全く変わらなかった。

アドレス帳にはちゃんと浩平の住所と電話番号が記されている。

しかし、そこにかけても浩平が出ることはなかった。

仕事で忙しい由起子もめったに自宅に戻りはしないので、ただ留守番電話に切り替わるだけの話だった。

何度か、浩平に繋がりそうな話題を持ち出して、それとなく浩平を思い出してもらおう

と試みたこともある。しかし誰もが途中までは確かにその件を思い出してはくれるのだが、肝心の浩平の話題になると、途端にヴェールがかかったように曖昧になってしまっていたのだ。

その度に悲しい思いをするので、瑞佳も浩平の話を持ち出すのは自然とやめていた。

浩平がいなくなった後の生活は、これといって変わることのない普通の生活だった。瑞佳が意図してそういう生活をしようと努力していた、ということもある。

世界から消え去る寸前の浩平は、必死で何気ない普段の生活をしたいと望んでいたのだから。瑞佳とふたりでそんな風に過ごしたがっていたのだから。

前向きに、日々を生きていたかったし、現実にそうしていた。

真面目に授業を受け、部活に精を出し、音大受験の為にチェロの特訓もした。もちろん、それだけではなく学校の行事にもしっかりと参加し、友達とも可能な限り遊ぶ時間を持った。

絵に描いたような学園生活だった。

それはそれでとても充実している時間だった。

しかし、気持ちだけは現実に取り残される。何かを待ち暮らす時間は、あまりにも進むのが遅く感じてならない。

浩平なしで培われてゆく時間が長くなればなるほど、空虚さは増してゆく。
時々、永遠に同じ日の中にいるような錯覚さえ抱く。
変わらない思い出の中へ溺れてしまいたくなる。
浩平のいない現実の方が悪い夢で、夢から醒めればすぐ側には浩平がいて、いつも通りに明るく振る舞ってくれるのだと思いたかった。
そんな希望を抱けば抱くほど、現実世界での浩平の不在が重くのしかかる。それは確実に瑞佳の心を傷付けていた。
一学期が過ぎ、二学期になってから、瑞佳は浩平がくれたうさぎのぬいぐるみを学校へも持ち歩くようになった。もうひとつ小さな鞄を用意して、それにピンクのうさぎを連れて歩く。
佐織などは、存在しない少年の象徴として持ち歩くうさぎのぬいぐるみを見るたびに、一瞬だけひどく痛ましそうな表情を浮かべることがある。決して、直接にそんな子はいないんだよ、現実を見ようよ、などと言いはしないが、瑞佳の心の中にある少年の影の形をした傷を癒してあげたいとは思っているようだった。
瑞佳の気持ちがどうであれ、瑞佳のことを好ましく思う男子生徒も多かった。
何人の少年達に『ごめんなさい』と告げたか解らない。それが二桁を超える頃には長森

瑞佳は難攻不落、という評判が立っていた。

クリスマスの夜、今年は誰とも予定を入れなかった。

いつもなら佐織達と一緒に持ち寄りパーティをしてはしゃぐのだが、そういう気持ちにもなれなかった。たったひとり、自分で焼いたケーキにろうそくを立てて祝うクリスマス。浩平へのプレゼントも用意して、もうひとりの主役の登場を待ちながら夜を明かす。

（浩平……）

こんな風に待ち続ける日々は辛すぎる。

浩平が座るはずのクッションには、彼の主人の代わりを勤めるように、うさぎのぬいぐるみが座っていた。瑞佳は向かい合うぬいぐるみの腹部を押して浩平の声を求める。

『長森、元気なくてもそいつには元気のいい笑顔を見せてやってくれ。そうすれば、馬鹿だからそいつは幸せでいられるんだ。な、頼むぜ』

（頑張ってる。頑張ってるよ）

心の中で浩平に返事をする。

『そして、その馬鹿がいない時でも笑っていろよな、長森。引きつりそうな限界の笑顔で笑ってろよな。でないと、あいつが戻ってきた時に寂しがるからな。以上、バニ山バニ夫

が送る、叱咤激励の言葉でした。さらばぴょん！』
（笑ってるよ、浩平……でも、わたし限界だよ。ねえ、戻ってきてよ……ほら、クリスマスだよ。わたし、浩平にケーキ作ったんだよ……）
涙がこぼれそうになる。
何度もまばたきして無理やり涙をごまかした。
笑ってい続けていてくれ、という浩平の願いは、瑞佳の精神力を明らかに削っていっていた。必死で笑みを浮かべるが、どうしてもそれは泣き顔に見えてしまう。
たったひとり、うさぎのぬいぐるみに笑いかけようと努力し続ける瑞佳は、あまりにも痛ましかった。

年が変わっても浩平は戻ってきはしなかった。
浩平がいない生活に体も心も馴染んでしまいそうになる。
もうすぐ卒業だった。第一志望の音大に合格し、4月からは瑞佳は大学生となる。そうなってしまえばこの学校の制服を着たまま消えた浩平のことを、学校で待ち続けることはできなくなってしまう。
浩平を待っている資格さえ奪われてしまうような気がした。

「俺……長森さんのことが好きだよ。よかったら卒業してからも逢ってほしいんだ」
屋上に呼び出された瑞佳が、住井護から告白されたのは、空気の中にかすかに花の香りが漂い始める頃だった。
どこかいたずらっ子を思わせる顔に、緊張と愛情がはっきりと浮かんでいた。
いつか言われるかもしれない、そう予測していた相手だった。
佐織がみんなでどこかへ行く際に遊び相手を調達する時、いつからか必ず住井が顔ぶれに入っているようになって数ヶ月。住井がさりげなく自分を大切にしてくれているのが解る。クラスの生徒達も何となく、瑞佳と住井をカップルぽく扱うように雰囲気が変わってきていた。
他の女子を見るのとは違う、やさしい眼だった。
普段のいたずらっ子のような言動とは一線を画した、誠実な態度だった。
瑞佳が安心できるように、いろいろ気を配ってくれていた。好ましい少年なのは確かだった。実際、瑞佳も好意を持っている相手だ。
しかし、瑞佳はかつて住井と親しかった人物の空白を感じてしまうのだ。
そのひとは気遣い方が違った。歩き方も声も素振りも何もかも。
たったひとりの人の空白は、大きな痛みとして瑞佳の中にあった。このまま住井にうな

ずいてしまえば、その空白が癒されるまで、癒された後もやさしく寄り添ってくれるに違いなかった。

このままうなずいてしまえば。

瑞佳は考え過ぎて眩暈を起こしそうになりながら口を開いた。

「住井君、ごめんね。わたし、待ってるひとがいるんだ」

「その、うさぎの……彼?」

あなたの親友だったはずのひとだよ、とは口には出さず、曖昧に微笑んでうなずく。

「わたし、みんなが心配してくれてるの、知ってるよ。いもしない男の子のことずっと待ってる状態なんか絶対よくないって思ってくれてるのは。住井君のことはすごくいい友達だと思ってる。でもね、わたしは待ちたいんだよ……浩平でなきゃ駄目なんだよ」

「……いや、俺も長森さんがそう思ってるのは知ってたんだ。でもさ、黙って諦めるのは嫌だったから、ちゃんと言いたかったんだ」

いない少年を理由にして断わる瑞佳に気を害することなく、住井は笑ってくれた。

「でも、もし待つのをやめようかな、って気分になったら、いつでもそう言ってくれよな」

「……ありがとう」

始業のチャイムが鳴る。

住井と瑞佳は教室まで走った。
必ずスピードを落として瑞佳が遅れないように調整してくれる住井の走る姿を見て、浩平との差を思い知る。わがままで、いつもいつも起こしてもらっているのに、気分によっては瑞佳を見捨てて全力疾走して行ってしまう浩平の後ろ姿。
住井が教室のドアを開けてくれる。次はホームルームだった。大抵ちゃんとした時間には来ない髭は案の定来ていなかった。
「長森さん……今日はサンキュ。ちゃんと聞いてくれてさ。折原のこと待ってるって知ってたはずなのにな」
「えっ？」
「じゃ」
どういうことなのか。
住井の言葉の中に、本来混じっていないはずの固有名詞が入っていた。
しかしそれを問い質そうとした時には、もう住井は自分の席についてしまっていた。
仕方なく瑞佳も自分の席の方へ歩き出す。今日は日直だったことを思い出した瑞佳は、住井に呼び出された時のまま、広げたまま放ってあった日直日誌を見直した。
「おい、どうしてたんだ。久しぶりだなあ」

「病気でもしてたのか？」
背後から何人かの生徒が驚いたような声をたてるのが聴こえた。
何があったのだろう。
「おい、待てって」
その人物が瑞佳の方へやってきたらしい。すぐ前に誰かが立った気配がある。学級日誌の端から男子生徒の制服が見えた。
わざとらしい咳払いをする。
瑞佳の記憶にある声だ。決して忘れることのなかった、少しだけ無愛想に聴こえてしまう独特の声。その声が少し困ったように、瑞佳に語りかける。
頭が真っ白になってしまって、まともに物を考えられない。
その人は、ここにいるはずのないひとだった。本来ならいなくてはいけないのに、ずっと長い間いなくなっていたひとだった。
「あのな、瑞佳」
瑞佳は顔を上げた。
浩平だった。
いなくなった時と寸分変わることのない姿の浩平が、はにかんだように瑞佳の前に立っ

ていたのだ。そして何かを決心したように口を開く。
「ずっと前から好きだったんだ……俺と、もう一度、つきあってくれっ！」
瑞佳が息を呑んだ。
（本当に、こんな恥ずかしいことを正面きって言っちゃうんだから……）
頬が紅潮してくるのを感じる。
あの、去年のクリスマス前の告白と、シチュエーションだけは同じだった。しかし、他の全てが違っていた。
瑞佳が何よりも望んでいた言葉だった。
そしてそれ以上に、浩平が本気でその言葉を告げてくれているのが理解できた。
公衆の面前で、という考えは浩平にも瑞佳にもなかっただろう。瑞佳は涙がこぼれそうになるのを堪えて、浩平に笑いかけた。泣いてしまったとしても、今日なら最高の笑顔がこぼれ出る。そんな確証があった。
ずっと待ち続けていた人の、ずっと一緒にいたい人の言葉。
瑞佳は何もためらわなかった。
涙は止められなくても、今の自分は一番幸せな顔をしているはずなのだから。告げる言葉はもう決まっていた。

浩平が戻ってきたら訊きたいことがたくさんあったはずだった。しかし、今浩平を眼の前にすると、質問などは何も浮かんではこなかった。

口をついて出たのは返事の言葉。

「うんっ、いいよ」

瑞佳が浩平に抱きついたのと、浩平が瑞佳を抱き寄せたのが同時だった。

クラスのどよめきを受けながら、瑞佳は誰よりも大切な浩平の体温をただ、感じていたのだった。

了

あとがき

こんばんは。
お元気ですか、館山緑です。
先月の「MOON.」に続いて、タクティクスさんから発売されましたWindows95専用ゲーム「ONE～輝く季節へ～」のノベライズ化です。
お話としては、6人いる女の子のうち、幼なじみの長森端佳ちゃんをヒロインにしたバージョンになります。他にも七瀬留美ちゃん、椎名繭ちゃんが元気に登場しています。
今回ちゃんとは登場していない女の子達の話も、いろいろ考えています。
もしかしたら続刊で、作中「あれっ？」と思うほど少ししか出ていないあの彼女がヒロインになっているかもしれません。その時は本屋でうんうん、とうなずいてやって下さいね。
「ONE～輝く季節へ～」は、どの女の子のお話も泣きながらプレイしました。
どの女の子もひたむきで、すごく共感できる子達です。そして彼女達が恋をすることにな

る浩平君も、本当にまっとうな子です。いわゆる女の子を攻略してゆくゲームの主人公ってもう一人の自分を反映させるんだよ、というキャラに限って「何こいつ？」という奴だったりすることが時々あるんですが、そういう点で「ＯＮＥ～輝く季節へ～」は、心が通じ合ってゆく過程が気持ちいいゲームで本当に楽しかったです。

向こうの世界を書いてしまったことは、多分賛否両論あるんじゃないかと思います。

ただ、折原浩平君の物語を小説という形にするのなら、必ず一度は記されなければならない箇所じゃないかな、と個人的には思います。そのことが吉と出るか凶と出るかは、読者の皆さんに判断していただきたいと思います。

もし、向こうの世界をもう一度書くことがあるとしたら、また違うやり方になると思います。そこで、また彼らに逢うことができたらいいですよね。

そんな希望を密かに抱いているところです。

今回は新作ゲーム、しかもリアルタイム話題作というだけあって、今までにないプレッシャーがありました。移植作なら元のゲームの評判を聞けますし、発売してある程度たっていれば感想は定着しています。でも、今回は入ってくる情報、感想が生のもので、どきどきも

のの体験でした。リアルタイムってこういうことか、と妙に感動してしまいました。
　この小説が「ＯＮＥ～輝く季節へ～」のことを大事にしている皆さんの中で、少しでもいいな、と思ってもらえたら凄く嬉しいです。

夜風騒ぐ　八月

館山　緑

ONE～輝く季節へ～

1998年8月31日　初版発行

原　作　Tactics

著　者　館山　緑

発行者　髙橋　豊

発行所　株式会社ムービック

〒173-8558 東京都板橋区弥生町77-3

Tel. 03-3972-1992

装　丁　柏木秀博

黒木三郎（デザインワーク）

9784896013887
1920293008578
ISBN4-89601-388-3
C0293 ¥857E
定価／本体価格857円+税
発行／株式会社ムービック
8320-0331-WA01

ONE
～輝く季節へ～